

だ其の根本思想となす所は前文論する所の如し。

楊朱

第一節 楊朱の傳

此の時に當り社會の亂を見て、之れを救はんとはせず、却て自己一身を善くせんとする者あり。誰れぞや。楊子は是れなり。楊子の傳詳かならず。唯だ列子中の楊朱一篇は、後人の手に成りし者とす。此くの如き思想の當時に存在せしことは、孟子莊子列子の中に散見する。楊子に關する言に由て明かなり。是の故に楊朱一篇より其の哲學思想を陳述せむとす。儒墨が天下を維持し、道德を恢興するを以て、唯一の動機となせしに反し、老莊の一派は大觀し、世間に醒醒たらざるを以て主義とせり。然れども同く社會を經綸せんとするに在り。楊子は此派に系屬し、宇宙の過程を攻求し、更に快樂主義を主唱せる者なり。

第二節 人生觀

楊子は列子の思想と同く、萬物に付いて必然的なる者と觀察し、以爲らく、凡そ一切現象は必然的自然的にして自己の意思に由て左右せらるべき者にあらず。以爲らく、皆天地自然にしてのみ。故に曰はく、
賢愚貴賤非所能也。臭腐消滅亦非所能也。故生非所生。死非所死。賢非所賢。愚非所愚。貴非所貴。賤非所賤。然而萬物齊生齊死。齊賢齊愚。齊貴齊賤。十年亦死。百年亦死。

と。然り而して萬物は其の死するや則ち皆是れ壤土に歸するのみ。然れども萬物亦自ら一定の運命あり。生死も亦一定の運命あり。此の運命は如何んともすると能はざるなり。故に又曰はく、
理無不死。以斷久生可乎。曰。理無久生。生非貴之所能存。身非愛之所能厚。

と。此の故に彼れは人生を朝露の如く皮相的に觀察し、以て處世法上、快

樂を貪るの最も得策なるを信せり。曰はく、

太古之人知生之暫來。知死之暫往。故從心而動。不違自然。所好當身之娛。非所去也。故不爲名所勸。從性而游。不逆萬物。所好死後之名。非所取也。故不爲刑所及。名譽先後。年命多少。非所量也。

晏平仲問養生於管夷吾。管夷吾曰。肆之而已。勿雍勿闕。晏平仲曰。其目奈何。夷吾曰。恣耳之所欲聽。恣目之所欲視。恣鼻之所欲向。恣口之所欲言。恣體之所欲安。恣意之所欲行。夫耳之所欲聞者音聲。而不得聽。謂之闕聰。目之所欲見者美色。而不得視。謂之闕明。鼻之所欲向者椒蘭。而不得嗅。云云。意之所欲爲者放逸。而不得謂之闕性。凡此諸闕。廢虐之主。去廢虐之主。熙々然以俟死。一日一月一年十年。吾所謂養。拘此廢虐之主。錄而不舍。戚々然以至久生。百年千年。萬年。非吾所謂養。

と。以て其の淺薄なるを見るべきなり。彼れは只に耳目口鼻の慾を恣にせむとするに在り。然れども彼れは此の慾を満足せんとして身を勞するを戒めたり。曰はく、

原憲寢於魯。子貢殖於衛。原憲之寢。損生。子貢之殖。累身。然則寢亦不可。殖亦不可。其可焉在。曰。可在樂生。可在逸身。故善樂生者。不寢。善逸身者。不殖。

と。然れども彼れが快を求むるは多少の根據なきにあらず。曰はく、世事は苦多し、人生最も長壽を得たる者亦僅かに百に過ぎざるなり。而して能く百歳の壽を得たるものは亦千に一なし、設ひ之あるも孩抱より昏老に迷る、幾んど其半ばに居る。夜眠の弭むところ。晝覺の遺るところ。又幾んど其の半に居る。痛疾哀苦。又幾んど其の半に居る。而して快樂を得るは實に稀なり。人の性は素と何をか欲する、唯だ耳目の快を得るを欲するのみと。一身の逸樂を欲するや見るべきなり。然れども彼れは一方に於いて慾の人を苦ましむる者あるを言へり。何んぞや。壽となし名となし位となし貨となし。以爲らく、此四慾ある者は、鬼を畏れ、人を畏れ、威を畏れ、刑を畏るゝものにして、楊子は此を名づけて遁人となせり。苟も命に逆はざれば何んぞ名を羨まん、勢を要せずば何んぞ位を羨まん。

富を貪らざるは、何んぞ貨を羨まん。楊子は此を名けて順民となせり。故に順民と遁人との別は、此の四慾の有無に關する者なり。是の故に楊子が本意は社會を離れて個人的に快樂を得むとするにあると、又以て推すべきなり。

彼れは平民的に其の慾望を満足せむとするに在るなり。然らば彼れは社會に望みなきかと云ふに、社會に望みなきが如し。曰はく、

伯成子高不以一毫利物。舍國而隱耕。大禹不以一身自利。一體偏枯。古之人損一毫利天下不與也。悉天下奉一身不取也。

と又曰はく、

忠不足以安君。適足以危身。義不足以利物。適足以害生。

と。蓋し亂世に當て社會の維持に意なく、忠義の身を危ふし、生を害するを知り、君に仕へず、又社會の人と義理を交換せざらむとするに在り。此れ實に非社會的の考へにして、至て下劣なる者なり。

彼れは此く一身の快樂を求めつゝ、人生の苦多きを見て、久生の苦を厭

へり。然れども生死は自然の命あるが故に、當さに之れに一任すべしとなせり。終りに臨み、彼れは人間死したる以上は屍は之れを水火に投ずるも可、土中に埋むるも可、厚葬も可、薄葬も可、之れに重きを措く可からずとなせり。

結論

要之、揚子は社會の亂に逢ふて非社會的なる主義を取りて、個人をして其の自然の慾望の快樂を得しめんとするに在り。然れども此の説は當時頗る蔓延せり。故に楊墨と并稱せられたり。

鷓冠子

第一節 鷓冠子傳

此く思想家の並立する時に當り、諸種の思想を調和して、社會經綸の策を講せる者之れを鷓冠子となす。鷓冠子は隱君子なり。鷓の羽を取り、之

を冠に付せしより、人號して鵠冠子と曰ふ。其の書に據て見れば、趙武靈王、淖襄王と時を同ふせし如し。乃ち略ぼ孟子、莊子と世を共にし、稍之に先だてり。鵠冠子の書に曰はく、

今世之處側者皆亂臣也。其智足以使士不達。其言足以滑政。其朋黨足以相奪於利害。知備

と。時勢を憤るの念、此に於て見るべきなり。是の故に韓退之は、讀鵠冠子を著はし、嘆じて曰はく、

使其人遇其時、援其道而施於國家、功德豈少哉。

と。鵠冠子は古書讀み難き者の一なり。鵠冠子の書中にある法の字は法律の義ならず、蒼頡作法と云ひ、百法と云ふを以て見れば、凡そ規則禮法の如き定形あるもの皆法なり。其の説列子の道の觀念あり。儒家の天に則るの觀念あり。楊子の萬物定命に類する所あり。要する所は、天地造化の必然的なるを説き、政治も亦之れに準據すべきとなすなり。

第二節 鵠冠子の則天論

天地の生成せし淵源を尋づぬるに先づ一なる道あり。是れ氣を生じ來る。氣既に生ずる時は、其の中に差別の端あり、之を意となす。意は其の本性を満足せんとして發動す。此に於て意の活動すべき計畫あり、名けて圖となす。此圖ある時は、意は活動して其の計畫を充填す。此の如く意が其の圖を充填する時は、各個區別すべく、隨て名あり形あり。既に形ある時は、其の性に應ずる事あり、事ありて而る後、一定の規則の行はるゝを見る。此の規則之を名けて約となす。此れ時節の生ずる所以なり。時節既に生じ、元享利貞各其の用を遂げ、而して後萬物生成するを得、萬物生成而る後一切萬事出づ。故に萬物雜多なりと雖も、畢竟一の道に外ならざるなり。鵠冠子其狀を述べて曰はく、

莫不發於氣、通於道、約於事、正於時、離於名、成於法者也。環流第五

と。故に一の道を擧ぐれば、天地も亦隨て來る。曰はく一之法立而萬物者

來屬上と彼れは此くして天地の時節の自然なるを證明せり。曰はく

天文也。地理也。月刑也。日德也。四時檢也。度數節也。陰陽氣也。五行業也。五政道也。五音調也。五聲故也。五味事也。賞罰約也。此皆有驗。有所以然者。隨而不見其後。迎而不見其首。夜行

天に日月あるが如く賞と罰とを行ふべく四時あるが如く人民を檢すべく五政あるが如く道を行ふべきなり。然る時は功成り事遂げ其狀を知ることなし。此の政治を名けて夜行となす。聖人の貴尙する所なり。夜行の政治に於いて其渾沌たるより見れば無形なれども其の他方面より見れば分あり。鶡冠子は之を大敦と名づけたり。曰はく

無形有分名曰大敦。流環

鶡冠子の根本思想は畢竟天に象りて以て政治を施行せんと欲するに外ならず。此を明言する者は天則六卷上道端五卷上度萬四卷中王鈇七卷中泰錄十三卷中等なり。乃ち鶡冠子が根本思想の此に在るを見るべきのみ。鶡冠子は獨り大體に於いて天地を模倣するのみならず、政府の組織軍隊

の編成に至る迄皆之れに則るべきものとなせり。故に人材を登用する自然の象に則らずむばあらず。仁人を左にし忠臣を前にし義臣を右にし聖人を後にす。君主は南面するのみ。左は東なり春生なり前は南なり夏功なり右は西なり秋成なり後は北なり冬藏なり。先王之を用ひ高くして墜ちず。安くして亡びず。萬物の本根天地の門戸なり。端。鶡冠子は此の道を名けて王鈇となせり。或は泰一となせり。博選。王鈇。泰鴻諸篇説く所少異同ありと雖も所謂王鈇とは人主が政治を行ふ所以の道を言へるに外ならず。

結 論

要するに鶡冠子は天に則らむとするに在り。此の點に於いて明かに儒教より出でたる者なり。彼れは人道兵を先きにすと謂へり。然れども所謂兵なる者は禮義忠信なり。近佚其の言兵家に近きが如くなれども意は則ち儒教と異ならず。鶡冠子の道は天下を治むるに在り。天地の化成す

るが如く萬民をして其處を得せしめんとするに在り、其の道を説くや老子に類すと雖も治道を説くに至りては孔子と相距る遠からざるなり、只天地に則るの細且つ詳なるに在り。

第三章 戰國七雄となる

小は大に并せられ、弱は強に嚙まれ、諸侯存する者愈々少く、周の威烈王以後を戰國の世となす。秦楚燕齊趙魏韓の七大國の存するのみ。宋魯鄭衛の如き滕薛曹杞の如きは微にして七國と衡争すると能はず、幾くもなくして強國に并吞せられたり。

趙魏韓は固と晋の三卿なりしが威烈王の二十三年王命を以て列侯となりし者なり。韓の昭侯は申屠嘉を用ひ、魏の文侯は木子夏、田子方を用ひ、吳起、樂羊、西門豹は軍事を司る。趙は武靈王に至りて中山を滅し、北狄を破り、林胡を降し、樓煩を攘ひ、雲中九原より秦の背を制せり。其の子惠文王は廉頗、藺相如を以て將相となし、威大に振ふ。其の子に至りて大に

衰ふ。燕は東邦の國にして西に出る能はず。昭王の世に至り、郭隗を得て相となし、人材を愛用す。樂毅は魏より之き、齊の七十餘城を降さしむ。是に於いて齊の王孫賈幼主を助けて田單を擧げ用ひ、火牛の計を用いて一時に齊の七十餘城を復す。

申子

韓昭侯を干めし申子は著書二卷あり。申子と曰ふ。無爲の政を論じて曰はく

因者君術也、爲者臣道也、爲則擾矣、因則靜矣、因冬爲寒、因夏爲暑、君奚事哉、故曰、君道無知無爲、而賢於有知有爲、則得之矣。

此れ老子の思想なり。此の概念より(一)能に應じて職を授くると及び(二)法に由るとの必用を論せり。曰はく

堯之治也、善明法察令而已。聖君任法而不任智、任數不任說。黃帝之治天下、置法而不變、使民安樂其法也。

と申子の卒する迄周顯王三韓敢へて敵のために犯されず。其の書申子は玉函山房輯佚書中に在り。

孫 武

齊の人なり。吳王闔閭に事へて將となる。西強楚を破り。北齊晉を威す。吳國の威名諸國に著はる。著はす所孫子十三篇あり。文章簡潔にして明晰。支那兵法の白眉たり。

吳 起

衛の人なり。兵を能くす。嘗て曾子に學び。魯君に事へ。後魏の文侯に事へ。又楚に事へて將となり。南百越を平げ。北陳蔡を并せ。三晉を却け。西秦を伐ち。諸侯楚の強きを患ふ者皆吳起の功なり。今吳氏六篇あり。

縱横の説

此く戰亂の時に乘じ。諸侯の間に馳駢し爲めに權謀術數に由りて以て勝ちを制せんとする者あるは當然の理にして鬼谷先生の如き其の人なり。

鬼谷先生

鬼谷先生の書今ま鬼谷子上下二卷あり。衆生總攝等の語あるを以て見れば其の佛教傳來以來の作なるや明かなり。其の書の主意の在る所は左の如し。況んや孟子張儀を云ひて而して鬼谷子を云はざるに於いてをや。

(一)道。道は天地を作成し彌綸し居る者にして其の妙々不可思議なる所より之れを名けて神靈と曰ふ。天地間の現象は皆な一定の法則に由りて司配せられざるなし。之れを知る者之を聖人と曰ひ。眞人と曰ふ。
(二)心。此の道を知るは我に於いては心の作用なり。心は神靈を司り居る者なり。闔而して心の發するや口に由る。志意喜欲思慮智謀皆な口な

る門戸より出入する者なり。心を出入せしむる際に於いて最も謹みを致さざる可からず。

鬼谷子が高尙なる道を論じながら此く心の出入するを論ずるに至れるは其の思想の未だ徹底せざる證なり。

(三) 揣摩。是の故に術あらむと欲する者は先づ其の敵の狀勢を詳かにせざる可からず。人主に説かんとする者は人主の心を詳かにせざる可らず。之を揣と曰ふ。而して一切のとは皆な連絡を有する故に其一端を推して以て他端をして伴はしむ可し。之を摩と云ふ。摩すれば必ず其れに應じて來る者あり、之を符と曰ふ。此の故に古の摩を善くする者は鉤を操りて深淵に臨むが如し、餌して之を投すれば必ず魚を得。故に曰はく

事成必合於數摩篇

と。數とは今日の語にて曰へば法則と曰はむが如し、萬物自然の法則なり。

(四) 神仙家。此の書の中に又た神仙家の身心を靜養する説に類したる

者あり。曰はく無爲にして五臟を安靜にし六腑を和通するを求むべし。精神魂魄固く守りて動かざれば則ち内視反聽して志定まる、之を太虚と云ひ、神の往來を待つと、是れ宛然三國六朝の神仙家の口吻なり。

蘇張從橫の謀

蘇秦、張儀は鬼谷先生に學べりと稱せらる。然かも兩ながら聽く所を以て直ちに之れを天下に實行せんとしたる者なり。當時所謂戰國七雄あり。虎視耽々として一隅に割據し、寸攘尺奪、其の勢大雷の將さに破裂せんとする者の如く、天下の人心洶々として安堵する者なし。此の間に於いて秦は函谷關以西に在りて延長せる一大國なり。中夏の諸侯のためには夷狄視せらるるを以て憤懣の情に堪へず。茲に於いて孝公憤りを發し、公孫鞅を引きて相となし、秦國大に強し。此に於いて力を東方に伸さんとす。然るに山東の諸侯は其の力を合するにあらざれば秦を制するに足らず。此に於いて合從連衡の説あり。

合従は山東の六國が同盟するを謂ひ、連衡は六諸侯が各秦に和するを謂ふ。蘇秦は六國に遊説して合従を作り、諸侯皆な聽き、約して曰はく、秦一國を攻めば則ち五國之れを救はん。約の如くならざる者は五國共に之れを伐んと、蘇秦從約の長となり、并せて六國の相となり、車騎輜重王者の如し。然るに秦、公孫衍をして齊魏を欺き、以て趙を伐たしむ。是れ從約中の一破綻なりき。

張儀に至りては詐僞險惡、蘇秦の比にあらず。其の主張する所は連衡に在り、秦に入り客卿たり。出で、魏に相とし、魏の哀王に説くに蘇秦合従説の行ふ可からざるを以てす。哀王從約に背き、秦と和す。張儀乃ち又た入りて秦の相となり、齊楚の從親するを以て楚をして齊を絶たしむ。齊怒つて秦と和す。其の後も楚を欺き、韓を説き、後ち齊趙燕に説き、皆な秦に事へしむ。茲に至り、連衡成る。然るに張儀を用ひたる惠文王は卒し、子悼武王立つ。悼武王は張儀を悦ばず、諸侯之れを聞き、連衡を叛きて又た合従せり。

蘇秦張儀皆な一片の書生のみ、社會心意を代表し、王侯の意に投合せる行動に出でたるために波浪のために打ち上げられたる如く、三寸の舌を以て宰相の地位に上るを得たり。孔子孟子の如き皆な天下經營の策を有すと雖も、其れ等は理論として高尚なるのみにて、當時に實行し得べからざる者なり。故に其れ等は唯だ説として、當時に存在せるのみ。實際に用ひられたる者は唯だ蘇張の策のみなり。

蘇張一たび富貴を致してより、遊士争て之を慕做す。又た公孫衍、蘇代、蘇厲、周最、樓緩の徒あり、皆な辯詐を以て相ひ高ぶり。此の徒紛々して四方に徧ねし。是の時に當り、二大思想家の現はれたるあり。何れも社會に影響せられて生せりと雖も、亦た先人の説を繼承して能く然れるなり。之れを莊子と孟子となす。二人は共に一世の大思想家、大雄辯家なりしが、嘗て一回も相ひ會せしとなし。地相去る遠きにあらず、年の相隔る多きにあらず。世之れを異む。

莊子

第一節 莊子の傳

莊子は宋の蒙人なり、蒙は河南歸德府城の東北に在り。名は周、孟子と略ぼ時を同ふす。然れども嘗て會談せず、世人其何に故なるかを知るものなし。史記に據れば楚威王周顯王三十四年其の賢を聞き使をして幣を厚ふし之を迎へしめ許すに相を以てす。莊周笑て使者に謂て曰はく千金は重利、卿相は尊位なり。子獨り郊祭の犧牛を見ざるか。之を養食すること數歲、衣するに文繡を以てし、以て太廟に入る、是の時に當り、孤豚たらんと欲するも得ず。子亟かに去れ、我を汚がすことなかれ。我れ寧ろ汚瀆の中に游戲し、自ら快にせん。國を有つ者に羈せらるゝを爲すことなく。修身仕へず、以て我が志を快にせむと。此れ蓋し莊子の性行を表はして餘蘊なき者と謂ふべきなり。

第二節 莊子の哲學

彼れは列子の思想を受けて心に重きを置き心をして絶對ならしめんとせり。心さへ絶對なれば世人の毀譽褒貶に累はされず。其の位置に安んじ、悠々として餘裕あるべきなり。曰はく、

夫列子御風而行。冷然善也。旬有五日而後反。彼於致福者未數々焉也。

此雖免乎行。猶有所待者也。若夫乘天地之正。而御六氣之辨。以遊無窮

者。彼且惡乎待哉。故曰。至人無己。神人無功。聖人無名。遊遊

と。齊物論に於いて吾喪我と云へる者正さに此の心の絶對に合一せし状態を言へるなり。莊子は此の有様を徴せんため種々の例を挙げたり。一、天大の鵬は雲氣を絶し、青天を背にして南せんとす。樹間の斥鷃は之れを笑ひ彼れ方に安くに之かんとすと云ふ。斥鷃は自ら小なるに安んじて其の他を知らざるなり。

二、堯天下を許由に譲らむとせし時に許由曰はく、

庖人雖不治庖。尸祝不越樽俎而代之矣。

と。是れ亦た許由其の定分に安んせんとするなり。

三、惠子、莊子に謂て曰はく、魏王我れに大瓠の種を貽れり。而かも大にして用ふる所なしと。莊子曰はく子大に用ふるに拙なり。其の大なるを憂へば須らく大樽を作りて江湖に浮ぶべしと。

四、惠子、莊子に謂て曰はく、吾に大樹あり、人之れを樗と云ふ。益なく用なし。子の言の大にして益なき亦此の如しと。莊子曰はく子安んぞ之れを無何有の郷に植へて其の下に彷徨せざるや。斧斤に災せられず。物に害せられず。困苦するとなしと。此れ等兩例は如何に用なきが如きものも、各々其の定分あり、其の分に安んずれば天然を全ふするを得るを云ふなり。

而して其の絶對なる者を形容して曰はく、

藐姑射之山。有神人居焉。肌膚若冰雪。淖約若處女。不食五穀。吸風飲露。乘雲氣。御飛龍。而遊乎四海之外。其神凝。使物不疵癘。而年穀熟。

と。要之、斥鷃は大鵬のとを知らず。小人は大瓠、樗木の用を知らず。皆小知なればなり。然るに心を執ると大に、絶對に合致せんには悠々として餘

裕あらざるなきなり。

第三節 是非の論

莊子は自然界を觀察し、其の流行するを見て、之れを司配する者あるが如くに思へり。曰はく

日夜相代乎前。而莫知其所萌。已乎已乎。且暮得此其所由以生乎。非彼無我。非我無所取。是亦近矣。而不知其所爲。使若有真宰而特不得其朕。と。而して莊子は天地間の現象は皆此の真宰に由りて司配せらるゝ如く、人間の精神も此の真宰に由りて司配せられ居るとなすが如し。而して人間の知る可からずして然かも最も尊き者は真君なるを説いて曰はく。

若有真宰。而特不得其朕。可行己信。而不見其形。有情而無形。百骸九竅。六藏。眩而存焉。吾誰與爲親。汝皆說之乎。其有私焉。如是皆有爲臣妾乎。其臣妾不足。以相治乎。其遞相爲君臣乎。其有真君存焉。如求得其情。與

不得無益損乎其真。一受其成形。不凶以待盡。

と。此の眞君を心得たる心は絶對なれども然らざる心は忽ち滅する者なるを説いて曰はく

一受其成形。不凶以待盡。與物相及。相靡。其行蓋如馳。而莫之能止。不亦悲乎。終身役々而不見其成功。爾然疲役。而不知其所歸。可不哀邪。人謂之不死。奚益。其形化。其心與之然。可不謂大哀乎。人之生也。固若是芒乎。其我獨芒。而人亦有不芒者乎。

と。人之生也。固若是芒乎。とは人間の生まるゝ眞君を知るとなきか。と云ふなり。而して眞君を知るとなき時は是非の論起るべきを説いて曰はく、

夫隨其成心而師之。誰獨且無師乎。奚必知代而心自取者有之。愚者與有焉。未成乎心而有是非。是今日適越。而昔至也。

と。是れ是非の論は各々一片の見解を取りて動かざるより心成起るなり。未だ心に成心なくして而して是非の論起るは今日越に之きながら昔

至れると云ふと同く出來得べからざることなり。然らば則ち果たして是非なる者あるかと云ふに然からず。是ありて非あり。非ありて是あり。兩々相ひ對して初めて成立する者なり。故に其の根本より觀れば是非なきなり。之れを道根と云ふ。曰はく、

物無非彼。物無非是。自彼則不見。自知則知之。故曰彼出於是。是亦因彼。彼是方生之說也。雖然。方生方死。方死方生。方可方不可。方不可方可。因是因非。因非因是。是以聖人不由。而照之於天。亦因是也。是亦彼也。彼亦是也。彼亦一是非。此亦一是非。果且有彼是乎哉。果且無彼是乎哉。彼是莫得其偶。謂之道樞。樞始得其環中。以感無窮。是亦一無窮。非亦一無窮也。故曰莫若以明。

と。是れ矛盾的豫想を超越せる者が絶對ありとなすに外ならざるなり。矛盾的豫想とは何んぞや。第三者を許さざるAとnon-A是れなり。Aを規定する時は、non-Aを矛盾的に豫想せざるを得ず。Aとnon-Aとは相ひ對立する者なり。之れを莊子の言に徴するに曰はく、

夫道未始有對。言未始有常。爲是而有眡也。物齊

と。是と規定するがために對する者を生ずるなり。是非を超越したる者を道樞となし、天鈞となせり。凡そ天下の物、美醜、正不正の如きあるとなし。曰はく、

民濕寢。則腰疾偏死。縮然乎哉。木處則惴慄恟懼。猿猴然乎哉。三者孰知正處。民食芻豢。麋鹿食芻。鶩蛆甘帶。鴟鴞嗜鼠。四者誰知正味。猿狙以爲雌。麋與鹿交。縮與魚游。毛嬙麗姬人之所美也。魚見之深入。鳥見之高飛。麋鹿見之決驟。四者誰知天下之正色哉。自我觀之。仁義之端。是非之塗。樊然殽亂。吾惡知其辨。

と。而して莊子は單に相對的の概念のみならず。物體も亦た畢竟一なりとなす者の如し。左の章に由りて之れを知る。

以指喻指之非指。不若以非指喻指之非指也。以馬喻馬之非馬。不若以非馬喻馬之非馬也。天地一指也。萬物一馬也。可乎。不可乎。不可乎。不可乎。而物謂之。而然。惡乎。然。乎。然。惡乎。不然。乎。不然。乎。不然。物因有所然。

物因有所可。無物不然。無物不然。故爲是舉。莛與楹。厲與西施。恢恠憭怪。道通爲其分也。成也。其成也。毀也。凡物無成與毀。復通爲一。

と。天地を一指となし。萬物を馬となし。而して其の指に非ず。馬にあらざる者を提舉せんとし。剩へ莛と楹とを調和せんとするが如きは萬物を通じて一となすの意見るべきなり。其の意は莛に對して柱あり。柱に對して楹あり。隨て二者同一なり。厲に對して西施あり。西施に對して厲あり。故に二者亦同一なり。天地を一馬とすれば馬と云ふは馬ならざるものに對するなり。故に馬と云ふも果たして馬なりや否やを知らず。萬物は畢竟同一なる者なりとなり。

故に同一物も二方面より見るを得。之れを知らずして其の一方面のみを見る時は大なる誤りを惹き起すべし。

莊子は朝三暮四の喩を以て此の觀念を明かにせり。曰はく、狙公橡子を與へて曰はく朝三にして暮四と。衆狙皆怒る。狙公曰はく、然らば則ち朝四にして暮三と。衆狙皆喜ぶ。名實虧けず。而して一は喜び一は怒る者。

一方を將て是とするに由るなり。莊子故に曰はく。

物無非。彼物無非。是。自彼則不見。自知則知之。

と。又曰はく

勞神明爲壹。而不知其同也。謂之朝三。

と。然らば則ち是非邪正は遂に判定すべからざるかと云ふに莊子は其の根本にては畢竟ごなし、從て判定すべからずとなせり。曰はく

吾誰使正之。使同乎若者正之。既與若同矣。惡能正之。使同乎我者正之。既同乎我矣。惡能正之。使異乎我與若者正之。既異乎我與若矣。惡能正之。使同乎我與若者正之。既同乎我與若矣。惡能正之。然則我與若與人俱不能相知也。而待彼也。化聲之相待。若其不相待。和之以天倪。因之以曼衍。所以窮年也。何謂和之。以天倪。曰。是不是。然。不然是。若果是也。則是之異乎不是也。亦無辨。然若果然也。則然之異乎不然也。亦無辯。忘年忘義。振於無竟。故寓諸無竟。

と。判斷のなす可からず。此れを以て天倪に因りて調和せんとするなり。

此く論じ來りて莊子は一種の人生觀をなせり。曰はく、昔者莊周夢に蝴蝶となり、栩栩として覺ゆれば則ち遽々然として周なり。周の夢に蝴蝶あるか。蝴蝶の夢に周あるか。人生は畢竟一大夢なりと。

又以爲らく覺夢は相豫想する者なり、覺めて而して後其の夢なるを知る。然らば則ち今覺と云ふものも亦更に夢ならざるを知らむや。死生は相豫想する者なり、今生時を以て覺となす、何んとなれば生時に於て夜夢なるものを經驗し得ればなり。然らば則ち生時に對する死を以て大覺となす可きなりと。

第四節 養生論

莊子は亂世に當りて處世の道を考へたり。老子も亦た嘗て之れを考へたり。曰はく

夫惟不爭。故無尤矣。

功成名遂。身退。天之道。

聖人去甚去奢去泰。

其の他之れに類する言、僅々、數十章の中に幾回か現はる。其の根本主義たるを知るべし。莊子も亦處世法を養生主の中に示めせり。其の始めに曰はく、

吾生也有涯。而知也無涯。以有涯隨無涯。殆已。已而爲知者殆而已矣。爲善無近名。爲惡無近刑。緣督以爲經。可以保身。可以全生。可以養親。可以盡生。

と。而して處世の法は如何なる主義に據るべきかと云ふに、庖丁の牛を解くが如くなるべし。庖丁の牛を解くや、刀を取りて立ち、肉の間に入れ鑿々として通らざるなし。但だ其の筋骨盤錯の處に至りては、恍然として戒め、輕々に刀を動し、全く解き了り、刀を拭ふて藏む。故に物に條理あり。靜かに之れに當れば處し難きのとなし。故に生死も亦た然り、人間に來るべき自然の運命なるが故に哀樂すべからざるなりと、人の死を哭するは、是れ死人が平生情を以て人に對するためなり。人間は其の始め

て生まるゝや、自然にしてのみ。之れを忘れて、猥りに好愛を生ずるためなり。曰はく

適來夫子時也。適去夫子順也。安時而處順。哀樂不能入也。

と。死生は自然情に拘はるべからざるなり。

第五節 修身論

莊子は養生を説き、更らに人間が其の心を修養せむとを欲せり。其の形骸の如きは之れを自然に承く、如何んともすべからざるなり。曰はく

故德有所長。而形有所忘。

と。徳ある人とは何んぞや、其の心道を得たるものなり。他の言にて言へば心が絶對の域に定住せる者なり。此くの如き人は其の智識無なり。然れども此の無は老子の無と同く、有の無なり。一切天下の理を知り、國家の法を了し、其の行動行爲が無意識的に理法に合せるものなり。是れ仲尼が顔回の坐忘を印許せる所以のみ。顔回仲尼に見えて曰はく、回益せ

り、仲尼曰はく、何の謂ぞや。曰はく、回仁義を忘れたり、曰はく、可なり、然れども猶ほ未だなり、他日又見て曰はく、回益せり、曰はく、何んの謂ぞや、曰はく、回禮樂を忘れたり、曰はく、可なり、猶ほ未だなり、它日復た見て曰はく、回益せり、曰はく、何んの謂ぞや、曰はく、回坐忘せり、仲尼寔然として其の意を問ふ、曰はく、肢體を毀り、聰明を退け、形を離れ、知を去り、大通に同じ此を忘と曰ふと、仲尼以て己れより賢なりとなす大宗師坐忘の域に達すれば、則ち何んぞ古今あらむ、何んぞ生死あらむ、何んぞ意想あらむ、何んぞ憂慮あらむ、此れ真人無夢と曰へる所以なり、然れども此の弊として、彼れは一切を輕視し、人情をも重んぜざりき。

結 論

莊子の思想は老子列子と相ひ出入す、其の根本主義とする所は道は絶對にして是非の論は各々其の一端を伺へるのみ、萬物も畢竟同一なりとなすなり、天地に在りては之れを眞宰と云ふ、人間は須らく心を絶對

に合すべく、即ち綽々として餘裕あらざるなきなりと。

孟 子

第一節 孟子の傳

孟子は鄒人なり、名は軻、字は子車、一に子輿と稱す、幼にして三遷の教を蒙る、長じて業を子思の門人に受け、道既に通じ、魏に適く、惠王用ゆること能はず、齊の宣王に遊事す、三卿の中にあり、説くに仁政を行ひて以て王たるを以てす、天下方に合從連衡を勉め、攻伐を以て賢となす、而して孟子は乃ち唐虞三代の徳を述ぶ、宣王見て迂遠にして事情に濶なりとす、遇せられずして去る、嘆じて曰はく、夫れ天未だ天下を平治するを欲せざるか、若し天下を平治せんと欲せば、今の時に當り、我を捨て、其れ誰ぞやと、滕文侯を訪ふ、文侯は當時第一の君として、名聲四海に高く、孟子を信用することも亦た最も篤し、然れども其の國小なるを以て、且つ文侯早世せるを以て、抱懷する所を行ふを得ず。

孟子蘇張と時を同ふし諸侯の間に馳聘す。而して其の説く所は則ち氷炭相容れず。蘇張の徒を視ると豚犬の如し。景春が曰はく公孫衍張儀は豈誠の大丈夫ならずや。一たび怒りて諸侯懼れ。安居して天下熄むと。孟子曰はく是れ焉んぞ大丈夫たるを得む。子未だ禮を學ばざるか。丈夫の冠するや父之を命し、女子の嫁するや母之を命す。往いて之を門に送りて曰はく之を戒めよ。往いて汝が家に往く。必ず敬しみ戒めよ。夫子に違ふとなかれと。順を以て正となすは妾婦の道なり。若し夫れ天下の廣居に居り天下の正位に立ち天下の大道を行ふ。志を得れば民と之に由り志を行ふを得ざれば獨り其道を行ふ。富貴も淫する能はず。貧賤も移す能はず。威武も屈する能はず。此れ之を大丈夫と謂ふと。天下混亂の時に當り、正を以て自ら持し、屹然として動かす。豪傑の偉風以て見るべきなり。孟子の名聲既に諸侯に洽く。英雄豪傑の士四方より來りて談論する者頗る多し。淳于髡は孟子を責むるに天下を救はざるを以てし、沈同は燕伐つべきか否かを問ふ。告子性を論ずる尤も盛んに、其の他數ふるに

勝へざるなり。孟子時に遇せられず、宋魯滕薛の間に往來し道を行ふの地を求めて得ず、孔子の教を闡明し楊墨の徒を排斥するを以て己れが任となし。曰はく

能言距揚墨者聖人之徒也

と。孟子の死一に曰はく周赧王二十六年正月十五日と。然らば則ち烈王四年の生を距ると八十四年なり。

第二節 先天良心論

此の時に當り、性の論は大に盛んなりしが如し。蓋し孟子が性善と喝破せるに由りて提起せられたるなるべし。告子は孟子に向て反問を試み、孟子も亦告子に向て反問を試みたり。公都子も亦之れを試みたり。告子の説に據れば人生れながらにしては善もなく悪もなく、教育に由りて善とも悪ともなり得る者なりと。故に性を杞柳に喩へ、又義を其れにて作れる栝菴に喩へたり。又性を水に喩へて曰はく、

性猶湍水也。決諸東方則東流。決諸西方則西流。人性之無分於善不善也。猶水之無分於東西也。

と。告子は更らに一步を進めて曰はく生れつきが即ち性なり。乃ち生之謂性

となせり。然るに孟子は杞柳は性に從て栝樛を作るべき如く、水は自ら下に流るる如く、人性自ら善となすべしとなせり。曰はく

水信無分於東西、無分上下乎。人性之善也。猶水之就下也。人無有不善、水無不下。

と。而して告子の生之謂性の説に至りては孟子其の意を解せざるなり。然らば孟子性善説は何れより來りしかと云ふに

孟子の子思の學統を繼承せることは疑ふ可からず、孟子曰はく

悅親有道、反身不誠、不悅於親矣。誠身有道、不明乎善、不誠其身矣。是故誠者天之道也、思誠者人之道也、至誠而不動者未之有也、不誠未有能動者也。離婁章句上

と。是れ中庸の文と正さに相同じ。中庸の第二十章に曰はく

順乎親有道、反諸身不誠、不順乎親矣。誠身有道、不明乎善、不誠乎身矣。誠者天之道也、誠之者人之道也。

と。孟子曰はく

盡其心者知其性也、知其性則知天矣。存其心養其性所以事天也。盡心上參

と。又曰はく

萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉。同上

と。人性は即ち天なるを云ふなり。中庸に曰はく。

唯天下至誠爲能盡其性、能盡其性則能盡人之性、能盡人之性則能盡物之性、能盡物之性則可以贊天地之化育、可以贊天地之化育則可以與天地參也。

と。天の性と人の性と一なるを云ふなり。孟子と其の歸する所を一にす。孟子曰はく動容周旋中禮、盛德之至也。此れ中庸の誠者不勉而中、不思

而得從容中道聖人也。と其意正さに相同じ。由是觀之。孟子の子思の思想を受けしと明かなり。即ち孟子は子思と同一誠を以て人の性とせり。然るに誠とは何ぞや畢竟倫理の淵源のみ。倫理は社會に於いて善となさるゝ所なり。故に孟子は更に一步を進めて人性即ち善と斷定せり。中庸は未だ此く迄遙か説をなさず。唯だ卒性之謂道と言へるのみ。故に孟子の説は子思の説を推及したるなりと謂ふを得べし。

以上は子思の説を承けて人性の善なることを證明せしなるか、一方に於いて孟子は實際的に之れを證明せり。曰はく今人乍ち孺子の井に入らむとするを見れば皆怵惕惻隱の心あり、交を孺子の父母に内るゝにあらざるなり、譽を郷黨朋友に要むる非ざるなり、其聲を惡むで然るに非ざるなり、由是觀之惻隱の心なきは人にあらざるなり、羞惡の心なきは人にあらざるなり、辭讓の心なきは人に非ざるなり、是非の心なきは人にあらざるなりと。是れ世俗に所謂人情にして孟子は名けて不忍人之心と曰へり。更に論を進めて曰はく、惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心

は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり。人の是の四端あるは猶ほ其の四體あるが如しと。是れ即ち仁義禮智の先天的に具備する所以の明徴なり。孟子曰はく萬物皆備於我矣と。物の字は具體的の物象を指すに非ずして倫理を指すなり。物とは事の意なり。呂氏春秋先識に曰はく荷令三十九物と又察徴に曰はく萬物若此其過也。此れ等は其儘事の義なり。漢の高誘淮南子を註して曰はく物猶事也。其他宋以後の書に於ても心外無物と云ふは心外無事の義に外ならざるなり。陽明も嘗て曰へり、事親一物と、以て見るべきなり。後世孟子の此の句を解して唯心論となす。誤謬も亦た甚しと謂ふべきなり。是の故に孟子は先天良心論者なり。曰はく、

人之所不學而能者。其良能也。所不慮而知者。其良知也。孩提之童。無不知愛其親也。及其長也。無不知敬其兄也。親親仁也。敬長義也。無他達之

天下也。句上 盡心章

と。支那に於ける最も始めにして最も明かなる先天良心論なり。

然れども或は生れて惡なると桀紂の如き者あり。此れ公都子の反問せし所以なり。孟子之れに答へて曰はく、乃若其情則可以爲善矣。乃所謂善也。此れ性善にあらず、情善なり。孟子の思想は性と情と未だ徹底し居らざるなり。

此く論じ來りて人性は善なりとすと雖も日常人類の行動は往々倫理の軌範を超越するに非ずや、吾人の心性上に何等か根柢を有するに非るよりは社會的現象に於いて此の如き方面ある可からざるなり。孟子も亦た之れを認めたり。曰はく

山徑之蹊間。介然用之而成路。爲間不用。則茅塞之矣。今茅塞子之心矣。

盡心章句下

と。以爲らく人の本心は善なれども之れを蔽ふ者あるが爲めに其の善を發揮するを得ざるなりと、然らば則ち其の之を蔽ふ所の者は何ぞや、曰はく欲是れのみ。故に曰はく

養心莫善於寡欲。其爲人也寡欲。雖有不存焉者寡矣。其爲人也多欲。雖

有存焉者寡矣。

第三節 修爲論

修爲は即ち修身なり。孟子の哲學より見て修爲は果たして如何なる意味を有するか、又た其方法は如何、是れ茲に論せむとする所なり。孟子の説に由れば人の性は善なり。唯だ慾の之れを妨碍するあるために其の行ひ善なるを得ざるなり。此の故に

一、制慾

慾を節制するは修爲の第一工夫たらずむばあらず。故に曰はく、心を養ふは寡慾より善きはなしと。然るに孟子の言は主として善なる性をし、て益々發揚せしめんとするに傾けり。曰はく

二、養浩然之氣

我れ善く吾が浩然の氣を養ふと、浩然の氣とは如何なる者なるか、孟子自ら之を言ひ難たしとなせり。然れども其爲氣也、配義與道無是餒也と

云ひ、是集義所生者、非義襲而取之也、行有不慊於心、則餒矣と云ふを以て見れば、俯仰天地に愧ぢざる底の意氣を指せしなるべし。即ち日常善事のみを行ひ、背て心に愧ぢず、従て心に慊からざることなければ、則ち非常なる意氣を養成し得べし。此の意氣たるや、道と義とに依りて維持せらるるなり。故に義と道とに配すと謂へり。意氣とは何んぞやと云ふに、今日の俗語に云ふ所の如し。意氣軒昂天を衝くの概ありと云ひ、或は意氣消沈と云ふ時の意氣の如し。勿論孟子の時に在りて思想未だ發達せず、此の位の語を用いて以て得々たるは免れ難き所なり。

三、求放心

放心を求むと、放心の心は即ち良心の謂なり。孟子曰はく、仁は人の心なりと、其れ其の良心を放つ所以の者亦猶ほ斧斤の木に於けるが如きなりと、其の心を放ちて求むるを知らずと、學問の道他なし其の放心を求むるのみと、此れ等の言に由りて見るに、放心の心は良心なること明かなり。即ち放心は放されたる心なり。卷四九條良心が活働して善をなさんとする

は恰も草木が萌芽を發するが如し、牛馬が之を踏み付けて之をして萌芽を發せざらしむる如く、日常百の惡事が良心の活働を妨害し全く其の人をして心より之を忘却せしむ、之を放なれたる良心と謂ふなり。故に孟子は此の放なれたる良心を求むべき所以を主張せり。曰はく、仁人心也、義人路也、舍其路而弗由、放其心而不知求、哀哉。人有雞犬放、則知求之、有放心而不知求、學問之道無他、求其放心而已矣。

四、存夜氣

然らば放心を求むる所以の法如何となす。此れ孟子の言に於いては、夜氣を存するの說あるのみ。夜氣とは何んぞや。夜に入りて寢ね心全く休み、日常行ひし所の惡事は一切皆な忘却せられたる。此の時に當り、人性の自然として活働しつゝある良心は、其の手足を延ばさんとす、此の良心を養ひ益々培養成育すれば、則ち善人となり了するなり。但だ其の良心の成長せんとするにも拘はらず、日々惡事を行はゞ、則ち月を山

の樹木が幼稚なる芽を吹きつゝある時に之を切り去り遂に之を消亡せしむると同く人も遂に良心を朴滅して以て禽獸となるべきなり。

第四節 政治論

孟子は先天良心論にして良心に従ふて必ず行動すべしとなす。此の點より彼れは直ちに政治論に入れり。以爲らく王者の政治を行ふには須く惻隱、羞惡、辭讓、是非の心を以てすべし。此れ等の心を以てすれば人民の苦痛を顧みず、只管自己の幸福をのみ求むるが如きとあらざるべし。必ずや大に人民を憫み、賦税を軽くし、勞役を少ふし、之をして安堵の思ひあらしむべしと。孟子は之を忍びざるの心を以て忍びざるの政をなすと謂へり。卷七又曰はく

凡有四端於我者、知皆擴而充之矣。若火之始然、泉之始達、苟能充之、足以保四海。苟不充之、不足以事父母。卷二

孟子以爲らく、貧窮の際に在りても善く倫理を守り得る者は獨り士の

み。人民の如きに至りては必ずや放肆邪侈の行ひなきと能はず。此れ人間の性質として已むを得ざる所なり。然るを人民を罪するは甚だ無理なるとなり。故に仁政の第一義は人民をして財産を得しめ、以て父母に事ふに足り、以て妻子を畜ふに足り、凶年と雖も死亡を免れしむるに在り。

然らば如何にして人民の財産を得しむるや、孟子の言種々あれども左の諸項に約するを得べし。

(一) 井田の法を行ひ一夫(父母妻)に百畝を給すること。

此の外に弟あれば是れを餘夫と名け、十六歳にして二十五畝を授く。

(二) 之れに桑、穀を作らしめ、外に鶏、豚、狗、彘の類を養はしむること。

孟子の言に曰はく、五畝の宅の牆下に樹ふるに桑を以てし、匹婦之を蠶せば老いたる者以て帛を衣るに足る。五の母雞、二の母彘と其の畜ひ方を慎めば老いたる者肉を食ふに足り、百畝の田匹夫之を耕さば八口の

家は飢餓を免るべしと。五畝の宅は蓋だし百畝の中に在るなるべし四卷

(三)、八家にして一百畝の公田を耕す、外に税を課せざると。

以上は農家に付いて之を言へるが此の外に商估あり、孟子曰はく、商估の店に税を課して、其の貨物に税を課せざれば則ち天下の商估は皆な其の市に藏れんことを願ふべく、關門に於いて入り來る者に税を課せざれば旅人は悦んで入り來るべく、一卷店に夫里の布なければ天下の民皆な悦んで之れが氓たらむことを願ふべしと。二卷

(四) 數罟斧斤の令を設くると。

此れ即ち魚類をして繁殖し樹木をして鬱茂せしむるためなり。曰はく數罟池に入らざれば魚類勝て食ふ可からず。斧斤時を以て入れば樹木勝て用ふ可からざるなりと。

(五) 民の時を奪ふなきと。

此れ人民耕作の時に之に勞役を命せざるとなり。曰はく彼れ其の民の時を奪ひ耕して以て其の父母を養ふとを得ざらしめ、父母凍餓し、兄弟

妻子離散すと。一卷

此れ等は堯舜の政なり。孟子曰はく離婁が明、公輸子が巧みも規矩を以てせざれば方員を成すと能はず。師曠が聰も六律を以てせざれば五音を正すと能はず。堯舜の道も仁政を以てせざれば天下を平治すると能はずと。孟子は此くして堯舜の道を行ふものなり。然れども其の多少の出入は各人の適意に存すとなせり。滕文公章句

孟子は孔子と同じく、上のなす所下皆な之れに倣ふの主義を取り、君主たる者仁義を好めば、人民皆な之を好み、君主たる者利を好めば人民皆な之を好むとなせり。卷一第一條 卷四第四條

結 論

孟子は先天良心論なり。性善を信せり。然れども亦一方に於て慾の之れを妨碍する所以を認め、慾に蔽はれたる状態を以て良心を失ひたる状態となせり。故に此の良心を求むべしとなし。政治は此の良心に従てな

すべき者となせり。

孟子は勝ちを好むの人なり。漢の王充は刺孟を著はして之れを排し、司馬光も亦た之れを排せり。而して日本の徂徠一派は最も甚く之を非せり。孟子を以て大賢亞聖となすは程朱以下なり。余も亦た孟子の人物を取らず。唯だ其の主義に與みするものなり。

詭辯の徒

腐敗して蟲生ず。社會の頹敗に伴ひて詭辯の徒出でたり。公孫龍、惠施の徒是れなり。

公孫龍

公孫龍は趙の人なり。平原君に客となる。孟子と時を同ふす。其の言列子、莊子、呂氏春秋等に散見す。漢書藝文志公孫龍子十四篇となす。今傳ふる所數篇のみ。

一、孤犢未嘗有母、列子、仲尼 孤犢は母ありしことなし、母あるは孤犢にあらず、莊子、天下 子犢なり

二、髮引千鈞、髮の切るるは不均あるなり、之れなければ切るることなし。尙

三、有影不移、影は其の位置を變動せず、影の移る如く見ゆるは移れるにあらずして新たに生せるなり。莊子、天下

四、有物不盡、一物を折半する時は我が心にて想像し得る限り盡ることなし。莊子、天下

五、白馬非馬、白馬は馬と異なれり。故に馬にあらざるなり。

六、趙と秦と濬に會盟す、曰はく趙の攻むる處秦も亦之を攻め、秦の攻むる所趙も亦之を攻めんと。既にして秦中山を攻む、趙卻て之を救ふ、秦大に怒る、平原君患ひ、公孫龍を召して之を問ふ、龍曰はく秦の使に向ひ云ふべし、我今中山を救はんと欲す、君(秦)何んぞ我と俱にせざると呂

七、堅白論、公孫龍堅白論に曰はく、此に石あり、目のみにては其の白きを知り、堅きを知らず、手にて觸れしのみにては其の堅きを知りて白きを知らず、白と堅とは別物なり、一致すべからずと。

惠 施

惠施は梁の相、莊子と時を同ふす、莊子屢々之を稱す、公孫龍と名を均ふす。

一、魏惠王齊威王相約誓す、威王之に背く、惠王大に怒り、人をして之を攻めしめんとす云、惠子乃ち戴晉人をして、惠王に見へしむ、晉人はく蝸なる小虫あり、其の左角に國するものを觸氏と曰ひ、右角に國する者を蠻氏と曰ふ、時に相共に地を争ふて戰ふ、伏尸數萬、北ぐるを追ひ十有五日にして反へる、今無窮の宇宙に於て區々の地を争ふ、豈に蝸角頭上の争に異ならむやと、惠王恍然として自失せる如し莊子陽子

二、卵有毛、鈎有須、卵に毛あり、鈎に鬚あり、鬚は魚鬚なり。

荀子不苟篇

卵有毛見莊

荀子曰はく、鈎有須、卵有毛、是說之難持者也、而惠施鄧析能之不苟篇、惠施の創說にあらざると推すべきなり、鄧析は鄭大夫にして子産と時を同ふす、後魯の定公九年、駟顯の殺す所となる左傳、又列子に於ては公孫龍の説となす所、莊子に於ては惠施の説となすものあり、蓋し彼の徒喜むで相傳播し、而して必ずしも一人の稱する所にあらざるなり。

三、無厚の者は積むべからず、微かに厚さあれば積むで千里をなすべし莊子天下

四、鶏三足、羅勉註に曰はく、兩足の外之を動かさしむる者あり、同

五、馬有卵、羅註、馬胎生然れども毛あり、卵毛有生すと異ならず、同

六、輪不輾地、輪地に著けば拘泥して行かず、同

七、鏃疾しと雖も之を發せざれば行かず、之を發すれば止まらず、是れ其の疾きは人に在りて鏃矢にあらざるなり、同

八、丁子有尾、丁子は林註蝦蟇なり楚人之を丁子と謂ふ、丁子字の形に尾あり同

社會の人士を集合す

此。く。多。數。の。人。士。は。輩。出。せ。り。然。か。も。此。れ。等。は。皆。な。天。下。を。經。營。せ。ん。と。す。る。に。在。り。茲。を。以。て。各。國。の。君。主。富。國。強。兵。に。熱。心。な。る。者。は。皆。な。好。む。で。此。れ。等。の。人。士。を。招。聘。せ。り。

(一) 最も先きにして且つ最も熱心なりしは齊の宣王にして、文學遊說の士を好み、列第を賜ひて之を尊寵せり。淳于髡、騶衍、慎到、田駢、騶奭の徒七十六人皆な大夫となり、事を治めずして論議しつゝあるのみ、是に於いて稷下の學士極めて盛んにして數百千人の多きに及びべり。

(二) 楚の春申君、魏の信陵君、趙の平原君、齊の孟嘗君何れも齊宣王より後なりと雖も其の國に在りて名士を招聘して食客となせり。秦の

呂不韋も亦た之れに倣らひ、多く食客を集め、之れをして論議せしめ、以て呂氏春秋を著はせり。

此くの如く學問其者を以て目的となすの潮流は漸く戰國の始めより始まり、諸國の豪士が此く學士を招集し盛んに學術を討論せしため、是れが大刺戟となりて戰國の終りには名は著はれざれども多くの學者が輩出せることは疑ふ可からず。

荀子

第一節 荀子の傳

合従連衡の行はれ天下已に秦に統一せらんとするの氣運の開ける頃は恰も是れ孟子に後ると五六十年、忽ち又孔門の一巨擘を得たり。之れを荀卿となす。

荀卿名は況、趙の人なり。年十五、始めて齊に遊學す、田駢の屬皆已に死す。齊襄王の時荀卿尤も老師たり。是より先き齊天下の士を稷下に集め淳

于髡、騶奭、田駢の徒皆來る。齊王以て列大夫となす。第を康莊の衢に開き門を高くし屋を大にし之れを尊寵す。齊列大夫の缺を修め而して荀卿三たび祭酒となる。齊人或は荀卿を讒す。荀卿乃ち楚に適く。春申君以て蘭陵の令となす。困學紀聞に據れば楚の蘭陵にあらず。魏の地形志蘭陵縣荀卿家あり。人或は春申君に曰ふ湯七十里を以てし。文王百里を以てす。荀卿は賢者なり。今之に百里の地を與ふ。楚其れ危いかな。春申君荀卿を謝す。荀卿去つて趙に適く。客或は春申君に謂ふ。伊尹夏を去りて殷に入り。殷王となり。夏亡び管仲魯を去つて齊に入り。魯弱くして齊強し。故に賢者の在る所。君尊く國安し。今荀卿は天下の賢人なり。去る所の國其れ安からざらむと。遂に秦の昭王に見へ。説くに禮義の治を以てす。王用ゆると能はず。乃ち退きて仲尼の意を述べ。禮義の治を論じ。五伯の業を卑んで微理を闡明し。巫咒を觀破し。墨子の尙儉非樂を排撃して以て文を知らずとなす。書數萬言を著はす。嘆じて曰はく

嗟我何人。獨不遇時。當亂世。欲衷對言。不從。恐爲子胥。身雖凶。進諫不聽。

到而獨鹿。棄之江。觀往事以自戒。治亂是非亦可識。託於成相以喻意。と。遂に蘭陵の令を以て終る。蘭陵の人喜んで字して卿となすもの蓋し荀卿に法るなりと云ふ。著はす所三十三篇之れを繁に失すと雖も。義理明晰孟子の及ぶ所に非ず。

第二節 人性は惡なり

荀子の中に性惡なる一篇あり。荀子が性惡を以て根本となすと明らかなり。後人荀子に付いては先づ性惡を云ふ理なきにあらざるなり。然らば則ち性惡の根本思想は何處より來るか。と云ふに人生れて利を好むあり。是に順ふ故に殘賊生じ而して忠信亡ぶ。生れて耳目の欲ありて聲色を好むあり。是に順ふ故に淫亂生じ而して禮義文理亡ぶ。故に人の情性に從へば社會の秩序は紊亂し治安の道得るに由なきなり。此れ人性惡なる明證なり。今人飢え長者を見て敢て先づ食はざる者は將さに讓る所あらむとするなり。勞して敢て息ふとを求めざるは將さに代はる

所あらんとするなり。夫れ子の父に譲り弟の兄に譲り子の父に代り弟の兄に代る此二行なる者は皆性に反して情に悖るなり。然るに此れ實に孝子の道禮義の文理なり。故に情性に從へば則禮讓せず禮讓せば則ち情性に悖る。此れを用て之を觀る、人性の惡なること明かなりと。是れ人性の惡なる所以の標徴を生慾に求めたり、換言すれば生れながらにして之れを放てば嚙噬の慾を逞ふし社會は生存競争の域となると。

第三節 故に禮を要す

既に人性は惡なり。故に禮に由りて治めざる可からず。然るに禮義は外より人を鑄型するものなり。個人に取りては大なる苦痛を感すべきなり。故に自然にあらざるなり。故に名けて人爲と曰ふ。人爲は即ち偽なり、聖人は偽の成功せる者なり。荀卿曰はく

偽積而化之謂聖

と。聖人は積偽の化する所なりと雖も本然の性未だ曾て撲滅せざるな

り。故に曰はく性偽合。然後聖人之名と。聖人と凡人との別は程度の差にして髓腦の差に非るなり。

禮は修爲の唯一の工夫なり。是れ個人に於て獨り然るのみならず、又國家に於ても然るなり。故に曰はく

隆禮貴義者其國治。簡禮賤義者其國亂議兵篇

と曰はく

禮者治辨之極也。疆國之本也。威行之道也。功名之總也。王公由之。所以得天下也。不由所以捐社稷也。故堅甲利兵。不足以爲勝。高城深池。不足以爲固。嚴令繁刑。不足以爲威。由其道則行。不由其道則廢。同上

と。所謂社會は人民の簇聚なり。此の簇聚の統一する所以の唯一の武器は禮なり。禮に由れば治まり、由らざれば乱る。豈に此外に天命なるものあらむや。故に曰はく

天行有常。不爲堯存。不爲桀亡。應之以治則吉。應之以亂則凶。疆本而節用。則天不能貧。養備而動時。則天不能病。修道而不貳。則天不能禍。天論篇

と。然らば則ち禮何くに本づく、洽ねく荀子の言を見て其の意の在る所を察するに禮論に於ては禮の三本を定めて天地先祖及び君師となせり。天地は一切萬物の淵源する所、先祖は吾人同類の淵源する所なり、故に上天に事へ下地に事へ先祖を尊むで而して君師を尊尙するものは禮の客觀的淵源なり、此外主觀的淵源あり、人情是れなり、曰はく

相高以毀瘠是姦人之道也、非禮義之文也、非孝子之情也。

と曰はく稱情而立文と曰はく三年の喪稱情而立文、所以爲至痛之極也と。此れ孝子の情換言すれば善き人情を豫想する者に非ずして何ぞや、由是觀之荀子の禮の淵源とする所左の如し、

一、客觀的。利

一、主觀的。情

換言すれば禮は社會の維持せらるゝ所以の基礎、天地、先祖及び君師に報ひんとせる人情に折中して作れるものなりとなすなり。

第三節 結論

荀卿は性惡となし、以て禮の必要を認め、先王の禮唯是れ之れに由る、以爲らく以て天下を治むべく、以て身を治むべし。至道豈に之に如くものあらむやと、是の故に荀卿を責むるに哲學を以てするは其の正鵠を得たるものにあらざるなり、彼れの思想は經驗的にして効利的なり、恰も英吉利の「ホップス」に似たり、其の代はり彼れが思想の精緻にして正確なる支那の學者中稀に見る所なり。

尸子

傳に云はく、尸子名は倭、魯人なり、秦の相商君之を師とす。商君死せし時蜀に逃れて難を避けたりと。著はす所數篇あり、輪池叢書第四十卷に載録す。又百子全書に出づ、尸子の意は治國にあり、其の唯一の方便は義のみ、曰はく夫義者萬事之源也、國之所以立と、義は普遍的客觀的の價值あり。

り。故に彼れ進むで義の畢竟大利なる所以を論じて曰はく。

義必利。雖桀殺龍逢。關紂殺王子比干。猶謂義之必利也。

と。是の故に堯天下を以て舜に與へて曰はく。富か義かと。舜乃ち曰はく。義なりと。仁意舜の天下を治むるや。

天下燭于玉燭。息于永風。食于膏火。飲于醴泉。

而して舜の徳たる河海の如く

千仞之溪亦滿焉。螻蟻之穴亦滿焉。

普天の下潤澤せざるなきなり。此を以て禹の水土を平らげ、湯の桀を放つに比すれば大小廣狹比較の差にあらざるなり。仁意

其の大體方針の在る所を察するに類る鄒魯に近きを見る、其の孔子を尙ふや至れり。徳義を重んずるや甚だし。勸學篇に云はく、

夫徳義也者。視之弗見、聽之弗聞、天地以正、萬物以徧、無爵而貴、不祿而尊也。

呂子

秦の相呂不韋食客をして書を作らしむ。呂氏春秋又は呂覽と稱す。八覽六論、十二紀あり。期賢名篇に當今之時世闇甚矣。人主有能明其徳者。天下之士其歸之也の句あり。秦一統以前の書なると疑ふ可からず。

一、社會の最大目的は利なり。忠臣烈士は此の目的を達せむとする者に外ならず。君特

二、政は人性を基礎とせざる可からず。意適

三、人の本能は慾なり。慾なければ社會の活動なし。此の慾を利用するが官吏の任なり。慾爲

四、身は我が私有ならず。嚴親の遺骸なり。孝行

此の外載すべき者少し。中庸に類するあり。信楊子に類するあり。管管子に類するあり。博志故曰。精而熟之。鬼老子を取るあり。公貴君道一を尙ぶの説あり。番分君守。執度。天人感應あり。志氣外に形はるゝの説あり。論精其の難

駁なる極めて甚だし、其の日常行爲の格律として取るべきは、自己の精神を待まんとする説にして必已篇に見ゆ。

易十翼の哲學

易の十翼とは

- 上象 上經の卦象を云ふもの
- 下象 下經の卦象を云ふもの
- 大象 卦の象を云ふもの
- 小象 爻の象を云ふもの
- 文言 乾坤二卦の解釋
- 上繫詞 易を贊むるも
- 下繫詞 同
- 序卦 六十四卦の順序を述べ
- 說卦 卦に付いて云ふもの

雜卦 雜說

其の中前四者と後の六者とは大に其の文章を異にせり。故に恐くは同一人の書にあらざるべし。而して下六翼が孔子以後に出來たることは前に述べたる如く、余の信する所なり。一言にて十翼の思想を評すれば自然觀と神祕說とを合せたる者なり。

一、象の哲學

象に由れば萬物は乾坤の二氣を受けて成る。曰はく

大哉乾元。萬物資始。乃統天

至哉坤元。萬物資生。乃順天

と。乾元は乾の氣、坤元は坤の氣なり。乾の氣は天をなし、坤の氣は地をなす。萬物は天の氣と地の氣とを受けて生ずると云はむが如し。天は乾の氣なり。故に乾元の天を統るを述べて曰はく

雲行雨施。品物流形。

乾道變化。各正性命。保合大和。乃利貞。

と。坤元は地をなす。故に地に付いで述べて曰はく、

坤厚載物。德合无疆。含弘光大。品物咸亨。

と。此くして二氣の一は天をなし、一は地をなし、兼ねて萬物をなすを見る。

二、大象小象の哲學

天地既に成る。人間當さに之れに則るべきなり。天に則るべきを述べて曰はく

天行健。君子以自彊不息。

地に則るべきを述べて曰はく

地勢坤。君子以厚德載物。

と。其の外象象共に六十四卦に亘りて之れありと雖も卦辭の解釋に外ならず。其の思想は卦辭爻辭の標準を立つる中に具はる。今茲に其の最

も哲學的なる者のみを録す。

三、文言の哲學

文言は乾坤二卦にのみ之れあり。乾坤二卦の卦辭爻辭より倫理思想を發揮せるなり。乾に元亨利貞と云ふ。

文言之れを解して曰はく、

元者善之長也。亨者嘉之會也。利者義之和也。貞者事之幹也。

君子體仁。足以長人。嘉會足以合禮。利物足以和義。貞固足以幹事。君子

行此四德者。故曰乾元亨利貞。

要するに乾徳は元亨利貞なり。故に君子も亦此の四徳あるべしとなすなり。又坤の六二の爻辭に「直方大、不習无不利」の句あり。六二は陰を以て陰位に居る。最も正き者なり。故に文言之れを解して曰はく

直其正也。方其義也。君子敬以直内。義以方外。敬義立。而徳不孤。

と。又注意すべきは文言に因果の觀念あると是れなり。惡をなさば惡報

來る善をなさば善報來るとなす。曰はく、

積善之家、必有餘慶。積不善之家、必有餘殃。臣弑其君、子弑其父、非一朝一夕之故。其所由來者漸矣。由辨之不早辨也。易曰履霜、堅冰至。蓋言順也。

と。是れ後世因果應報説の眞虚を論ずる場合に常に引用せらるゝ所なり。然れども文言の作者は人事界にも亦た必然的に應報ありとなすなり。

四、繫辭の哲學

繫辭の中には述ぶべき思想稍々多し。

(一) 自然の觀察。先づ天地自然の法象は上にありては天下に在りては地。雷霆の鼓動するあり。風雨の潤すあり。日月の運行するあり。寒暑の推移するあり。其の間の法則如何んと云ふに、陰陽是れのみ。曰はく

一陰一陽之謂道

と。而して其の道の行はるゝ自然の法則を知了し其の法則に従て行ふは人の性にして仁たり知たる所以。而して其の未來の進動を知るは易占にして其の測られざる所を神となし。萬物の生々する有様を易となすを説いて曰はく、

一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。仁者見之謂之仁。知者見之謂之知。百姓日用而不知。故君子之道鮮矣。顯諸仁、藏諸用、鼓萬物、而與聖人同憂。盛德大業至矣哉。富有之謂大業、日新之謂盛德。生生之謂易。成象之謂乾、效法之謂坤。極數知來之謂占、通變之謂事。陰陽不測之謂神。

と。是の故に易は自然界の進動を代表する者なり。卦象は之れを形ちに表はす者なり。占筮は其の進動を測度する者なり。故に曰はく、
範圍天地之化、而不過。曲成萬物、而不遺。通乎晝夜之道、而知。

探賸索隱、鈞深致遠、以定天下之吉凶、成天下之亹者、莫大乎蓍龜。

と。其の外易の神明を贊し、其の卦爻の動く千變萬化なるを贊するの語

極めて多し。茲に之れを省く。

(二) 八卦の原由。八卦は何れの所より生ずるやと云ふに太極より生ずるなり。曰はく、

是故易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。

と太極に付いては諸説あり。皆な各々其の意を以て解釋するなり。本文丈にては何にを指すか明かならず。二様に解せらる。一は八卦の形の上より見て八卦は四象より生じ、四象は兩儀より生じ、兩儀は象なき所即ち太極より生せし者と見ることも出來き得べし。一は太極を一大元氣となし、一大元氣より天地を生じ、天地より四時を生じ、四時より八物象を生せりとも解釋するを得べし。其の何れなりや本文の上より決定し難し。前説を取る者は太宰春臺なり。曰はく

極者以人所準據爲義。亦有中義焉。此言陰陽變化之道人之所準據。六十四卦三百八十四爻皆此物也。惟其初統會於此。而未嘗有儀刑。故名之曰太極也。

と後の説を取るは其の人多し。易に天地四時八象と云ふより見れば後の説を可とし、從て一元論となす方穩かなるが如し。説卦序卦雜卦は別に新思想なし。唯だ易を學ぶ者は一讀せざる可からざるなり。

第四章 支那一統の氣運

支那周代の文明は極めて發達せるが故に山東の國は此の文明に浴し、所謂文明人なり。然るに山西の秦及び江南の楚は此の文明の影響を蒙らず。文明上の差異は社會的交通の上に影響し、山西の秦は常に輕無せられ、而して江南の楚も亦た度外視せられたり。況んや塞外の匈奴の如き支那の社會の中に入らざるなり。

周室の盛んなるや、秦楚中國に心なしと雖も其の衰ふるや、中國に志あり。是に於て秦の孝公の如き慨然として國を強ふし、天下を併呑せんとするの志あり。而して公孫鞅の如き法律家は秦に入れり。故に文明の差

異は實に秦をして秦たらしめ、天下を併呑せしめ、以て支那の大社會を作らざる所以の大原因たりしなり。

商子

商鞅姓は公孫名は鞅、固と衛の庶孽公子なり。後ち秦に入り、孝公に見ふるを得、終に變法の令を定む。商鞅著はす所今傳ふる者二十五篇あり。太宰純曰はく、商子の書其の古書たる疑なしと。今百子全書の中に收む。

其一 學說

商子の本領は富國強兵に在り、彼れは先づ人民をして組み伍を造らしめ、其の中に惡をなす者あれば直に官に告げしめ、告ぐる者は極めて賞を厚くし、告げざる者は極めて罰を重くす。又其の間の親睦を維持せしむるため私闘をなす者は各々刑を被るととなせり。一方に於ては農を以て國の本とし、刑を以て民を驅れり。商子以爲らく土地は唯一の材源

にして富國強兵の基本なり。是の故に一切の方便を用ひて地力を盡くす所以を計らざる可からず。即ち民をして農を勉めしめんには(一)學問に由り利口辯達に由り官爵を得るの道を杜絶するに在り。民學問を貴ばざれば愚なり、愚なれば外交なく農を勉めて渝らざるなり。利口辯達に於けるも亦然り。(二)農を賤めざるに在り。(三)諸國の交通を弘からざらしむるに在り。交通弘からざれば耳目淫するとなき氣専らなり。(四)逆旅を廢するに在り。逆旅を廢すれば姦なる者、僞なる者、懐心なる者の家を出るとなくして農を勉む。(五)農をして糶するを得ざらしめ、商をして糶するを得ざらしむるに在り。此の如くなれば皆な農たらむと欲す。土地は社會一切の必要品を給する所以、社會は人民の集合なり。故に土地人民との比例を参照せざる可からず。此れ商子算地篇の著ある所なり。以爲らく地廣くして民少ければ天物を棄るに至り、民淫す。地狭くして民多ければ勉めて開く、故に寧ろ之を可とすれども其の割合を參酌せざる可からず。彼れは最も地を開くの必要を説けり。彼れ常に惡草

と云ふ。即ち地利を悉くすの謂なるのみ。

商子は刑を以て民を齊一する所以の唯一の方法となせり。曰はく、夫刑者所以奪禁邪也地算と。此に對して賞は附屬的なり。曰はく、賞者所以助禁也同上。是の故に罰を重くし賞を軽くすれば則ち上民を愛し民上に死す、賞を重くし罰を軽くすれば則ち上民を愛せず民上に死せず去。故に王者は刑九にして賞一、強國は刑七にして賞三、削國は刑五にして賞も五なり去。以て商子の刑に對する觀念を見るべきなり。

韓非子

第一節 位置

商鞅の後ち秦に韓非子あり。固と韓の諸公子なり、刑名法術の學を學ぶ。嘗て李斯と俱に荀卿に學べり。今傳ふる所の韓非子五十五篇あり。其中初見秦、存韓の二篇は明かに後人の假托なり。初見秦に云はく、大王以詔破之、拔武安と。事は昭襄王四十七年に在り。大王は呼詞なり。今始皇に

上書し而して昭襄王を指して大王となす。此理あるべからず。存韓に李斯、韓非を害するの言あり。後人の作なること明かなり。韓非の師事せし所は荀卿にして好む所は黄老なり。故に解老、喻老あり。韓非は實に此れ等兩思潮を調和したる者なり。以ふに社會は孔子の時より追々亂れて孟子、墨子、諸子の經營にも拘はらず。荀子の時に至れば殆んど其の極に達せり。隨ふて儒學派の説も追々遷轉せり。孔子は仁と云ひ、墨子は愛と云ひ、孟子は仁義と云ひ、而して荀子は禮と云ひ去れり。各々時勢に適せるなり。此の傾向は猶ほ進むで己まず。遂に韓非に至れば法と云ひ了はれり。韓非は此の法の觀念と老子の思想とを結合せり。

第二節 法律論

韓非は法律至上主義なり。法律の前には骨肉の親を問はず、貴賤の別を論せず、一事一行須く法律に遵じて作動すべく、法律は天下を修むるの準なり。曰はく、釋法術而心治、堯不能正一國。去規矩而妄意度、奚仲不能成

一輪入と。法律の外一步も出入すべからず。其の過て出入する元より不可。入主意を以て法律に出入する元より不可なり。曰はく。明主之道一法而不求智。

法律は前に鑑み後を慮り、以て作れるものなり。然るに人民は目前の利を知り、永久の利害得失を顧みず、上急に耕田墾草せしむるは民産を厚ふする爲めなり。而かも上を以て酷となす。刑を修め罰を重くするは邪を禁するなり。而かも上を以て嚴となす。錢粟を徵賦するは金庫を實するなり。而かも上を以て貪となす。境内戰陣を教へ士卒を閱みし力を併せて疾闘するは虜を禽にする所以なり。而かも上を以て暴となす。此四者は治安なる所以而して民悦ぶを知らざるなり。故に民の心を得ると云ふは政治を知らざる者の言なりと。又曰はく夫の流涕して刑するを欲せざるは仁なり。然り而して刑せざる可からざるは法なり。先王其の法に勝て其の泣を聴かず。即ち仁の治を爲すに足らざる明かなり。且つ彼れは法律を重んずるの結果仁義を排斥せり。以爲らく民は勢に

服せども義に服せず。仲尼は聖人なり、天下の大を以て服役するもの僅かに七十人。魯哀公は下主なり、南面して君とし、境内の民敢て臣とせざるなし。民は勢に服し義に服するにあらざるなり、今説をなす者勢に乗するを知らずして務めて仁義を行はんとす。此れ人主をして仲尼たらしめんとするなり。此れ得べからざるとなり。世に貧困に施與するを仁義となし、百姓を哀憐し誅罰するに忍びざるを惠愛となす。貧困に施與するは害あり、(一)施與する物品は之を富者より貢納す、富者は力耕疾作の結果なり。貧困は懶惰の結果なり。即ち力耕疾作者より取りて懶惰者に與ふる者なり。(二)功なき者賞を得、此れ民に懶惰を奨勵するものなり。罰するに忍びざれば暴亂の者止まず。故に仁義惠愛の世を治むるに足らざるや明かなり。

故に有尺寸而無意度危安、有賞罰而無喜怒用の二句は以て韓非の法治思想を推すべきなり。

刑罰は人心を震慄し、邪心を禁遏する所以。故に刑罰は重きを可とす。是

れ韓非が刑の觀念なり。曰はく今不才の子あり。父母之を怒れども改めず。郷人之を誅れども聽かず。師長之を教ふれども變せず。然るに州郡の吏官兵を操りて而して姦人を求索する時は忽ち恐懼して其の節を變じ其行を易ふと。又公孫鞅の言を引いて曰はく刑を行ふに輕を重くする時は輕者も至らず。況んや重者をや。是れ刑を以て刑を去るなりと。是の故に刑罰は民の畏惡する程嚴重ならざる可からず。

第三節 政治論

第一款 人君は道を守りて

虚靜なるべし

老子の思想は實に韓非に由りて繼承せられたり。曰はく、道は見る可からず聞く可からず、虚靜にして事なし。然かも能く萬物の始めとなり、是非の紀となり、自然の法則を把握す。人君の治世に於ける又此の道に則

り、言行を隱密にし、國家行政の中樞たるべし。其の言に云はく、聖人執要四方來效。虚待之と。又曰はく人主道靜退以爲資と。人主の要務大略左の諸項に歸す

- 一 好惡する所を見はす勿れ
- 二 賢に任ずる勿れ
- 三 某々に信すること勿れ
- 四 密計を近臣に漏す勿れ

人主の言行指示すべき處あるは人臣の由て以て入るべき攀縁なり。人主惡む所を示さば群臣端を匿くして罪を免かれ好む所を示さば行ひを飾りて用ゐられんと欲す。豎刁易牙は君の好む所に縁つて用ひられ、大亂の源をなす。人君賢に任ずる時は臣下其賢に乗じて以て君を劫さんどす。人君妻子を信する時は人臣由て以て私をなさんどす。子を信するの弊は優施麗姬に由て申生を殺し奚齊を立てしが如し。人臣に密計を泄らす時は群臣論するある毎に此れ等近臣の心に順適せざるを得

す。乃ち忠直日に疎んせらる。故に人主は一切自己の心狀を泄らすべからず。人臣の君に入らむとする耽々として窺ふと虎の如し。

第一款 百官整理論

故に人君は虚靜にして臣下をして其の能を見はさしむべし。老子所謂去好去惡群臣見素と即ち是れなり。夫れ萬物各其の性を異にす。雖は夜を司り猫は鼠を執ふに適す。早晚其の本性を發表すべし。人主虚無恬淡自ら守る時は臣下各々其の本能を發表すべし。發表は即ち名の在る所。人主之れに相當の官職を授く。官職は實なり。以て名實の相叶ふや否やを檢す。曰くは虚靜以待令。名自命也。令事自定也。主道。曰はく虚則知實之情。靜則知動者正。上向。人主の能く人材登用の目的を達するは虚靜なるがためなり。此の人材登用法は人主一己の思慮にて成すにあらず。法をして人を撰ばしむとは蓋し此の謂なり。名實を參同するは賞罰の生ずる所。功其の名に當る者は賞し、當らざれば罰す。名大にして功少なる者は罰し、功小なるを以て罰するにあらず。名に當らざるを罰するなり。其の名小にして功大なる者も亦罰す。其の功大なるを説びざるにあらず。名に當らざるを罰するなり。名に當らざるは其の害大功あるも償ふ能はず。若し夫れ人主參驗せずして誅を行ふ時は法術の士死を犯して其の説を進むるものなく、功あるを待たずして爵祿する時は姦邪の臣利に乗じて其の身を退くるものなし。故に主上愈々卑く私門益々尊し。

第三款 權力

法律は權力を以て強制する所たり。故に法律を論ずる者は權力に想到せざる能はず。韓非も亦た實に此の權力を認めたり。然れども權力其物の概念は未だ明確ならず。唯だ權力の發現なる所の刑と徳とに重きを措きて言をなせり。曰はく仲尼聖人と雖も終に天下を得ず。天下の大を以て服する所僅かに七十人。哀公は凡庸の主。然かも南面して國內の人

庶服従せざるなし。是れ人主の勢に服するなり。人主は何に由りて此勢を有するか。刑徳の權を把持するに由らずむばあらず。此の權を有する者は中主と雖も以て天下を治むるに足り、此の權なければ堯舜も以一州を治むるに足らず。故に此の權や行政の基底たり。此の權や人君に於ける爪牙なり。爪牙あれば人君なり。牙爪なければ人君の實なし。虎の爪牙なき如し。虎にして爪を失ひ、狗をして用ひしめば反つて狗に服すべし。人君此の權を失ひ、人臣に移る時は反つて臣に制せらる。何を以て此の權の價值ありやと云ふに誅罰は人臣の畏るゝ所にして慶賞は人臣の利とする所なり。人主自ら刑徳を用ふれば群臣其の威を畏れ其の利に歸す。

第四節 結論

韓非の思想は頗る明白なり。主上は虚靜自ら守り、客觀的に法律を設定し、由て以て國家を治め、由て以て人材を登庸せんとす。其の使鷄司夜令

狸執鼠皆用其能上乃無事と云ふは老子の思想を完全に發揮せる者なり。

韓非は堯舜の治を胸に畫し日々之れを唱説する迂儒の比にあらず、現在の社會に適當する法律を作せんとせり。又其の然る所以を時勢の變遷に歸して曰はく(一)古代は人少く食物多く丈夫耕さずして草木の實食ふに足り、婦女織らすして禽獸の皮衣るに足る、力むるを事とせずして衣食足る。故に民争はず、厚賞行はず、重罰用ゐず、而かも民自ら治まる。今代の如きは人多く財少なし、今人五子あり、子又五子あり、大父未だ死せざる時は二十五孫あり。此の如き比例にて古代より追々増加し來り人民は力勞を事とすれども供養薄し、故に民争ふ。賞を倍し罰を累ぬるも亂を免れず。(二)古の天子は質朴、身匹夫の勞を取り、茅茨翦らず、采椽斲らず、食は糲糲、羹は藜藿、冬日は麕裘、夏日は葛衣、是れ監門の養ひに過ぎず。今の縣令は一日身死するも子孫累世驕駕す。故に古は軽く天子を辭するも是れ難きにあらず、監門の養を去り、臣虜の勞を離るるなり。今の

縣令は之に反し、人之を重んず。(三)上古は道徳に競ひ、中世は智謀に逐はれ、當今は氣力を以て争ふ、舜有苗を服するに干戚を以てせり。此れ道徳盛んなるもの勝つなり。徐偃王漢東に處り、地方五百里仁義を行ひ地を割いて朝する者三十六國。荆文王其の己に害あるを恐れ、兵を擧げて徐を伐ち、之を滅す。此れ仁義今に用なきなり。夫れ古今此の如く時勢の状況を異にす。此の變遷に鑑みて以て現今を治むる所以の策を講せざる可からざるなり。是の故に當今の急務は氣力を養成し、嚴刑重賞に由て民庶を誘導するに在り。仁義の政、辨智の巧の如きは今世に用ふ可からざるなり。

韓非は人情を輕視せり。君臣の間は僅かに利益の觀念に由て結合するとなし、夫婦の間も親めば合し疎んずれば忽ち離るとなせり。

第五章 政治的武力的社會の現出

政治的武力的なる秦は天下を一統したり。秦は周の封建に懲り、中央に

權力を集中し地方より起り得る者あらざらしめんと欲し、天下を分けて三十六郡となし、官吏を以て之れを治めしむ。官吏は中央政府より俸祿を給せらるゝのみ。又た天下の兵器を以て危險なる者となし、之れを咸陽に集めて燒鑄し、政を議するは亂の端なりとし、諸子百家の書を燒棄し、儒生を坑にせり。秦の天下は純然たる武力的政治主義の發現せる者なり。此くて支那の社會は共通の一大範圍をなせり。然れども夷狄は人種の差異の甚しきがために彼等と交通するを好まず。政治的武力的なる秦を以て猶ほ且つ長城を築きて以て之を界し、一層彼の文明の程度甚だ低きたり。支那社會に取りては害ありて益なきなり。故に始皇の爲す所一概に非難すべきにあらず。

第六章 極端なる法治主義に對する反動

先秦時代は如何に諸子百家の説が續出せるか。此れ等の説は當時に用

ひられざりしと雖も人心裡内に浸潤すると極めて深し。殊に孔子の説に至りては當時已に三千の弟子を有せし程なる故其の人心裡内に浸潤せしは推して知るべきなり。墨子の説に於けるも然かり。老莊の説に於けるも然かり。殊に社會混亂の結果として老莊の説は最も汎く行はれたり。然るに此れ等の説は皆な人民をして幸福を得せしめんとするに在り。人民をして完全なる人格たらしめんとするに在り。秦の極端なる法治主義は賦歛を厚ふし、行爲を束縛し、挾書を禁し、而して高大なる宮殿万里の長城人民を使役すると幾何なるを知らざるなり。其の極端なる到底人情と相ひ容れざる者なり。始皇帝の如き絶世の英主其の位に居る時は能く天下を維持し得たりと雖も業に己に之を憎む者は諸方に起れり。況んや昏愚二世皇帝の如きに至りては天下殆んど之れを載くの意なきなり。茲に於いて亂者相ひ次いで出づ。然かも當時は封建の制にあらざるため。大なる土地人民を有する者なく。又た秦が名族を殄滅せし後なるを以て秦に反對して起る者は皆匹夫のみ。陳勝、吳廣先

づ起りて兵を擧ぐ。漢の劉邦之れに次ぐ。而して一方には又た頂羽の起れるあり。大小數十百戰の後に天下は終に劉邦に歸せり。

第三編 漢代社會の太平

第一章 政治的太平

大亂の○後○には○必ず○大○平○和○あり○。秦○の○社○會○の○亂○れ○た○る○は○輿○論○に○反○せ○る○が○爲○め○な○り○。茲○に○於○て○漢○は○極○め○て○寛○大○に○從○ひ○其○の○始○め○は○法○三○章○を○定○む○る○の○み○。曰○は○く○人○を○殺○す○者○は○死○な○ん○、人○を○傷○つ○く○者○は○罪○せ○ん○、盜○む○者○は○罪○あらんと、呂○后○、蕭○何○、曹○參○、張○良○の○徒○皆○な○老○莊○を○好○め○り○。此○の○故○に○漢○代○の○初○政○は○極○め○て○粗○な○り○き○。是○れ○實○に○當○時○の○輿○論○に○促○さ○れ○た○る○者○な○り○。又○秦○の○郡○縣○制○は○當○時○保○守○主○義○な○る○書○生○の○爲○に○非○難○せ○ら○れ○た○る○處○に○し○て○始○皇○帝○が○書○を○燒○き○儒○を○坑○せ○し○は○之○れ○が○爲○め○な○り○。郡○縣○制○は○社○會○の○人○心○の○未○だ○幼○穉○な○る○當○時○に○は○甚○だ○不○適○當○な○る○者○な○り○き○。是○に○於○て○漢○の○高○祖○は○多○く○同○姓○の○子○弟○を○封○じ○以○て○漢○室○を○輔○翼○し○た○り○。即○ち○楚○國○を○分○ち○て○二○と○な○し○、從○兄○賈○を○荆○王○と○な○し○、淮○東○五○十○三○縣○に○王○と○し○、弟○文○信○君○交○を○淮○西○三○十○六○縣○に○王○と○し○、兄○喜○を○代○王○と○な○し○、代○の○地○五○十○三○縣○に○王○た○ら○し○め○、庶○長○子

肥○を○齊○王○と○な○し○、齊○の○地○七○十○三○縣○に○王○た○ら○し○め○た○り○。斯○く○皇○子○の○封○せ○ら○れ○た○る○も○の○を○諸○侯○王○と○な○し○。王○子○の○封○せ○ら○れ○た○る○も○の○を○諸○侯○と○な○し○。群○臣○異○姓○の○功○に○よ○り○封○せ○ら○れ○た○る○も○の○此○れ○を○徹○侯○と○云○ふ○。然○れ○も○徹○侯○は○大○率○夷○滅○せ○ら○れ○て○其○の○能○く○分○土○を○保○つ○も○の○少○し○。是○を○以○て○同○姓○諸○侯○天○下○に○偏○く○呼○吸○相○應○し○、脉○絡○貫○通○し○、連○群○跨○縣○悉○く○劉○氏○の○有○と○な○し○。以○て○一○時○を○鎮○撫○す○る○の○便○を○得○た○り○し○も○未○だ○幾○く○な○ら○ず○し○て○尾○大○掉○は○ず○。忽○ち○に○し○て○七○國○の○反○亂○あ○り○。漢○の○高○祖○は○馬○上○に○て○天○下○を○得○、馬○上○に○て○之○れ○を○治○め○ん○と○せ○し○が○、儒○術○を○習○ふ○者○陸○賈○の○勸○む○る○處○と○な○り○。天○下○を○治○む○る○は○文○事○に○よ○ら○ざ○る○べ○か○ら○ざ○る○を○知○れ○り○。斯○く○し○て○一○方○に○は○社○會○的○の○平○安○が○保○障○せ○ら○れ○。一○方○に○於○いて○は○政○府○が○又○た○之○れ○を○獎○勵○す○る○と○な○れ○り○。乃○ち○諸○種○の○學○問○の○起○る○其○の○基○礎○を○得○た○り○と○云○ふ○べし○。然○る○に○漢○代○の○學○問○の○性○質○を○規○定○せ○し○者○は○實○に○其○の○以○前○に○起○れ○る○典○籍○の○厄○な○り○。

第二章 學問の勃興

第一節 典籍の厄

先秦時代には未だ紙の發明なかりしが書物は、大底漆を以て竹簡に書かれ、此を編みたるものなり。而して卷となして貯藏せり。此の故に一巻二卷の稱あり。先秦の典籍は甚だ多し。六經を始めとし、春秋の三傳の如き老莊諸家の説の如き其他諸子百家の書物は皆如此にて藏されたり。此の故に一切の典籍を一人にて貯藏するが如きとは到底出來得ることにあらず。且つ周の末葉に至りては諸侯なるものありて各學者を其の城下に呼び寄せたり。此を以て支那の典籍は天下至る所に散在して居れるなり。然るに秦の始皇帝は丞相李斯の言を用ひて醫藥と卜筮種樹の書の外は悉く天下の書を焼かしめたり。如何なる所にて焼かしめたるかと云ふに守尉に至りて焼かしめたり。守は吾が國の縣知事に相當するものなり。尉は此に相當するものなし。守を助けて兵事を司る者

なり。此の故に守尉に行いて之れを焼かしむると云ふは之れを日本にて云へば縣廳に持參して縣廳にて焼くと云ふ如し。當時政府の命令の十分に行き届かざる時に當りて其の命令の漏れたるものもあり。又隠匿して之れを焼かざりしものもありしことは疑ふ可からざるとなり。此の故に奏火を経ても典籍の残りたるものは天下至る所に之れを見たるに相違なきなり。彼の咸陽の博士の府の如きは悉く典籍を藏したるものなり。此の秦火は始皇帝の三十四年戊子の年に起れるものなり。其の後八年即ち乙巳の年に於て沛公西の方咸陽宮に入り、蕭何が急に秦の丞相の府に入りて律令及び古籍等に關する書物は一切之れを收めたり。惜むらくは博士の府に到りて一切の典籍を收むるをなさざりき。此に於て此等漢大なる典籍は悉く同年の暮項羽の爲めに焼かれたり。

以上の秦火と項羽の火とを経て支那の典籍は多く殘欠となれり。然れども尙天下至る所に多少在存しつゝありしとは疑ふ可からざる所なり。

り。此の典籍を集むるは實に漢代の學者の仕事なりき。是れに依りて以て漢代の全般的思潮の如何に不活潑なりしかを推測するを得。一方に於いては、秦の苛政に、隱、遯、し、つ、い、あり、し、所、の、碩、學、老、儒、は、嚴、冬、の、春、陽、に、逢、ひ、て、草、芽、の、萌、ざ、す、が、如、く、漸、く、社、會、に、現、は、れ、た、り。

第二節 前漢思想の概観

支那は哲學思想の活潑なる國にあらず。其の思想は全く實際的なり。彼の希臘國にありては已に二千餘年前の昔に於いても純粹なる哲學思想の勃興せるあり。所謂自然哲學者なるものは幼稚なるものとして之れを取り除けても、「ピサゴラス」派の數に關する説の如き或は「ヘラクライトス」の實在に關する意見の如きは純粹に哲學的にして又頗る高尚なるものなり。彼の「ソクラテース」以後「プラトーン」の思想の如きも純粹に哲學的なり。西洋の哲學史に於いて希臘時代は頗る榮花のある時代なり。然れども支那に於いては此れと異なり純粹に哲學的なる思想

は此の先秦時代に發見するを得ず。書經に屢々天に關するとはあれども殆んど空名にして天の概念を分析せんと試みたるものはなかりし。此の故に先秦時代の如きは哲學思想に於ては頗る希臘思想に遜色あり。彼の先秦時代に於いて諸子百家勃興して支那思想の最も活動せる時代を作り出せるは一に此れ時代的必要に促がされたるなり。即ち社會を維持せんとする觀念を中心として諸子の思想を湧起したる者なり。實に先秦の思潮は一として社會的ならざるものなし。此の故に漢の如くに英明なる天子が上に居りて其の雄才大略を用いて天下を經綸せる時は哲學思想は勃興せざるなり。漢代に哲學思想活潑ならざりしは支那に取りては寧ろ當然の結果なり。

然るに彼の陸賈なる者が高帝に進めて儒教を用ひしめてより歴代の天子は漸次に儒者の道を重んずるに至れり。之れと同時に先きに述べたる呂后、蕭何、曹參、張良の徒が老莊の道を好み、老莊なる者も亦時代の人の喜ぶ所となれり。此に於て先秦の典籍を求めんとする思想は頗る

強くなりしなり。漢代の思想を一言にて云へば典籍を完備せしむるにあるなり。此の故に前漢時代に出來たる書物は多くは編輯物の類なり。例へば淮南子の如き史記の如き劉向説苑の如き此の類なり。彼の漢代に於いて隆盛を極めたる詩賦の如きに至りては是れ全く精神のなき文字の集列なり。哲學思想として見る可き者は殆んど微々たりき。先づ指を屈すべきは楊雄なり。

漢代の思想は此の如く不活潑なるものにして其の哲學として見る可きものも甚だ僅少なれども吾人は一般に漢代の思潮の大要を見んと欲する故に通常は哲學家として數へられざるものをも擧ぐべし。

第三節 前期の思想

前期と云ふは漢業初まりてより武帝の即位せるに至る迄を云ふ。此の間の思潮は一面に於ては儒學を實際に應用せるなり。一面に於ては先秦諸家の説を蒐集するに力をよびみる者なり。其の由りて來る所は前

章に述べたる如くなれども更に一層近接せる原因の述ぶ可き者あり。當時を去ると數百年の昔に於いて彼の有名なる孔子生れ出でたり。孔子の弟子は既に三千人の多きに達せりと稱せられたり。其より以來着々廣がりて殆んど天下に充滿しつゝあるに至れり。秦の始皇帝の長子扶蘇其の父を戒めて言ふに諸生皆孔子を論説すとあるに由りて知る可きが如く頗る盛んなる者なりき。然るに孔子其の人は空しく經綸の策を抱けるのみにて之れを實際に施すと能はざりき。孔子其の人に於いても此れ頗る遺憾の次第なりき。従つて其の教徒には又此の感情充滿せり。恰も此の時暴秦の政は専ら殘酷なる法律に由りて少しも仁義の道を混へず。是れを以て孔子の教徒の彼れに對する感情は益々激昂せり。其の感情の發したる者が、即ち漢代當初の儒學的潮流なりしなり。彼の陸賈が漢の高祖に罵倒せられたるにも關はらず、其の面を犯して尙仁義の説を唱道して遂に木強なる高祖を説服するに至りたる勇氣は何れより來りたるかと云へば即ち彼の一般の感情に依りて激發せ

られたるなり。當時此の潮流に沿ふたる學者の中主なる者を擧ぐれば第一叔孫通、第二陸賈、第三賈誼、第四鼂錯等何れも儒者として其の説を當時に行はんとしたる者なり。

若し其れ純粹哲學的潮流に沿ひたる者を上ぐれば則ち淮南子あるのみなり。淮南子の説は極めて雜駁にして諸子百家の説を羅列するに外ならず。然しながら此れ實に漢代の一般の潮流に従ひ居る者なり。今吾人は漢代の思潮を論ずるに當りて此れを儒學派と哲學派との二に分つ。

儒學派

(一) 叔孫通

其一、傳

叔孫通は薛(山東省の極南の方)の人なり。秦の時に召されて博士となり。博士は官名。二世皇帝の末年陳勝吳廣起ちて兵を擧ぐ。二世皇帝群臣

に問ふて曰はく叛者ありと聞く。如何せん。群臣答へて曰はく直ちに打つべし。皇帝大に怒る。叔孫通皇帝の意を察して曰はく諸生の言は皆誤れり。彼等叛者は小なる盜賊の類のみ。憂ふるに足らず。皇帝更らに之を群臣に問ふに或は叛者なりと云ひ、或は盜賊なりと云ふ。皇帝は皆是等を罪して獨り叔孫通をのみ賞せり。叔孫通は僅かに虎口を免れて薛に至り項梁に従へり。後更に楚の懷王に従へり。懷王死して更に漢の高祖に従へり。高祖儒者の服を喜ばざるに由り、其の意に入らんと思ひ、短き衣服を着用せり。更らに高祖の意を得んと思ひ、多くの盜賊壯士の類を進めり。高帝天下を平らげたる時凡ての禮儀は簡單を尊び、朝廷の儀式頗る亂れたり。諸侯群臣は儀式の式場にて互ひに喧嘩するに至り、高帝も亦た之れを憂へたり。是に於いて叔孫通帝に乞ふて當時魯の國の諸生と共に朝儀を制作せり。皇帝の喜ぶ所となり。大官に至り、其の後孝景帝に事へて又儀式を制作せり。叔孫通は如此屢々主君を變じたる故に君に事へて諛ふるの嫌あり。當時魯の或二人の書生の如きは叔

孫通を以て諂諛の人となせり。爲めに其の召に應せざりしと云ふ。然れども此れ叔孫通の心事を察せざる者にして若し其の心事を察したる者あらば必ず賢人となすに相違なからん。何んとならば叔孫通は腦中一個の經綸策を抱ける者なり。此の策を施すには其の君を得ざる可からず。二世皇帝や楚の懷王項梁の如き者は是れ論するに足らず。必ず漢の高祖其の人の如きに遇ふて初めて其の目的を達し得べきなり。況んや支那に於いて特に亂世に於いて君主を變ずるが如きとは支那人に取りて答む可きとにあらざるに於いてをや。此の故に漢の司馬遷の如きは頗る彼れを賞揚せり。

其二、事業

然らば叔孫通は如何なる事業をなせしかと云ふに實に三事業の注意すべきあり。朝儀、宗廟の儀法、其他諸官の儀法を作りしと是れなり。此等の儀法は規律なき漢の君臣をして秩序整然たらしめたり。此の故に司馬遷は彼れを賞して漢家の儒宗なりと云へり。叔孫通思へらく、禮樂は

時に從て變遷するものなり。五帝は各其樂を異にせり。三王は皆其禮を同ふせず。禮樂なる者は時勢に從ひ人情に應じて變遷すべき者なりと叔孫通は此の考よりして秦の禮と古禮とを斟酌して以て漢の朝廷の儀式を定めり。此れを實用せしは高祖七年新宮殿の出來上りたる時にあり。時に諸侯歲始の禮を遂げんとして朝廷に出でたり。當時の歴史家其の時の狀を形容して群臣恐れ懼れて敢て秩序を亂るものなしと云へり。其の儀式の盛んなりしことは皇帝が今日初めて皇帝たるの貴きを知れりと云ひたるに由りて明かなり。然れども秦の禮は君を尊ぶに偏せしかば之れを骨髓としたる叔孫通の朝議も亦其の弊あり。宗廟の儀法は孝景帝の時に作りたる者なれども其の詳細なることを知る能はず。殊に諸の儀法の如きに至りては今日之れを知るに由なし。

二二 陸 賈

其一、傳

陸賈は南方楚の國の人にして當時の辯士なりき。漢の高祖に従事せり。中國已に平らぎたりし時獨り南越王尉佗なる者あり。敢へて屈服せず。此に於いて高祖が陸賈を使として辯舌を以て此れを漢の臣とせり。陸賈が尉佗の所に至りたる時一方には漢の高祖の大事業と大人物とを説き一方に於いては憐みの精神に富めるとを示めし。席上に於いて此れを籠絡し遂に漢の臣とせり。歸り來りて高祖に進めて仁義の政を行はしめたり。言は陸賈の著はせる新語に具はれり。呂太后が諸呂を王とせる時退きて民間に下り其の子供等と日月を送れり。諸呂が幼帝を危くせんとせし時陳平に謀り進めて太尉の絳侯と結托せしめたり。想ふに文事を司る將相と武事を司る太尉とが一致せば天下知るべきなりと。此れに依りて諸呂の謀衰へ孝景帝位に即くを得たり。孝文皇帝の時又南越に使して再び南越の叛心を和げたり。此れに依りて以て陸賈の辯士なることを知るに足る。

其二、事業

陸賈の事業として述ぶ可き者は殆んど之れなし。唯漢の高祖をして仁義の政を行はしむるに至りたるこのみは明かに認む可きとにして又同時に歴史上注意すべきとなり。

陸賈の著はす所は新語あり。此書は漢書には二十三篇とせり。隋唐以下は二卷とせり。宋の王伯厚の玉海には七篇とせり。今日の書物には十二篇とせり。蓋し元明以後に於いて加へたる者なり。此等の考証にては頗る疑はしき書物なり。其内容より云へば頗る學者の文なり。太史公之を評して辯士とせるには似ず。然るに太史公が此を讀で辯士なりとし又た尉佗を説服したる辯舌あるとより見るに其の辯士たるとは疑ひなし。然るに其書は文章甚だ美ならず。辨士の作たるに似ず。尤も辨士なりとも必ず文に巧なりとなすにあらず。辨と筆とは全く別なると多し。又又文章の巧拙を判断するも難き故確とは言ひ難し。然れども吾人は彼此を計考し、以て眞書にあらざるべしとなす。

新語は十二篇より成り、仁義を奨勵して禮樂を尊び以て先王の政治を

施かんとせるとは全篇至る所に此精神を見るを得、其思想の外に多少哲學的と見る可き者は二三あり。其第一は天は道の本源なるが故に政治は之れに法る可しとなすとなり。事は道基にあり。第二天感應説なり。此れ明誠術事等にあり。第三は道家の説に類せる者なり。即ち氣を養ひ生を修め精神を通じ壽命を延ばす者は志外に馳せずと云ふが如き是れなり。是れ懷慮箝にあり。是れ等の思想は漢の學者には珍らしき説にあらず。

(三) 賈誼

其一、傳

賈誼は陸賈よりも若く、孝文帝の二年初めて朝廷に登用せられたるものなり。此時歳僅かに二十三才なりき。然るに高帝の下問に答へて滔々辯じ去りて他の博士諸先生を壓倒せり。遂に太中大夫の官に至り、文帝六年賈誼は二十七才學者の見識に依りて漢の制度に關し献白をなせ

り。其献白は後に述ぶる所の如し。孝文帝は之れを用ゆることを得ざりき。其名勢朝廷を傾けしかば遂に讒言に遇ひ長沙王の大夫とせられたり。道に湘水を渡り屈原を弔ひ弔賦を作れり。長沙に至りて其地の濕氣多きに遇ひ頗る苦めり。然るに一年餘にして再び呼ばれて朝廷に至る。孝文皇帝は賈誼に問ふに鬼神のとを以てせり。其の答要領を得たるに由て梁懷王の大夫となれり。懷王が馬より落ちて死せるに由り賈誼は自分の失策として大に之れを悲み、一年餘にして死せり。時に孝文皇帝十二年歳三十三才なりき。

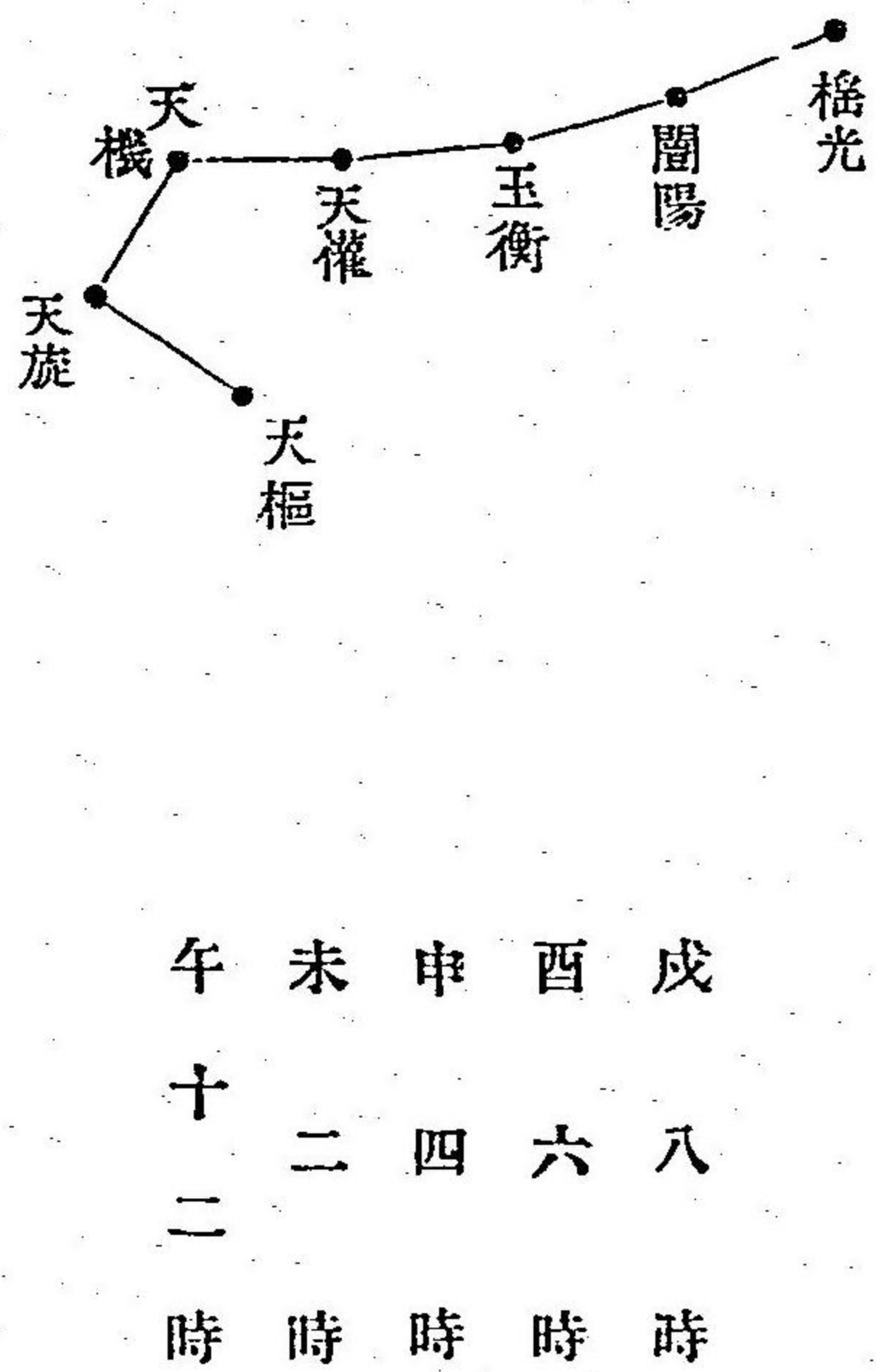
其二、事業

賈誼の事業は實行せられざりしが思想としては非常に述ぶべき者あり。先づ第一に述ぶべき者は廿七才の時に建白せるとなり。其建白は六ヶ條あり。但し賈誼自ら六ヶ條と判然分けしにあらず。第一改正朔、第二色尚黃、第三數用五、第四易服色、第五定官名、第六典禮樂此等の六ヶ條は當時にありて頗る甚深なる意味を有せる者なり。然れども歴史家は單

に○此○の○條○目○を○列○ぶ○る○の○み○に○し○て○賈○誼○の○此○の○獻○白○を○な○せ○し○當○時○の○思○想○に○溯○り○て○委○細○に○論○評○せ○る○者○な○し○今○吾○人○は○之○を○論○述○せ○ん○と○欲○す○

イ、改正朔

支那に革命ある時は王者は必ず正朔を改む。正朔とは如何なる者なるか。正は即ち正月なり。朔は月の初めなり。此を定むるには古代の天文學



書に依る可きなり。古代の歴法は七星に依りて定められたる者なり。七星とは右圖の如し。此の七星は地球を轉回しつゝある者なり。而して月

によりて搖光の建つ方向を異にす。同じ夕刻八時即ち戌の刻にても正月には寅の方を指し、十二月には午の方を指し、十一月には子の方を指す。其の指し方に依りて月の期節の早きか遅きかを知るなり。朔とは蘇(淮南子の内にありると云ふとなり。即ち月が全く暗くなりて更らに光を發するを云ふ。其の光を發する初めが月の始めなり。然れども其の始めが精密に何時たるかを云ふと能はず。茲に程度の差あり。即ち僅か現はれたる時と尙少し多く現はれたる時との差あり。正朔と云ふ意味は如此者なり。實に一年の曆を定むる時なるが故に昔は最も此の正朔を重んじたる者なり。正朔を奉じ居るは即ち其の朝廷の權力を認めて居る標徴なり。我が現在の状態に於いて西洋紀元を用ひても人が此をあやしまざるとは異なり。其の朝廷の權力を認むれば必ず其の正朔を奉じたる者なり。夏の世は寅に指すの月を正月となし、殷の世は午に指すの月を正月とし、周は子に指すの月を以て正月とせり。而して朔は如何と云ふに夏は夜の明け方を以てし、殷は鷄鳴を以てし、周は夜半を以て

せり。此の如く正朔に重きを置くは先王の所謂制度にして政治の刷新を示すにも足り、人民をして舊來の制度を廢したることを示すにも足り、特に支那の一般の習慣として正朔を重んずる所よりして賈誼は正朔を改むる必用を唱へたり。

ロ、色尙黃

支那には昔より五行説あり。五行とは水、火、木、金、土なり。天下に王となる者は其の中の一つの徳を持つ可き者とせり。然らば如何なる徳を持つ可しと云ふに此に二説あり、一は五行相生の順序に依れば木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生ずるなり。大皐、炎帝、黃帝、少皐、顓頊は此の順序に由りて相次ぎたる者なり。然るに他の一説は五行相勝の順序を用ゆ可しとする者なり。此説に依れば先代の徳を亡ぼす所の徳を取りて用ゆ可き者なりとなり。此順序にて相嗣たる者を周、秦、漢となす。周は火徳を用ひたり、然るに秦は周を亡ぼしたるが故に水徳を用ひ、而して漢は土徳を用ひたり。即ち水は火を滅し、土は水を滅する者

なり。此の五行説は固より迷信なり。然るに支那人の深く心に浸み込みて抜く可からざる者なり。而して五行説に據れば一切の物が皆五行に配當せらるゝなり。色の如きは其の最も顯著なる者なり。此の説に曰はく、水は黒く、金は白く、木は青く、火は赤く、而して土は黄き者なり。今漢は五行相勝の順序に従ひて土徳を採用せり。此故に其必然の結果として黄色を採用せざるを得ず。一説に色は黄色を貴ぶと云ひたるは文帝十五年に黃龍の瑞ありたるに依るとするも此は賈誼の思想にはあらず。何んとなれば賈誼が此の建白をなしたるは其の以前即ち文帝六年の事なればなり。

此の五行説は元より迷信にして今日より見れば何等の意味もなきことなり。如何なる所より此の如き説が出でしかと云ふに、至て覺束なき聯想より來れる者なり。例へば鋼鐵の色は白きが故に金を以て白しとなし、木の葉は青きが故に木を以て青となし、火は赤きが故に火を以て赤となし、水は其中知る可からざる故に黒となし、土は黄色を帯びたる故

に土は黄なりとなせるなり。是れ元より幼稚なる思想に於てなしたる分類にして的として其の中に入らざる者多し。東西南北及び中央を以て五行に配するも同じ聯想より來る者なり。即ち東方は日の出る所にして陽氣なるが故に此を以て木となし、南方は太陽の最も高き所にあり故に陽の極となし、之を火となす。西方は日没するの所にして陰氣なれば此を以て金となし、北方は日全く幽暗の地なれば此を以て水とするなり。然るに尙土の殘れるあり。此は配當の順序に苦むが故に之を以て中央とするなり。陰陽五行説の如き幼稚なる聯想より來る者にして哲學的に論ずる價值なし。然れども支那の人心に浸み込む甚だしきが故に之を利用するは政治家の職分なり。此に於て賈誼其の人は土徳を貴ぶに伴ひて黄色を貴ぶと定めたり。

ハ、數用五

此は同じく五行説に基ける者なり。五行説に由れば、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十は各水、火、木、金、土に對當する者なり。此の事は河圖洛書に於ても見

へ居れり。河圖とは伏羲の時に黄河より龍馬出で、背に圖がありたりと云ふ其者なり。伏羲は此に基いて易を作れり。洛書とは禹が水を治めたる時に洛水より出でたる龜の背にありたる書なり。禹が之れに基いて九疇を作れりと云ふ。此等は皆傳説にして信するに足らず。而して一般の説として言ひ傳ふる者は前述の如き者なるが故に秦は水徳を用ひ従て六の數を貴びたり。而して漢は土徳に對當するが故に五の數を用ひんとせり。以爲らく五の數は土徳に相當する者たるが故に此を用ふるは天地自然の理に叶ひ従て吉祥なる者なりと。

ニ、易服色

既に色を定めたるが故は服色を黄と定むるは當然の事なり。此れより先き金徳を用ひたる殷は白き衣を用ひたり。而して周は赤き衣を用ひ、秦は衣冠旗等皆黒きを貴びたり。歴代此の如くなりければ漢も亦た服色を易ふるは自然の勢なり。

ホ、定官名

是れ即ち官の制度を定むるなり。之れを定むるも五行説より演繹し第五の數を用ふるなり。換言すれば凡ての官を五つづゝにするなり。

へ、興禮樂

以上の五つの者は主として制度上のとなり。禮樂を興すは直接に人心を統治せんとする者にして儒教の髓腦なり。賈誼自身の言に依るに禮樂は法律に對比せる者なり。禮樂は人心を未發に防ぐ者にして法律は之れを既發に制する者なり。賈誼の此の考は正當なり。賈誼は禮樂を興して以て支那の人心を統治せんとしたる者なり。然らば其の方法は如何と尋ぬるに是れ實に支那の學制に考へ見ざる可からず。支那には夏の時より、都には學と云ふ學校あり。地方には庠序校(庠は周序は殷校は夏)なる者あり。而して此等の學校に於いて所謂六藝を教へたり。是れ即ち聖人が國民を教へんとせる學校制度なり。賈誼は即ち此の制度に依りて以て人心を統治せんとせり。以上の六ヶ條は孝文帝六年に賈誼が建白したる者なり。賈誼當時の思想は實に以上述べたるが如くに複雑な

る者なり。歴史上にては其れ等の六ヶ條の名目を列記するに過ぎざれども支那思想の真相を知らんとするには委細に此く分析せざる可からず。要するに此の建白の主意は政事刷新の時に人民の視聽を新らたにせんが爲めにして一方に於いては先王の禮樂を起して以て太平の治を致さんとしたるなり。

孝文帝は此の計畫を用ゆると能はざりしは賈誼に取りては非常なる遺憾の事にして其の思想は當時に光を發すると能はざりしなり。賈誼の其の他の策略として述ぶ可き者は以下三者なり。

- 一、諸侯をして國に行かしまむると。此れは一は人民の疲弊せるが爲めにして一には國許より凡て必需品を送る費用をはぶく爲めなり。
- 二、人民に銅鐵を鑄るを禁せるとなり。之れに對する賈誼の意見は頗る聞くべき者あり。賈誼以爲らく若し人民に銅鐵を鑄ることを許さば人民は利益をむさぼらんと欲して鉛鐵を混するに相異なし。而して鉛鐵を混せる者を罰せば即ち法律が罪人を作りて法律が此

を罰する者なり。人民に取りて甚だ不親切なる談なり。

三、諸侯の力を減せんとするとなり。賈誼以爲らく諸侯の力強なるは是れ末の大なる者なり。宗室の不安を來すは此れより甚だしきはなし。諸侯の土地を削りて其の力を弱むるに如かず。縦ひ叛くも勢力なきに至らしめば宗室安全なりと。此の論は鼂錯に由りても唱へられたる所なり。

以上は實に賈誼の思想なり。賈誼は儒者なり。然れども其の思想は一として實際的ならざる者なし。漢代前期の思想界を代表する者として最も適切なる者なり。

(四) 鼂錯

鼂錯は前漢の學者なり。其の主とする所は法律に存す。彼れ漢の太子の家令となれる時之れに效ゆるに權謀術數を以てせり。景帝の時に献白して諸侯の勢を削がんとを言へり。此に於て吳楚七國叛き鼂錯を殺す

を以て名義とせり。此に依りて彼れは遂に漢室の爲めに殺されたり。鼂錯が學者としてなせる事業は尙書を伏生に受けたと云ふとなり。然れども鼂錯の支那思想史に於ける位置は其の法律學を實行せんとせる所に存するなり。彼れが諸侯の力を弱めて以て漢室を強くせんと言へるが如き其他法令三十章を改め定めたるが如きとは最も注意す可き所に屬す。彼れは以上述べたる儒者に反對して専ら法律を以て天下を經營せんとしたる者なり。漢室の初めに當りては黃老の道が非常に採用せられたり。其の後儒教の採用せられたるとあり。更らに進むで法律の呈出せらるゝあり。其の順序は至りて寛大粗漏なる所より稍々精密なる儒教に至り更らに進むで冷淡なる法律に至れるなり。然れども鼂錯の計畫は餘り法律的にして漢の時勢には適せざりき。此の故に此の計畫は行はれず、而して其身遂に死せり。黃老、儒教、申韓刑名の學相ひ次ぎて表はれたる順序は前漢に孔子の仁、荀子の禮、韓非の法律思想の發達上相ひ次ぎて起れるに比すれば興味あるとなり。

哲學派

(一) 淮南子

淮南子は前紀の將さに終らんとする時に表はれたる者なり。淮南子姓は劉、名は安、父は漢の高祖の子淮南の厲王長なり。厲王事を以て死せるより彼れは常に漢室を怨み數々不安の形勢ありき。遂に天子使して其の罪を問はしむ。玆に於いて安自殺せり。是れ武帝の元狩元年十月なり。安は書物を好み最も文字を綴るに長じ、孝文帝の時召されて賦を作る。時に僅かに半日にして成れりと云ふ。以て其の才を推すべし。其の著す所は今所謂淮南子二十一篇なり。漢書藝文志に依れば内篇二十一、外篇三十三篇なり。今存在する所は内篇なり。

淮南子の書は一人の手にて作れるには非ず。數人の集まりて編輯せし所なり。此の故に其の云ふ所を以て直ちに之れを彼の哲學とするは宜しからず。然れども是れ甚だ止むを得ざるとにして吾人は此の書を以

て假りに淮南子の哲學思想となさざるを得ず。西洋に於ても「ピタゴラス」の書物は今傳はらざれば其の門派の書物より「ピタゴラス」の説を設立するなり。淮南子二十一篇の意味は那邊にありやと云ふに實に時代の産物として見る可き者なり。

第一。先秦時代は諸子百家が各々創思特見を出したる時にして其の説は未だ相ひ混合するに至らず。是れ一は時代の短かきに依り、一は天下混亂して諸説を混交するに暇なきに依るなり。然るに秦を過ぎて漢の世に入りて多くの年代を経て太平の時運に際會したるが故に諸子百家の説は必然的に相混交せらる可き運命に到達せんとせり。吾人は淮南子に於て諸子の思想の相ひ混交せるを見る。

第二。太平は實に思想をして自由に活動せしむる時なり。今漢の世は其の創業の時期を終りて將に守成の時期に到達せんとせり。之れ淮南子に於いて初めて哲學的思想を見る所以なり。

第三。上來數々述べたるが如く蒐集的傾向は漢代一般の傾向なり。淮

南子二十一篇は實に此れ等三種の傾向を代表せる時代の産物なり。其説甚だ統一あらず。漢の楊雄曰はく忽ち出て忽ち入るは淮南なりと。之れ即ち淮南子の説が或は儒者の如く或は儒者にあらざる如きを言ひ表はせるなり。用略篇に「故に書を著はすと二十篇各語を成すあり」と云ふに到りては最も善く二十篇の思想が一貫せる者にあらざることを知るに足る。然れども其の包含せる所は極めて廣く從て其の中に見る可き者なきにあらず。吾人は今其れ等に付て説明せんと欲す。

第一 性は虚靜なり

老子は非常に人心に浸み入れり。其の教へに依れば道は虚靜なる者なり。然れども老子全體の傾向は多く道を客觀的に存在するものとして其の哲學をなせり。老子の本領は寧ろ哲學に存するものなり。然るに老子の隆興と共に儒學は子思以來性を以て其の教學の中心點とせり。此れ等兩者を總合して性は虚靜なりとなすは即ち淮南子哲學の中心點なり。此の説に依れば性は即ち道にして道は一切萬物を結合し居る者

なり。此の點より見れば老子の虚靜を以て道とする教と少しも異なる點なく純正哲學と謂ふ可きなり。然れども淮南子の演繹は大に注意す可き所あり。彼れ思へらく道は絶對無限の者にして萬物の本性なり。此の故に人の性も亦た道にして從て虚靜なる者なりと。彼れは性を尊ぶの故を以て遂に之れを人間行爲の標準となせり。曰はく

夫乘舟而惑者不知東西見斗極則寤矣。夫性亦人之斗極也。齊俗訓

既に性は人の斗極なるが故に彼れは性を以て善なる者とせり。然るに性善説は何等か其の外に假定する者なくんば到底社會の惡事又は惡行を説明するに能はず。此に於いて彼れは性を暗ませる所の慾を假定せり。以爲らく人の性は邪なし。唯だ之れを害する者存す。日月は明ならんとして雲之れを被ひ、水は清からんと欲して砂石之れを汚す。人の性は平かにならんとして慾之れを害すと。此の故に彼れは慾を以て人間の性に服従す可き者とせり。即ち慾を排斥したるにはあらず。其が性に叶へば即ち可なる者なりとせり。其の語に曰く

適情性則欲不過節 訓 證言

此の欲を以て全く非なる者となさざるは注意す可き所なり。彼れは此の如く本性は善なりとせるが故に善をなすは容易なれども惡をなすは難しと云へり。其の語に曰はく情性に適して其の外の事をなさず誘惑せられず性の眞を得て己れに取りて少しも變るとなきは即ち善をなす所以にして從て容易なるとなり。然るに人の城廓を越へ人の要害を越へて手形を僞造して金を盗み位を奪ひ人を殺す等は人の性質にあらず。從て不善をなすは難しと云ふ可きなり。其の思想は全く先天良心論なり。唯だ良心の如き複雑なる者を假定するとなく、唯虚靜なれば即ち善なりとなすなり。此の故に彼れは聖人なる者は其の本性に立ち歸りて心を虚靜になす者なりとせり。

第二、仁義は偽りなり

孟子は仁義を以て先天的に人間の精神内に具はる者なりとせり。此の故に孟子の意見に據れば仁義は絶對にして之れより大なる者なし。然

れども淮南子に據れば仁義なる者は末世必要に迫まれて止むを得ず、作りたる者にして意識的人爲的の者なり。道なる者は之れより大にして自然に存在しつゝある者なりとするなり。彼れの語に曰はく

尙世體道而不德。中世守德而弗壞也。末世繩々乎。唯恐失仁義。 訓 證言

此の意に以爲らく上古は無意識的に各個人が道に合しつゝありたれども、中世に至りては意識的に道を己れの性の中に入れて以て徳をなし、此徳を守て叛くとなかりき。然るに末世に至れば仁義なる特別なる倫理的法制制作せられて唯此の法制を失はんとを恐る。彼れの意に據れば仁義は人爲的なる者にして自然の者にあらず。然れども末世に至りては君子始め何人も此の仁義の内に生れて仁義の内に死す。偽りとは荀子が其の善なる者は偽なりと云へる如く人爲を云ふなり。即ち自然に對する語にして今日俗言に用ふる偽りとは其の意味を異にす。

第三、萬物の交通

淮南子は既に一の絶對なる道を設定せり。然れども彼れは此の道を靜

的に虚的に寫象せり。其の觀念は恰も「カント」の「ヌーメナ」に於けるが如く、「ハルトマン」の無意識的實在に於けるが如く、謂はゞ消極的態度なり。換言すれば積極的に其の道の何たるかを明言するに能はず。シヨールペンハッセルの如きは意志を以て實在とせり。其意志は吾人の心理學的意志と異なりて宇宙の意志なり而して「シヨールペンハッセル」は意志に幾つかの性質を付けて之を以て宇宙解釋の原理となせり。此れを假りに形容すれば積極的態度なり。淮南子の如きに至りては全然消極的態度にして道に就きては殆んど何等の意味をも附すると能はず。唯だ吾人の認識以外の範圍にありて廣大なる不可知なるものと假定せるに過ぎず。然れども彼れ尙ほ形而上學の方法を誤らず。道を以て一切万物を貫通せる者とせり。既に万物は貫通せられたり。此に於てか一切万物の交通あるを信するに至れり。其の交通方法は少くとも彼れに取りて三種を區別するを得。

第一、物と物との交通。天文訓に云はく一切万物は陰陽より成り、而し

て陰氣は陰氣と相通じ陽氣は陽氣と相ひ通ず。此の故に彗星の出る前には鯨魚の死せるとあり。日月の相ひ食する前には麒麟の相戦ふとあり。又夏至冬至の際には羊の角消し、月の欠け居る時は魚の肉滅す。其他雨の降る前には柱濕ひ、風の吹く前には物乾く、是れ皆な陰氣は陰氣と相通じ居り、陽氣は陽氣と相通じ居る爲めなり。訓 秦族

第二、天人の感應。淮南子は又天人の交通を信せり。以爲らく、人間の心は一端を發しても限りなき所に散じ、上下四方に遍ねきものなり。然かも其の本は一つの天に歸着するなり。思ふに人君の情は上天に通ずる者なり。此の故に暴逆なる者を誅すれば飄風多し、法令を曲ぐれば蝗多し、罪なき者を殺せば國に日照多し、又命令が行き届かざれば長雨多し、其他國が危き時は何等が天文に異状あり、世亂るゝ時は虹表はる。之れと反し、國家將さに治らんとする時は必ず瑞祥あるあり。訓 秦族

第三、人と人との感應。淮南子は既に人心を以て斯く廣大なる者とせり。此の故に聖人が人民を感化するのも同じく聖人の心と人民の心と

交通ある爲めなりとなせり。曰はく家毎に人民をさとさんとするも到底能くする所に非ず。唯人々相ひ交通せられ居る爲めに所謂神化なる作用の行はれつゝあるなりと。

此れ等の三者は万物交通の様式なり。彼れは斯く万物に交通あることは到底人間の智を以て知ると能はざる者なりとせり。之れを名づけて神明とす。要するに彼の所謂絶對無限の道なる者は何等の積極的の意味をも有せざる者なり。然れども以上述べたるが如く遍く絶對無限の道より説明せるは形而上學家の方法として認むべきなり。然れども彼の陰陽と心と道と果して如何に髓腦的關係を有するか。之れ其の哲學に於いて明かならざる所なり。

結 論

淮南子の思想は要するに難駁なり。其の主なる方面に於いては老子派たるを疑ひなし。即ち道を靜的に虚的に寫象せる所は全く老子派なり。

然れども彼れが仁義に關する説は荀子より得たる所なり。其の外孔子の思想は多く取り用ひられたれども淮南子の卓見として見る可き者なければ茲に述べず。淮南子二十一篇中前後矛盾なる者なきにあらず。然れども固と此れ數人の合作なれば其の矛盾を指摘するの必要あるとなし。兎に角前期思想界の代表者として最も適當なる書なり。能く當時の社會的學問的狀態を示めせる者なり。

第三節 後期の思想

第一、漢は秦の亡ぶるに顧み、其の宗室を保護せんが爲めに大に同姓の子弟を奉じて諸侯となせり。然れども封建の利益は子弟が骨肉の愛を以て宗室を尊ぶ時に存す。二世三世となりて漸く疎縁になる時には既に宗室に抵抗せんとの念を生ず。而して封建の愛へは末の大なるにあり。漢は最も此の愛へを感じたる者なり。此の故に上書して諸侯を削らんとする者前後數人あり。初めに賈誼の上書あり。後に鼂錯の上書あり。

り孝武帝の如き主父偃の計に依りて諸侯をして其の子弟を自己の領地の中に散在せしめたり。此に於いて諸侯は其の實力に於いては既に漢室に抵抗する能はず。他の諸侯と聯合せんとすれば忽ち漢の郡の爲めに偵察せられたり。此に於て漢の封建制度は安固の域に到達せり。而して漢の天下は全く秦平の世となれり。從來漢の憂へし所は諸侯なりしが茲に至りて諸侯の憂へは去り、其の代はり漢の朝廷の中に一種の過根が醸されたり。即ち婦人が朝廷に勢力を有するに至りしと是れなり。

第二、前期に於て儒者は其の經綸策を行はんとし又は古典の蒐集に熱心なりしが朝廷には未だ儒者を好むの人あらず。高祖は稍々儒教の必要を認められしが未だ大に儒教を奨励するとなし。孝惠帝の時にも同じく武力の人のみなり。孝文帝は寧ろ黃老刑明の學を好まれたり。下りて孝景帝に至りても又儒者に任せず。然るに茲に一大變遷の時期表はれたり。即ち武帝が儒術を好むで文學ある人を招きしと是れなり。武

帝の時武安侯田蚡相となり、黃老百家の言を斥け文學ある儒者數百人を擧用せり。

第三、此に於いて儒者が相ひ續いで表はるゝに至れり。其狀俗も今の「ベルシヤ」ローマの地より諸種の古物を掘り出して以て古の智識を得るが如き觀あり。此に於て五經を専門とする學者の表はれたるあり。詩經を學べる者は魯に於ては申培公、齊に於ては轅固生、燕に於ては韓太傅、書經を學べる者は濟南の伏生、禮記を學べる者は魯の高堂生、易を學べる者は菑川の田生、春秋を學べる者は齊魯の胡丹生、趙の董仲舒なり。第四、又公孫弘の上書に依りて第一五經博士を置き、第二地方の子弟にして俊秀なる者を撰らび、博士の弟子五十人を置けり。此れに依りて五經を専門的に研究するの潮流を引き起せり。此れ即ち漢に固有の訓詁的潮流の源因なり。

武帝は又詩賦を好めり。大に文學の士を愛せり。之れに依りて文學的潮流も亦た初まるに至れり。漢の詩賦は一體に厭世的の傾向あり。其の源

因を尋ぬるに秦の暴政は支那民族の初めて経験せし所にして漢は其の後にいで只管前者の徹を踏まんとを恐れ、此に於て反省の念は絶ゆるとなし。此れ即ち漢代の思想をして厭世的にならしめたる所以なり。或は之れを老莊の流行に基けるとなす者あれども老莊の流行するに至れるは寧ろ政治上の必用に迫られたる者なり。吾人の見る所を以てすれば老莊の流行は厭世的傾向と同じく秦の暴政に顧る所ある者なり。即ち二者は相ひ並らむで秦の暴政の結果たる者なり。

武帝の時に當りて所謂神仙家なる者の流行あり武帝の之れを好めるに依り、此れも亦た一般の潮流を醸すに至れり。凡そ如何なる國に在りても君主の影響は非常に大なる者なり。特に漢代の如き時代にありては人民は一般に未開なるが故に其の勢力は一層強き者なり。此の故に武帝一人が儒教を好み、詩賦を好み、神仙を好みたるに依りて此等が思想界の潮流となるに至れり。

第五、一言にて云へば前期は機械的に蒐集せるが、後期は思想的に理解し、思想的に考察しつゝありたるなり。特に秦平の際に當り諸學隆盛の時なれば靜かに其れ等の學術を研究しつゝありたる者の中には善く融合せられたる思想なきにあらず。漢代の状態は其の思想極めて複雑なるが故に此を叙述するは頗る困難を感ず。故に吾人は年代に従て之れを論述せんと欲す。

董仲舒

一、傳

董仲舒は先に述べたる如く春秋に明かなる人なり。景帝の時に博士となれり。其身を持すると嚴格にして禮にあらざれば動かすと云ふ。武帝が賢良方正の士を試験せし時董仲舒は三個の策を奉れり。此れに由りて江都の相となれり。公孫弘も同じく春秋に長せるが到底董仲舒に及ばず。乃ち帝に進めて他の國の相となさしめたり。其後身を隠して學問を講じ書を著し朝廷に大事あれば必ず人をして専ら謀を問はしむ。

董仲舒著書として今傳はる者は春秋繁露あり。然れども大概は偽書なり。其の内に河間獻王、溫城の董君に問ふて曰はくと云ふ語あり。以て其の自筆ならざるを知るに足る。今董仲舒の思想を窺ふに先づ歴史に依りて其の天子に答へたる策を以て標準とし。春秋繁露と矛盾せざる限りに於て以て其の大略を述べん。

二、董仲舒の政事思想

一、漢の儒者として董仲舒は又經綸の事業に付て意見を有せり。思ふに殷が夏を次ぎ、周が殷を次ぐが如きは皆殆んど治世が治世に嗣ぐ者なるが故に其の道とせる所は大に相ひ異なるとなし。然るに亂世を嗣ぐ者は必ず大に其の道を變せざる可からず。今漢は周末及び秦の大亂の後を受けたる者なるが故に大に其の道を變じて以て夏の世の質樸なるに依る可きなりと。董仲舒の考へによれば周の天下を失へる所以は文弱に流れたるが爲めなり。此の故に此の點を矯正して以て質樸にして建固なる道を立てざる可からずとなすなり。

二、董仲舒以爲らく道なる者は天下を泰平ならしむる所以の道路なり。仁義禮樂の如き者は此の道を行かしむる所の道具なり。此の故に民を教化して皆な之れを善良の者となさざる可からず。彼の刑罪少なく法律を犯さずと云ふは皆な教化の功なり。董仲舒は純然孔子流の政事思想を受けたる者にして國を治め、天下を平らかにす所以の基礎は天子が自己の心を正しくなすにありとなせり。曰はく天子心を正しくせば朝廷正しく朝廷正しければ百官正しく百官正しければ万民正しく万民正しければ四方正しと。彼れは法律を以て天下を治むるとの非なるを主張して單に徳化を以て政治の根本主義なりとせり。此に於て甚だ大學を起すの必用を唱へたり。

第三、董仲舒の哲學思想

董仲舒の第一義は天なり。之れ又儒教より來りたる者なり。儒教は天を以て第一義とす。五經の中に天を云ふ者幾度なるかを知らず。而して孔子も亦た天が自己の運命を支配しつゝあるが如くに信せり。儒教に據

れば聖人が政をなすは天に則るなり。人民の長となる可き者は天の命する所なり。故に代の代はるとは名けて革命と云ふ。即ち天が從來は甲のみに民の長たることを命じたるが其の命令を改めて乙の人に命ずると云ふとなり。董仲舒は全く此の思想を受けて更に其の思想を春秋災異の説と混合せり。董仲舒は天を以て無上の有形的實在とせり。天は万物の源なると同時に吾人人類の祖先なり。董仲舒曰はく人間が其の祖先を踪蹤すれば祖父より曾祖父に至り、更に進むで追究すれば遂に之れを天に歸せざるを得ず。即ち天が人類の祖先なり。天は一切の現象を支配し、而して其の間に權衡を保せり。例へば齒のある者には角を興へず、翼ある者には單に兩脚を興ふるが如き之れを人間にすれば政府の祿を食む者あり、或は其の勞力を以て食物を求めんとする者あり、皆な其の適例なり。董仲舒は一切万物は皆天意の存する者となせり。然るに天が直接に其の命令を發するは人類が其の言語を發する如くに見ることを得る者にあらず、只だ現象を見て直覺的に天の意を知る可

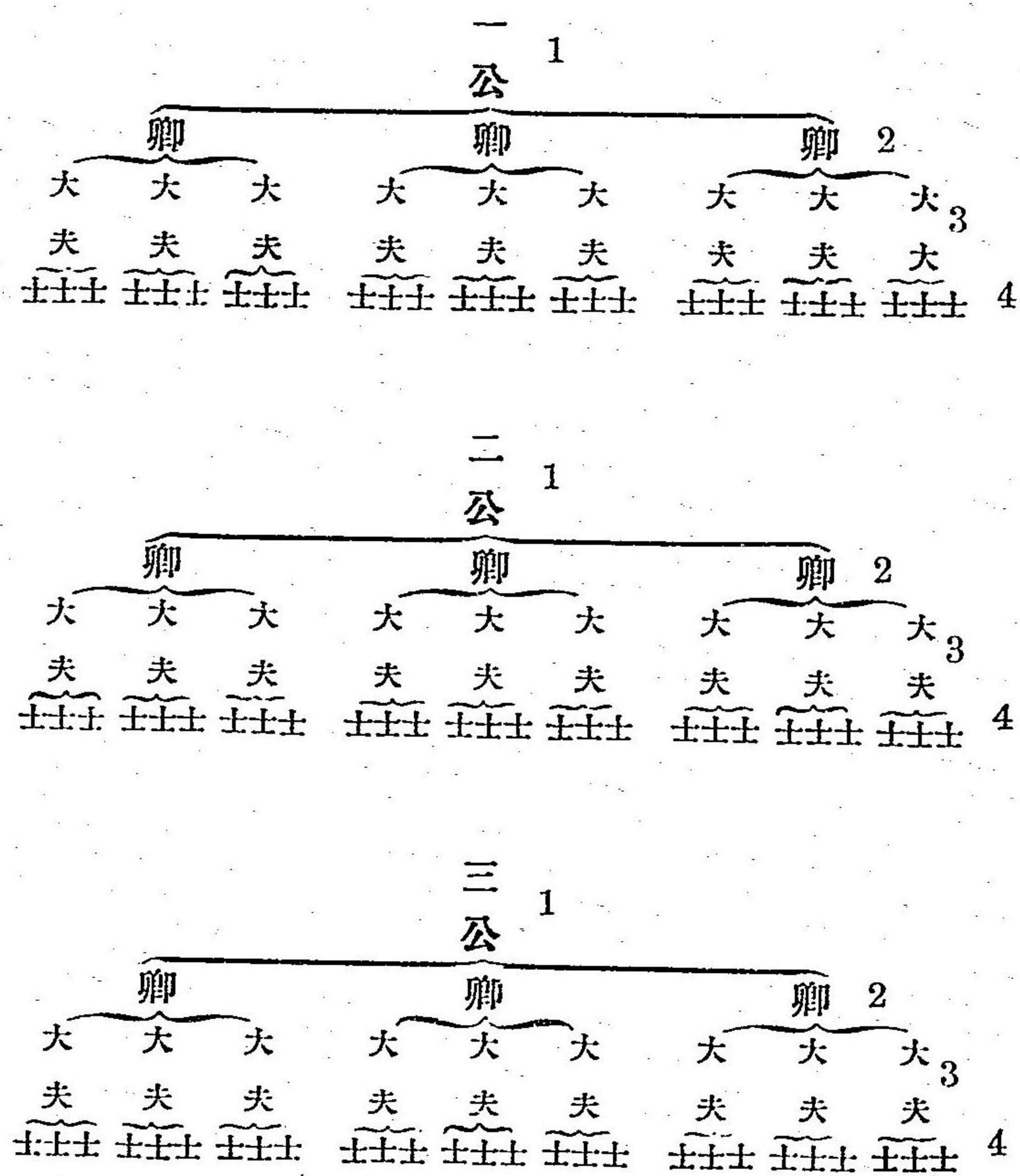
き者なりとせり。此の故に董仲舒曰はく命は天の命なり(對策の一)其の謂ふ所の命なる者は即ち運命のとなり。運命は此の現象界に行はるゝ所の事實なり。換言すれば人間の成り行きなり。然るに董仲舒は其れ等事實が天の命なりとせるなり。故に天の命令なる者は人間の命令とは異なり見聞す可からざる者なりとせるは明かなり。從て彼れは「キリスト教の神に於けるが如く天を以て人形的の者とはせざるなり。天の何者たるかは此に於いて明かなり。此より左の如き二個の結論を生ず。

- 一、天を吾人の父として尊敬す可きと。此の故は董仲舒は天の祭(郊)を以て最も重大なる者とし、如何なる場合にも此れを廢す可からざる者となせり。
- 二、天が万物の源なるが故に天に則る可きと。天に則る、概ね三者あり。

(イ) 政事は天意を受くべき者なり。天に陰と陽あり。陰は殺すを司り、從て天の刑罰なり。陽は生ずることを司どり、從て天の徳なり。天は陽

に重きを置きて陰を輕んず、故に陽を夏となして物の生育を司どらしむ。陰を冬となして北方の空虚不用の所に置く、即ち陽は南方の明かなる所に居りて其の司どる所が甚だ多けれども陰は北方に居りて何等の役をもなさず。之れ固より董仲舒の牽強附會の説なり。然れども彼れは此を以て天が徳を獎勵して刑罰を獎勵せざる標徴なりとせり。而して王者も亦た徳に任じて刑に任せざる可き者とせり。

(ロ) 政府組織。董仲舒は三と四の數を以て天の數なりとせり。三を以て天の數なりとするは日月星は三にして夜の光をなし、天地人は三才にして而して具はり、寒暑和は三つにして而して善く物を成す。此れ等の所より三は天の數なりとせり。又四時は四つにして一年をなすが故に四も亦た天の數なりとせり。既に三と四が天の數なるが故に政府の組織は之れに象ざる可き者とせり。即ち三公を置き、公の下に三卿を置き、卿の下にも大夫を置き、大夫の下に三士を置く、即ち圖に示すが如し。



(ハ) 倫理も亦た天に則る可き者とせり。天に木、火、土、金、水の五行あり。此の順序は相生の順序なり。故に父子の如き觀あり。然るに其の徳を云へば木は生ずるを司どり、火は生長を司どり、土は養ふを司どり、金は收むるを司どり、水は藏するを司どる。即ち前者のなしたる者は後者之れを受け次ぎて之れを完全にする者なり。故に子は親の業を受けて之れを完全にせざる可からず。之れ實に天の道なり。是れ孝の道を天より演繹せるなるが彼れは亦た忠道をも天より演繹せむと欲せり。然れども其の説頗る曖昧なり。思へらく、風雨は地のなす處なるも、之れを天風と云ひ天雨と云ひて地風地雨と云はず。之れ勞力を天に讓るものなり。今地は五行中の土に相當する者なり。此の故に忠は地より出づ可きものなりと。

第四、人類學

彼れ思へらく人は天の子なり。故に身體情性は皆な天に類すと。

一年三百六十六日 三百六十六の小節

十二月	十二大節
五行	五臟
四時	四肢
晝夜	開閉(目の)
冬夏	剛柔
陰陽	哀樂
度數	計慮(心の)
天地	倫理(人の)

是れ形式上の類似なり。人間の體の構造は天の構造の摸寫なりと云ふに在り。唯だ其中にある

春—喜 夏—樂 秋—怒 冬—悲

は物質上の關係なり。即ち天に存在する春、夏、秋、冬の氣が作用して人間の喜怒哀樂の四情を作るなりと。故に彼れは四時が天に不可缺者なるが如く四情も亦た人に不可缺者となし。四者共に其の處を得せしむ可

きものとせり。之れに付いて記憶す可きは彼れの性に關する論なり。之れより先き孟子は人性を以て善となし。其の説廣く世に傳播せり。彼れは孟子の性善説を駁して曰はく。天に陰陽あり。故に人の性にも貪仁ありと。彼れ以爲へらく。聖人の性は絶對的に善なるものなるが其の他の人の性は禽獸に比して善と云ふ可きものなりと。此説は尤も記憶の値ある處。彼 又喩を以て性に善惡の無きを説明せり。曰はく。性は譬へば繭の如きものなり。繭の時は未だ善惡なし。其の繰り方によりて或は善となり。或は惡となるなり。其の思想當時に於いては卓見なり。之れを要するに彼の人類學的の觀念は天人似形論なり。

第五、災 異

彼れは天と人との感應を信せり。人が惡しければ天之れを戒め、之れに反し人間のなす所の作用も亦天に異動を來たし得。例へば雨を降らし。又は止むるを得るとなせり。此説は前にも述べたる如く、春秋に出でたるなり。春秋は災異の事を記し、亂世に當りては彗星の出たるあり、又

月蝕のありたるあり。其れ等の事實を根據として此説をなしたるものなり。彼れは災異の書を著したりしが、此の時天子の廟火災す。是に於いて之れを帝に奏上する者あり。帝之れを諸生に質し、其書の眞僞如何を判せしむ。時に董仲舒の弟子に呂步舒なるものあり、其の師の書なるを知らず。以て下劣なる書とせり。是に於て帝董仲舒を死に處せしむ。僅かに免かるゝを得たり。

第六、結 論

彼れは漢の學者として經綸の志を有せしが、大體に於いては寧ろ思想家として見る可きなり。其の説は天を以て第一義とせり。彼れが對策に曰はく。天の意を承けて天の命に従ふと。教を明かにし、以て人民を化し、人間の性を善良ならしむると。及び法度を正ふして上下の秩序を分ち、以て慾を防ぐと。是れ三本なりと。是れに依りて觀れば彼の哲學の要領は此れ等三者に在ると明かなり。是れ彼の哲學思想、人類學的思想を參考せば明かなり。董仲舒一に桂巖子と云ふ。其の桂巖山に隠れたるを以

てなり。然れども此の名多く知れず。

董仲舒の社會に及ぼしたる影響

董仲舒の影響は獨り學問の上のみならず。又實に社會の上にも及ぼしたり。孝武帝の時、彼れ嘗て上書して大學を興し、天下の士を養ひ、六藝の科、孔子の術にあらざる者は悉く其の學を絶つを請ふ。武帝其の言を納れ、大學を再興し、五經博士の官を設け、詩、書、易、禮、春秋の教授を掌らしむ。又吏民の儒術に習ふものを徵し、博士の弟子五十人を置きて以て官に任せしめたり。吏一藝以上に通ずる者を選び、以て右職に補す。是れより官吏を任用する一に儒學を以て策試し、爾來因襲今日に至りて衰へず。而して儒學は政治と關係し、上流階級の學問となり。獨り隆盛を極めたり。老莊學は行はれたり。雖も個人的の意味に於て奉つられ、且つ民間に流布せるのみ。是れ漢代諸學の勃興せざる所以、而して訓詁註疏の多き所以なり。然れども儒教の隆盛は支那人民をして共通の教義に浴せ

し。社會的紐帶(Social bond)を新たに創造せる者にして此の點は大に看過すべからざる所に屬す。

公孫卿

武帝の神仙を稱せるは上述の如し。此に於いて公孫卿なる者之れに乗じて武帝に謂へらく。昔し黃帝首山の銅を採りて鼎を荆山の下に鑄たりしに、龍あり來りて黃帝を迎へて天に昇れりと。茲に於て武帝の曰はく、若し如此とあらば余は妻子を捨つると。樊履の如けむと。其の後公孫卿は、仙人の足跡を認めたりと云ひ、仙人は樓居を好むと云ひ、以て武帝をして或は巡幸せしめ、或は多くの樓臺を造營せしめぬ。是れ等は武帝が心より神仙を信せし所以なり。然るに征和四年泰山に幸して群臣に謂へらく。朕が從來の成す所は百姓を痛ましめ、或は天下を貧窮にせしめたり。朕之れを悔ゆ。今一切之れを改めむと欲すと。此の時田千秋なるもの曰はく、神仙は何等の巧益なしと。帝曰はく、天下固より仙なし。食を

攝して藥を服せば即ち稍長命を得むのみと。茲に於いて公孫卿其他所謂方士なる者皆貶けられぬ。此くして神仙を信する者ありと雖も其の愚なるを笑ふものありき。東方朔が武帝を諫むる言に假令仙人に遇ふも人民苦み居らば何の益なく、人民安樂に樂み居らば神仙を求めずとも足ることあり。又王褒が宣帝の時聖主得賢臣頌に於いて左の如く言へり。曰はく、

上下俱欲。驩然交欣。翼乎如鴻毛。遇順風。沛乎如巨魚。縱大壑。休徵自至。壽考無疆。何必偃仰。屈伸若彭祖。照嘘呼吸。如喬松哉。

要するに神仙に關する迷信は當時一般に昂進せしや必せり。而かも一切の人盡く之れを信仰せしには非ず。

京房

京房に二人あり。同名異人なり。茲に述べんとするは易を焦延壽に受けたる京房なるなり。延壽曰はく、我が道を得て以て身を亡ぼす者は京房

なりと。其の行の孝廉なるを以て政府に仕へ、天子京房の災異に關する説を喜びたり。屢招見せらる。嘗て帝の面前にて當時の權臣石顯なる者を斥く可きを云ひ、却て其の讒に遇ひ、ために斥けられて魏郡の太守となる。月餘にして獄中の人となりて死す。彼の書として有名なるは、易傳なり。此れは易の六十四卦を分ち、各卦の下に寒温風雨及び五行を配當して人間一切の災變をトせむとせしものなり。其の説固より牽強附會のみ。又董仲舒と同じく天人感應を信じ、天子賢人を擧ぐれば吉兆現はれ、小人を近くれば災異生すとせり。

劉向

劉向は初名を更生と稱せり。孝宣帝の時名儒を以て選ばれ、帝神仙を好めるに會し。淮南枕中鴻寶祕書なるものを献す。當時石顯弘恭の徒權を恣にし、向屢獄に下されたり。王氏一族權を専らにするに及び、向は大に之れを患ひ、書經の洪範に據り、古來より春秋六國を経て秦漢に到る迄

現はれたる符瑞災異を記し、天子の行は必ず其の天應を見るものなりとのとを明かにし、十一編とし、名けて洪範五行傳と云ふ。時の孝成帝向を以て忠となせり。而かも遂に王氏を黜くると能はざりき。偶々海濱にて石磬十六を得たる者あり。磬は樂器の石なり。人以て吉兆とす。向茲に於いて帝に勸めて學校を興し、禮樂を盛んにし、以て萬民を風化せむとを希へり。其の言に曰はく

禮樂は人を養成するもの、刑法は人を罰するものなり。甚きは則ち人を殺すに至る。今禮樂を起さずして單に法律のみを制定するは是れ人を殺すをのみ努めて人を養ふを力めざる者なりと。

又曰はく。

教化所恃以爲治。刑法所以助治。

謂へらく、教化に依りて人民を完全なる人格に近かしめむか刑法は用ひずして天下を治するを得。故に教化は主にして刑法は従なりと。然れども學校を建むとして其の議未だ成らずして止む。向は己れが帝に信

任あるを見、王氏及び現今の大臣を誹毀せり。皆誠意より出でたるなり。此故に帝之れを九卿の位置にせむとせしも其の身遂に終はれり。彼れは世俗に接せず。思を經書に沈め、晝は聖賢の書を読み、夜は天文を觀るを常とせり。漢代に於いては第一流の學者なり。向の思想を窺ふ可き書は劉向說苑、劉向新序、洪範五行傳等なり。

第一 性

劉向說苑、劉向新序の二書は極めて雜駁なるものなり。其の卓說として見る可きは性に關する一條なり。謂へらく、人は生れながらにして善惡なく、外來の影響により或は善となり、或は不善となるなりと。其の言に曰はく、

人之善惡非性也。感於物而後動

と。動とは即ち善惡を生ずるを云ふなり。彼れは外來の影響は最も不可不注意のものなりとなせり。然らば如何なる影響を與ふ可きかと云ふに、彼は之れを以て音樂とせり。謂へらく音樂は人の性を平和にするも

のなりと。彼の音樂に關する意見は稍々聞くべきものあり。謂へらく、音樂は人心の反射なり。心には喜怒哀樂思敬等の諸方面あり。此等の方面が物に感じて聲に顯はれ、而して樂の聲をなす。斯の故に音樂の聲と精神の状態とは善く相符號せるものなりと。彼れは治世の音樂亂世の音樂亡國の音樂等は各其形を異にせるものなりと云へり。即ち治世の音は安樂、亂世の音は怨怒、亡國の音は哀思なりとなせり。要之、彼れの考によれば精神の状態と客觀的の音樂の響は一物の兩方面と見るを得と。故に好音樂を以て其心を影響せば其心善となり。惡音樂を以てすれば其の心亦從て惡くなるとせり。彼れの此の考は支那にて普通見る所なり。然れども其の性と音樂とを斯く相ひ關係して説明せるは彼れ尤も明白なり。下の一語は彼の學に關する思想を見るに足る。曰はく、

惟樂不可以爲僞。樂者心之詞也。

第二 災 異

彼れ亦漢代一般の學者の如く災異を信せり。災異とは前述の如く人の

行事の兆が客觀的に自然界に現はるゝとするなり。災異の事は多く之れを述ぶる要なし。只彼れが災異を信じながら鬼神を信せざりしは注意すべきの點なり。即ち彼れは鬼神に禱るも鬼神之れが爲めに人に幸福を下すとなしと信せしなり。

信鬼神者失謀。中略謹仁義順道理。不禱祠而福。中略乃欲背道妄行而以祠祀求福。神明必違之。

是れ實際に其の行を修むれば幸ひ之れに伴ひ、然らざれば禍之れに伴ひ、鬼神其の間を如何ともする能はずと云ふものなり。災異を信じつゝも斯く鬼神を信せざるは以て支那思想の實際的にして宗教的ならざるを見るの一端となし得。之れを墨子の有神論に比せむか、墨子の思想が耶蘇教に類し、支那に於いては珍とす可きを知るに足るなり。

楊 雄

第一 傳

楊雄字は子雲、幼にして學を好み、諸子百家を涉獵し、平日一室の中に坐して思想を鍛練せり。是れ雄の漢代に於ける哲學的位置に對照して注意すべきの點なり。歳四十の時、都に來り、太玄、法言(通常揚子法)の著あり。太玄は極めて六ヶ敷き書なり。彼の友人其の六ヶ敷きを見て曰はく、後世必ず其紙を以て裴蓋となさむと。雄曰はく、夫れ必ず後世の楊子雲ありて此の書を讀まむと。以て得々然たり。王莽漢の臣を戮せし時、其の辭雄にも連れり。使者雄の宅に到る。雄時に書を天祿閣上に讀む。其使の來るを聞き驚きて飛下し、始んど死せむとせり。王莽笑て曰はく、雄固より罪なし。驚くに足らずと。召して太夫とす。七十一にして歿せり。

第二 學 說

其一、形而上學。易は現象界の進動(Progress)を説明せるもの、即ち現象界は陰陽なる相互關係ある原理によりて支配せらるゝものなりとせり。易—少くとも今日傳はれる書の上より見れば—易の中には右の如き原則的思想あり。一方に漢代盛んに行はれたる老子の教は直に宇宙

の本體に進入して之を靜的に虚的に寫象せり。楊子雲は此れ等兩思想を調和し、更らに其の上に一步を進めたるもの。彼れは宇宙の本體を以て自動的精靈的力學的なるものとし、其本體は現象界を總括し支配す。而して其の創造若しくは支配の標準を以て三數なりとせり。而して其本體を名けて玄とせり。即ち其の實在を動的實的に寫象したる點に於ては老子派に一機軸を出せるものなり。現象世界が三數に依りて支配せらるゝとなせしは易の二數に比すれば又一機軸を出せるものなり。楊子雲は玄の性質を説いて曰く、

假哉天地。暗函啓化。罔裕於玄。

是れ即ち天地萬物は玄の創造なるを言ふもの。更らに玄より一切進動の出ることを説いて曰はく、

玄有一道。一以三起。一以三生。

起と云ふは空間に關すると。生とは時間に關するとなり。楊子は更らに天地人が皆三の數に依りて支配せらるゝを説いて曰く、

天には始中終の三あり。地には上中下の三あり。人には思災死の三あり。

彼れの見解によれば物質に於て進動に於て盡く三なる數によりて支配せらるゝものなりとするなり。其の考へは全く易と同じ、唯だ二と三との別あるのみ。

其二、性の論。雄の考に依れば人の性には善と惡との二因子あり。其の善の因子(Factor)を養へば其の人は善となり。其の惡の因子を養へば惡となり。一見すれば孟荀の調和の如きも實は否らず。孟子は明かに人の性を以て善となし。楊子の意味に於ける善の因子が性の中に存せるものとせしむ。荀子は惡の因子が性中に在りとはせず。荀子が性を惡とせしは人の欲望を見たるなり。故に禮儀を以て適當に攝せられ居る欲望は之れを以て惡なりとせず。則ち惡の因子が性の中に存するに非ざるや明らかなり。古來荀子の説を誤解して孟子と正反對とするもの多し。此の區別は注意すべき點の一なり。

第四節 前漢の思想

漢代は秦の後を承けて太平なり。此時代に表はれたる儒者は其の常として經綸の事業を志し、或は典籍を蒐集するに努めたり。而して數多の學者が輩出せり。其の哲學思想として見る可きもの少く、淮南子の如きも極めて雜駁なり。武帝以後天下安定となり、隨て思想の狀態も一波瀾を來せり。所謂哲學的思想も漸く潤熟の域に近けり。董仲舒、揚雄の如き之れなり。揚雄の純正哲學的思想の如きは支那前古に於て嘗て見ざる程深遠幽邃なり。揚雄は漢代に於いて第一流の哲學家たるのみならず、前古未聞の哲學者たり。當時の性に關する論は學者一般に之れを口にせり。元來支那の儒學史の中心點は性の一字なり。然るに此の字は孔子にありては殆んど常識の意味に於て用ゐられ、其の後孟子之れを以て善とし、告子之れを難じ、荀子亦た性惡論を出し、性論は一般の注意を喚起せり。性は人の生れ付きなり。其の性質を研究せむとするは人心

を向内的ならしむる所以なり。向内的傾向は即ち哲學的傾向なり。故に性論は支那に在りては哲學的思想を惹起せしめたる因子なり。前述の諸家の外匡衡の如きは元帝の時に上書して下の如く云へり。

六經者、聖人所以統天地之心、著善惡之歸、明吉凶之分、通人道之正、使不悖於其本性者也。

又、以て性論が當時盛んなりしを見るに足る。哲學の狀態は如斯くなるが、此の外に訓詁なるもの亦た頗る盛んなり。司馬遷曰はく、

六藝經傳者以千萬數、故代々不能通其學。

於是漢に於いては六經は各専門家のなす所なり。訓詁家として有名なものは孔安國なり。漢末に及んでは張禹、孔光等も有名なり。然れども是れ等二人は皆な王莽に媚事して以て漢末腐敗の風を醸したるものなり。

詩賦に至りては武帝頗る之れを好みしより、東方朔、司馬相如、枚乘、劉白、楊雄、王褒等あり。其盛んなる前古未曾有なりき。

先秦時代詩經三百篇、屈原の楚辭の如きに至りては尤も詞藻として名あるものなるも、其の作者より見んか感情を述るが主意にして文飾は其の末なりしなり。然るに漢代に至りては之れと反し文飾其のものが主意なり。此故に上の諸家の作の如き其の思想は見易きものなるも其の詞藻に至りては難解にして難讀なるもの比々皆な是れなり。要之前漢末、思想界の横斷面を觀ば所謂哲學的思想、老莊、訓詁、詩賦、神仙、五行等の諸因子が存在するを見る。然るに支那にては政治上の變遷が社會の思想を變遷せしめ隨て一般に學問的思想を變せしむる故、吾人は後漢の哲學を論述するに當り、先づ茲に政治上の狀態を略記せざる可からず。

第三章 政治現象

漢は諸侯の勢力を削ぎて中央漢室の威力を強からしめたり。然かも禍は諸侯の間に起らず、近く漢室其ものゝ中に起りぬ。高祖の時、呂后が權

を恣にせし習慣残りて代々太后及び外戚等權威を恣にせり。是を以て漢室の費用太だ多く又武帝の如き屢遠征を試みて其の費に堪へず。是に於て桑弘羊は鹽鐵(後には外の物品をも含む)の專賣は政府之れに當らんさせり。思へらく鹽鐵を蓄積して貴き時に賣り以て民間の富豪なるものをして暴利を貪らざらしめむと。是に於いて此の法を行へり。此の考のみによれば。慥かに近世の國家社會主義(State socialism)なりと謂ふべきなり。

然るに其の實は漢室の爲めに利益を得しめんとせしなり。故に司馬溫公の如き弘羊を以て單に漢室の利を保たしむるより外に意味のなき小人者流とせり。斯の如き状態にありて漢室は益々外戚の禍を破り、終に王莽の篡あるに至れり。王莽は周公孔子を以て自ら居り、一切孔周の言を採用せり。或は井田法を造り、或は五爵を置けり、皆な聖人の名を假りて其の迂遠にして愚妄なる政を飾れるなり。然れども一郡にして五六度も其名を改むるに至り、人民頗る不便を感じ、剩へ外にしては匈奴の

單于を降奴服于と稱せり。是に於て内外の民心を失ひ、之を征討せんとするもの諸方に起る終に劉秀なるもの、爲めに漢の天下を恢復せられぬ。光武皇帝是れなり、即ち後漢の祖なり。

第四章 學問は依然として持續す

後漢思想の状態は前漢と異ならず。今其の概略を云はんに、下の如き諸潮流あり。

第一 老 莊

前漢に於いては老莊は盛んに行はれ、其の流行延いて後漢に及び、光武皇帝の如き、全く老莊の教を奉ずる者なり。彼の柔道を以て天下を治めんと云ひし如き、或は匈奴を攻めんと乞へるとき、黃石公の詩を以て、柔善克剛、弱善克強と云ひし如き之れを證するに足る。或は其の子孝明帝が太子たりしとき、其の父を諫めて陛下は禹湯の聰明にして而かも黃老養性の道を失なへりとあり。此れ等亦た老莊が當時人心に浸潤せる

を證するに足る。桓帝は老子を祭ると前後二回、漢末に張角なるもの黄老に仕へて符水を造り、民に興へ、當時頗る蔓延せり。老莊の流行は三國六朝の思想界に再び盛んなる勢にて出たる者なる故に尤も注意すべき潮流なり。

第二 五行

五行は前漢にも盛んなるものなり。後漢に至りて殊に隆盛なり。有名なる學者班固の如きも天の五行より人の五の數を帯びたる性質を演繹せり。其の訓詁學者にして五行を奉ずるもの頗る多し。

第三 訓詁

訓詁も亦た前漢と同じく盛んなり。但し前漢に異なるもの二あり。一人にして多くの經を修むることなり。即ち前漢は各經専門なりしも今や然らず、一人にして多くの經を兼ねたり。之れ前漢の時には典籍を求むるに多く日月を費せしに由るなり。二五行説の加はれることなり。此れ五行説は光武帝自身にも大に好まれたるによるなり。有名なる訓詁

者、鄭玄、馬融等も皆其の潮流の中にあるものなり。

第四 詩賦

詩賦は前漢に比せば稍々劣へたり。

第五 儒者

前漢の初めに老儒は漸次に社會の潮流の上に顯はれ來れる如く、後漢に於いても王莽の亂を避けて隱遁せし學者卓茂、嚴光、周受等の如き老儒が漸次社會に表はれ出でたり。

第六 清節

前漢の末に當り儒者は王莽に媚事せしもの多く、社會は腐敗の状態なり。茲に於いて光武帝は之を一洗せんと欲し、氣節ある老儒を招きて之れを優遇し以て節義の風を養へり。之れ亦た後漢の社會的精神を作れり。遠く三國六朝の厭世的思潮を起こせし原因となるもの故觀過すべからざる潮流なり。之れを要するに、大體は前漢と同じ。但だ哲學者として見るべきものは殆んど皆無なり。前漢の楊雄、董仲舒の如き、又

は淮南子の如きは到底發見し得ざる所なり、吾人は其の中に就て有名なる二三家を述べんとす。

班 彪

班彪は恰かも王莽の亂に際會したる人にして性質極めて古學を好み、齡二十餘の時隗囂なるもの彼の劉秀と覇を争はんとし、彪に問ふに天下は再び周末の如く麻亂せるに至るべきや否やを以てす。彪は固より史眼あるの人、之れに答へて曰はく

周の時は其の基本たる周室小にして其の末たる諸侯大なり、故に周室衰へて群雄割據の狀となるも漢は之れと異なり、其の本たる漢室大にして其の末たる諸侯極めて小なり、單に外戚の爲めに傾けられたるも天下には異狀なく、早く漢室に關係あるものを立てんとを希ふ、而して今や劉秀は度量才略共に秀づ、必ず前漢の後を繼ぎて天下に覇たるものならんと。

然れども囂は之れを以て眞なりとせず、彪即ち王命論を作りて之れを諷せり、其の趣意は漢は實に堯の後を承けて光明を天下に發つもの、王者の嗣なり、自然の天命にして決して策略を以て如何ともすべからざるものなりと云ふにあり、此の王命論は囂を諷せるものなり。

斯く定明論的思想は支那に固有のものなり、即ち列子、楊子等は皆此の思想を有せり、而して彪は實に之れを國家の盛衰に應用せるに過ぎず、此く國家の盛衰にも自然の運命ありとの説は宋の邵雍に於いても之れを見るべし、彪の王命論は支那の早き時代なる前漢の末に起りたりと云ふ點に於いて注意すべきものなり、彪は囂を辭して賓融なるものに仕へ、融光武帝に従ふに及んで帝の爲めに擢んでられ、司隸の茂才となれり、病を以て役を免れ、専ら史の研究に従へり、司馬遷の史記に擬して史を編輯せり、即ち前漢書是れなり、建武三十年齡五十二才にて卒す。

班 固

固は彪の子なり。齡二十、官に仕へて頻りに賢才を擧ぐるとを勸む。其の父彪没せる時、故郷に歸る。時に父の作る所の史未だ審かならず。是に於いて大に其の業を完成せんと欲せり。此の時人上書して固は漫りに漢室の史を作ると告ぐる者あり。其の弟班超、宮中に到り、上書して其の無罪を言明し、一方には固の故郷の官吏其の書を献する者あり。是に於いて時の顯宗帝は其の才學あるを知り、之れを校書郎とす。固が漢書を完成するに凡そ二十餘年を費せり。固は詩賦に於いて有名なり。彼の兩都賦の如きに至りては最も傑作なりと稱せらる。其の著書には白虎通あり。然れども此の書は顯宗帝が多くの儒者を白虎觀に會して五行に付いて論議せしめ、固をして之れを監督せしめ、其の一致せる思想を固自身に書き載せたるものなり。故に固の思想を覗ふべき適切の書にあらず。元より支那に個人的思想なるものは少なく所謂流通思想なるもの

多し。斯の故に吾人は此書より後漢當時の流通思想を見んとす。然れども彼れは其の兒又は家人の教育に熱心ならざりき。其の奴の事により、永元二年獄に投せられ、六十一にして没す。

茲に述ぶる哲學思想は人間に關する思想なり。即ち支那從來の宿題となり居る情性に關するもの。之れに就いて先づ從來の一二の思想を一言せざるべからず。

第一、支那に陰陽なる語は古くより之れあり。易に於いては單に陰陽を以て現象の二元となせり。其の後漢代に到りても例へば董仲舒の如き陰陽を二氣とせり。彼れ等は氣なる語によりて何を意味したるかを問はんに頗る漠然たるものなり。先づ其の否定の方面より云へば氣は決して今日所謂物質と全く相同からず。又全く抽象的のものにもあらず。又形而上學に所謂本體の如き超越的の意味あるものにもあらず。實に彼れ等は氣なる語に於いて或る特別なる意味を表はせるなり。其の積極的方面より云はんか、氣は精靈的にして活動的なるものなり。此の

故に彼れ等は常に氣の感通を云へり。其の感通の字は注意を要する所なり。漢代に當りて學者は細かに氣の性質を分析せずして以上の如き意味に於いて習慣的に使用し以て現象解釋の標準概念とせり。然るに降りて宋代に至れば程子に於て、朱子に於て、氣を以て理に對して純然たる經驗的物質の意味に用ひたるなり。是れ氣の概念の變遷なり。

第二、人間に對する觀察　周以前にありては人間に對する觀察は極めて廣漠たり、即ち禹が人生は寄なり、死は歸なりと云へるが如き是れなり。周に及んで哲學的思想の勃興すること共に人間に對する觀察は稍具體的となりぬ。然れども人間を分析することをせず、彼の諸家の定命論に付いて見るべきが如くに人生は必然的の運命によりて支配せられたるものなりとの觀察に過ぎず。然るに斯く具體的となれる傾向は一層進んで止まず。漢代に至りては人間を分析して之れを以て二氣の和合とするに至りぬ。淮南子董仲舒の如き皆是れなり。是れより後、二氣五行の説は益々盛んなり。京房の如きは二氣五行を人間の多くの性質に

配當せんとするに至れり。斯かる傾向は益々進んで固に至りて殆んど其の極に達したる者と云ふべきなり。

第三、五行の説も周代には多くは之れを以て客觀的に存在せる現象となせり。漢に至りては一層人間に近づけられて五徳の如きは五行あるが爲めに生ずるものとせられたり。更らに進んで班固の時に至れば五行を以て五氣となし、五氣各々人間の特別なる身體機關を作るものとせり。固の時には五行のみならず、更らに六律をも六個の氣あるものとせり。斯の如き氣の概念を有し、斯の如き傾向を有せる人間觀察の思潮に際會し、又斯の如き傾向を有せる五行の思潮に際會せし班固は如何なる觀察を人間に付いてなせしかと云ふに下の如きものなり。

固は人間に性と情とを區別し、性は陽氣より生じ、情は陰氣より生ず。而して性は仁なり。即ち固の思想によれば生れながらにして性は仁なるものなり。而して情は靜にして貪るものなりと。固の見解によれば、性には仁義禮智信の五を含む。情には喜怒哀樂の六を含むものなり。而

して性の五の徳は夫れ、五行の氣によりて作られ、情の六種は夫れ六律の氣によりて作らるゝなり。然れども其の作ると云ふは果して物質的に然るものなるか、活動的に然るものなるかは彼れの明言なき故に吾人は之れを知るとを得ざるなり。

更らに注意すべきものは獨り無形なる五常即ち仁義禮智信と六情とが斯の氣によりて作らるゝのみならず、此等の性と情とを活動せしむる所以の生理的基礎たる五臟、六腑なるものが夫れ、五行及び六律の氣によりて作らるゝものとせり。五臟とは肝、心、肺、腎、脾を指し、六腑とは膽、小腸、大腸、膀胱、胃及び三焦を指す。班固は此れ等の五臟及び六腑を以て情性の出入する所とせり。其の意味は其れ等情性の活動的、生理的基礎は是れ等の五臟、六腑なりと云ふに在り。而して六腑が生理的に五臟を補助しつゝあるが如くに六情も亦た五常を補助して以て相互に其の作用を満足するものとせり。其の説たる五行を以て陽氣とし、六律を以て陰氣となし、以て人間の肉體并に精神を説明せんとせしものを

り。精神現象を生理的に解釋する生理的心理學の見點より見れば思想的に何等の價值もなければ、歴史的遺物としては注意す可き價值あるものなり。

固は是れ等情と性とに付いて區別ある概念を有せしが其の詞の使用法は頗る不明確なるものなり。此の故に五經篇にては

人情有_三五性、

と云へり。前後の連絡より云へば六情が五性を有すと云ふにあらで人間に五性ありと云ふのみなり、

第三 王 充

王充は彪の門人なり。平日議論を好み、極めて人の意表に出づ、閉門して沈思に耽けり。社會の交通と相叶はず、論衡八十五篇を著はす。此の書今に傳へり。肅宗帝之を召したるも病を以て行かず。永元年中齡七十餘にして没す。死する前養性書十六篇を著はす。欲を攝して以て天然の性を

満足に維持せんとする者、漢代の著作としては歴史の意味ある者なり。

第一 學說一般

支那の思潮流れて漢代に到りし頃其の種類極めて多し。然れども漢代の思想は一には古を求むるに熱心なりし爲め、一には時勢が太平なりしたため、銳利ならざりき。殊に前漢の末に當りては五行纖維其他仙人等に關する迷信頗る盛んなり。光武帝の明主を以て猶且つ此れ等の迷信の潮流に陥れり。是れ等の迷信は實に思想の麻痺せる徵候なり。此の際に當り王充は傳説思想迷信等に對して一々反駁を試みたり。先づ其の人物を攻撃せし點より云へば彼は孟子を駁し韓非を駁し更に進んで孔子其人をも駁せり。刺孟、非韓、問孔等の著あり。而して古來の傳説迷信を破るに於ては書虛、變虛、異虛、感虛、福虛、禍虛、龍虛、禹虛、道虛等の篇あり。書虛とは書物に傳ふる社會上の謬を辨せる者、變虛とは天變人に應ずるとの妄を辨せる者、異虛とは穀物が一日にして生せりと云ふが如き異物のなきを辨せるもの、感虛とは天人感通の妄、道虛とは道教に所

謂仙人となりて去ること或は天に昇ると等の妄を辨せるもの而して福禍の虚とは因果應報は妄なることを辨せるものなり。凡て是れ等の篇にては、皆な是れ虚言なり、或は是虚妄之言也等の語にて結論の下されたるを見る。又談天、説日に於ては從來の天若くは日に關する説を駁じて自己の説を建てたり、其他誠日、卜筮禍崇、死偽等の篇あり。一は日に吉凶ありとのとに關する迷信を駁せるもの、二は其の不可信を云ひ、三の禍崇は人間或は動物が崇をなすの妄を辨せるもの、第四は人間が死して鬼となる事なきを辨せるものなり。

其の説く所は經驗的なり。今日の語を以て云へば物質論なり。漢代に於ける彼の位置は先秦に於ける荀子の位置と似たる所あり。兩者共に經驗的論説をなせり。然れども荀子よりも王充に於いて

第一、經驗的哲學の系統をなせるを見。

第二、其の理論人間に集中せられざるを發見すべし。

第二 自然的

儒教は天なるものを假定して之れを有爲的なものとせり。即ち天生萬民天命有徳者と云へる如き其の證なり。王充は儒教の此の思想を解して儒教は天地が殊更らに万物を創めたりとするものなりと考へたり。王充之れを駁して曰く

天地には決して之れを爲すと云ふとあるべき筈なし。凡そ之を爲すと云ふは慾ありて而して後口眼に表はるゝものなり。今日は雲霧の如きもの地も其の體は土なり。故に天地に口眼なきと明かなり。隨て之れを爲さんとするの意なきとも知るべし。

一言にて云は、充は宇宙に意志なきを主張するものなり。意志とは即ち精神的に或る觀念を作りて其の觀念を有形的現象に表はさむとする力なり。今王充は宇宙には此かる意志なしとするが故に此の點に於いては「シヨールペンハウエル」の哲學を全く否定するものなり。

然らば彼れ自身の思想は如何。彼れは宇宙には一元氣あるものとし、此の元氣活動して天地萬物を生ずるなり。初めより天地に萬物なる觀念

ありて之れを作るにはあらず。一元氣活動の結果が即ち天地萬物なりと云ふなり。恰かも男と女との如く男女は子を生まんとするものにあらず。其の結果として自然に兒を生むなり。其の所論全く自然論なり。彼れ又曰はく、之れを生ずると云ふは手足のとなり。天地が之れを生ずるとするも天地に手足のある理なし。故に天地萬物の生ずるは自然なると明けしと。

萬物は自然に生ず。其の中に於いて力に大小あり。形に敏鈍あり。而して此れ等が相ひ争ふて優勝劣敗の状態を演ずるなりと。王充は此く自然論を主張して此の點より太平の時、圖書を出せるは天地が之れを爲せるなりとの説や、又張良が黄石公に書を授かりたるは天が漢を助けんとせるなり等の説を排斥せり。

斯くの如き一元氣を以て萬物の生成を説くは一元論なるも又彼れは他の一元を導き來れり。是れ即ち太陽の熱なりとせり。此の熱氣が一切萬物の毒なる性質をなす者となせるなり。其の論據とする處は希臘哲

學史の冒頭なる「ターレス」など、異なるなく、極めて狭きものなり。以爲らく、一元の氣には毒と云ふ分子あるなし。毒は太陽の熱氣より來るものなり。其の證は楚越の人の唾は人體に當れば皮膚を腐爛せしめ。又火煙、眼中に入れば傷む。火は太陽の熱の變せしものなり。此の故に太陽の熱氣の毒なると明けし。此の熱氣を受くる甚しきものは虫にありては蜂、草にありては蕪、巴豆、治魚にありては鮭、鯨、鮫、人に於いては小人なりと。

第三、人間に關する意見

其一、王充は天地萬物は一元氣に由りて創めらるゝものとせり。以爲らく、各現象には一定の氣が與へらるる者なり。其の一定の氣あれば此の氣を維持するに相當なる形あるものとせり。而して其の物の命は已に形の成る時に定まれるものなりと。而して此の命には壽命の命もあり、貧富貴賤等の命もあり。幸偶篇に曰はく、

俱稟元氣。或獨爲人。或爲禽獸。並爲人。或貴或賤。或貧或富。富或累富。貧

或乞食。貴至封侯。賤至奴僕。非天稟施有左右也。人物受性。有厚薄也。

而して此の壽命の長短貧富貴賤の分るゝ所以は其の稟けたる氣に厚薄あるに由るものとせり。故に上の引用文の後に人物受性有厚薄也とあり。彼れの見解に據れば、氣と形と、形と命とは密に相ひ關係し、相ひ一致して居るものなり。人間の形には人間の氣と人間の命とあり。牛馬の形には牛馬の氣と命とあり。其の氣なるものは天地一元の氣なるが故に其の氣が變化せざる限りは其の命と形とは變化するを得ざるものなりと。其一例に曰はく、米を袋中に盛りたるが如し。米は氣に相當し、袋は形に相當する者。今此の米の分量を多くせば袋形も亦た從て大となる。氣が本となりて形は之れに相應して作られたるものなり。王充は更らに此の關係を他の方面より證しぬ。曰はく、人間が生ける時は歩み得るも死せば則ち斃れ、氣滅し形消す。即ち氣主となりて形は之れに從ふものなりと。故に人間牛馬其の他のもの等皆已に一定の氣を受けて成長せるからは之れに相應する形あり命あり以て變化すべからざるも

のなりと。其の言に曰はく。

器形既成不可小大。人體已定不可減增。用氣爲性。性成命定。體氣與形骸相抱。生死與期節相須。形不可變化。命不可減加。以陶冶言之。人命短長可得論也。無形篇

と。是は器の例を以て述べたるにて一度器が形をなせる以上は其の小を如何ともする能はざるが如くに人間及び其の他のもの已に形をなせる以上は其の形及び命を如何ともすべからざるを云へるなり。彼れ亦た曰はく人の氣を受くるや或は満ちて強固なるものもあり或は空しくして弱きものもあり。前者は命長く後者は命短しと。氣壽篇之れを要するに壽命の短長は已に先天的に氣によりて定まれるが故に如何ともする能はず。仙人死なすとか或は數百年の命を保つべしと言へるが如きは全く誤りなりと。

其二、先きに述べたる如く貴賤貧富も皆先天的に命によりて定まり居るものとせり。其の語に曰はく其の命富めるものは筋力自ら強く命

貴き人は才智自ら高く千里の馬の如きは頭、眼、足、蹄等好く相ひ調和す金祿篇。更に適切に貧富貴賤の命が先天的なる氣に備はり居ることを説いて曰はく。

人生性命當富貴者。初稟自然之氣。養育長大。富貴之命效矣。

是れに由りて之れを見る。貧富貴賤の氣に具はれる明かなり前項此の故に王充は命は人間の先天的に氣を受くる時にありとし、成長の後社會に立ちて活動をなさむとする時に天命を受くるとなきを主張せり。即ち周武白魚を得たるは、儒者は以て天武王に命を下せる徴なりとなせども、王充は以て然らずとなすなり。初めより武王は天下に王たるべき命を有せる者にして白魚を得たるとは單なる偶然の出來ごとに過ぎざるなり。此の故に人間に關する意見は其の先天的なる氣に集中せられ居るものなり。之れと同じ論據より王充は骨相に關して判然たる又卓識ある議論をなせり。其説は大に注意する價值あるが故に之れを次項に述べべし。

第四、骨相

此くの如く貧富貴賤及び壽夭は先天的に氣に因りて定まり居るものなり。然るに斯くの如く定められたる氣は之れに相當する形を必要とするものなり。然らば其の形は如何。此れ彼れが所謂骨相なり。然れども其の骨相なるものは單に顔面にのみ限らず、身體の部分をも含むものなり。彼れ曰はく、王者一度、命を受けて内以て性となし。外は以て體となす。體なる者は顔及び骨なり。生れて此の命を稟くるや、官吏の百石以上王侯以下郎將、太夫、元士、其の他、刺史、太守等、富貴の命を受け、生れながらにして其の面に表はるゝあり稟。故に王たる者は已に胎中に於て定まり居るものなりとせり。恰かも鳥の雌雄は卵の時既に定まり居りて孵化せる後、雄は勢強く他を壓するが如く、草木には大小あるも皆其の種の時に定まり居りて強者は生長後愈々強きが如く、王者は胎内にて已に衆人と異なる命を有し、出生の後衆人の長となるものなりと。此の故に王充の見解に由れば人の命は皆な肉體に表はれたるものなり。

其の語に人の命は天に稟く則ち體に表はるゝあり。其の表はれざるを察して以て命を知るは骨法の謂なりとあり。此の故に彼れは古來言ひ傳へたる黃帝は龍顏なりとか、孔子は稽顙にて犬の如かりしとの如き説を信せり。是れより先き、荀子は全く骨相を排斥して虚なりとせり。然れども其の主意は骨相の世に益なきを以て之れを言はざるを可とせしなり。未だ果して骨相の眞なりや否やに付て確見ありしに非ず。然るに王充に到りては其の一元的世界觀より必然的に骨相の眞理なることを演繹せり。

王充は單に貧富貴賤の如き運命が骨相に表はるゝのみならず、性質の如何等が皆な骨相に表はれ來るものとせり。其の證として以爲らく、越王勾踐は頸長く鳥喙なる故、共に樂むべきも與もに憂を共にする能はずと。此を以て范蠡は大夫種に勸め速かに去るべしと言ひたるも、隨はずして遂に種は殺され、又秦始皇は隆準長目、其の胸は鷹の如く、其の聲は犀の如くなる故に其の性殘酷にして恩惠少なしと云ふ。果たして然

りと。要之、王充は人間は一元氣によりて生せられたるものにて其の貧富貴賤及び性質の善惡等は皆な物質的に其の基礎を有するものとせるなり。當時に於いては實に卓見たり。之れを今日の科學に照見するに骨相は元より一部の眞理を含めるものなるが、其の他に其の人の教育腦髓の習慣、其の人の主義、其の人の體格の脩練等をも併せ考ふるに非ざれば決して貧富貴賤性質の善惡等斯く大範圍に亘りて論ずる能はざるなり。骨相篇

第五、性

人間は一元氣より生せるものなり。其の氣を稟くるに厚薄多少の別あり。茲に於いて善惡、仁怒、貧富等の諸差異を生ず。王充は斯く人間性質の差異は皆一元氣より生ずと云ひながら、其の氣に種類あることを述べず。只厚薄多少なる文字を用ゆるのみなり。之れを宋の哲學が氣に就いて清濁の種類を分てるに比すれば歴史の意味あるとを發見すべし。王充は性に付いては、至て綜合的なる意見を有せり。思ふに孟子の云へ

る性は善なるものを指せるなり。即ち孔子が生れながらにして禮を好みりと云へる如きは是れなり。故に性の善なるは中人以上なり。又荀子の云へる如く性の惡なるものもあり。即ち少しも推讓の心なきもの、如きは是れなり。然れども是れ中人以下の性なりと。又楊雄の言の如く、善惡の混じたるものもあり。是れ即ち中人の性なりと。王充は命に貴賤貧富の別ある如く性に善惡なき能はざるものとせり。是れ其の一元的世界觀より必然的に伴ふ結論なり。然れども彼れは小兒の時に之れを教化せば惡なるものも以て善となすべきなりとせり。王充は以上の如く一元氣の厚薄多少に由りて性質の善惡を生ずるものとなし、其の尤も厚く尤も多きものが即ち至徳の人にして即ち老子の如く恬淡として無爲なるものなり。氣を稟くると少きものは不肖にして爲すあるものなりとせり。彼れが不肖と云へるは即ち天地に肖ざると云ふとなり。即ち一元氣に似ざるの謂なり。一元氣は先きに述べたる如く至善にして無爲のものなり。氣を稟くる少きものは無爲なる一元氣に似る能はず。

從て有爲なるものとせるなり。彼れは一方には性の善なるは氣を受くるの厚多なるなりと云ひ、又他の處にては富貴の人は氣を稟くること多しと云ふ。是れに由りて見れば兩者を以て一なりとなすものなり。性本

第六、鬼

王充の鬼に關する見解は頗る觀るべきものあり。彼れ以爲らく、鬼とは人の觀念(王充は之れを思念と云へり)の表はれたるものなりと曰はく、觀念の存在する時は眼は無き物を見ると、斯の故に伯樂馬を鑑別するを學ぶ時は見るもの一として馬ならざるなし。又牛を解くものが目に生牛を見るとなしと云ふ。是れ其の觀念のみが存在して終に表はれたるなり。彼れは其の觀念の外に表はるゝは或は口より出で、或は耳より出で、或は眼より出で而して夫れ々々味となり、聲となり形となるものなりとせり。是れ今日の精神病學と髣髴たる所あり。今日の精神病學によれば忘想なるものは生理的に其の基礎を有して其の人は之れを消

滅せむとしても能はざるものなり。今王充の所謂思念なる者も此く生理的に基礎を有せる忘想なり。其の見解大に取るべき所あり。然れども耳鼻より出づるの點に至りては大に誤れり。

王充は鬼に關する當時の説を數個掲げたり。今其の一二を擧ぐれば、鬼は眼の光なり、或は曰はく、鬼は病の氣なり、或は曰はく、物は精なり、或は曰はく、人、鬼となるなり、或は曰はく、百怪の一なりと、是れ等の意見は當時の幼稚なる思想界に於ける迷信として其の名目を擧ぐるのみにて足れり。

第四 王符

王符は馬融、張衡等と友たり。其の家なきを以て當時に卑められたり。少より學を好み且つ節義あり。然るに當時の風俗は一般に相ひ薦引するものなり。符獨り俗に混同せず。己れの志を述べて潜夫論三十餘篇を著はせり。終に漢に仕へず。其の説は極めて雜駁なれども只漢代の思想の

一般を示すが爲めに主なるもの二三を述べん。

第一。儒教は天に則りて政を行ふ所謂拜天宗なり。王符も此の思想を稟けて人民治まれば天の心は慰み、五穀豊穰なり。之れに反して人民怨めば天心怒りて饑饉を承くるものなりと、而して人民の喜怒は一に天子の政治如何に存す。天子忠臣を擧ぐるか或は奸臣を擧ぐるかによりて其の兩端に分るゝなり。天は民を愛すると尤も篤く、天子以下諸の官吏は天に代りて此の民を治むるもの故に官は天の官にして私すべからざるものなりとなせり。忠貴篇

第二。彼れは愛日篇なるものを著はして曰はく。治まる邦の人民は常に閑暇多く、亂邦の民は之れに反す。其論に曰はく邦の邦たる所以は民あるが故なり。民の民たる所以は穀物あるを以てなり。穀物あるは人の力ある故なりと。人力あるは日の力あるが故なり。而して日力あるは君明かにして百官治まる故なり。若し百官亂るれば天下多用にして從て日の力を生せず。穀も生せず。邦の邦たる所以を失ふと。斯くして彼れは

百官の治まるとが邦の邦たる所以の源なりとなせり。此の見解は固より平凡なるも其の論歩に於いて採るべき者あり。

第三。自然論 王符も亦一元氣を承認せり。此氣別而爲陽爲陰。自陽生天。自陰生地。陰陽之和合。生人間。斯く天地人は一元氣によりて關聯し居るが故に人は以て天下を動かすに足るなり。天子政を治する時は天の氣は和ぎ。而して人も穀物も草木も皆な之れがために影響せらるゝものなりと、其の語に曰はく

先聖正已德。而世自化。

一切現象は皆氣なり。故に地の裂け水の流るゝも皆氣の作用なりとなせり。

第四。情性 王符の説によれば君子と雖も生れて知るにあらず。學問は智識を與ふるを以て主眼となす。恰かも光りの人目に於ける如く、學問は人の性をして道理を見せしむる所以なり。彼れは亦た人の性には極めて悪しきものありとなせり。然れども情性に關する意見は王符の主

意とする處にあらず、其の説王充に比せば遙かに疎略なり。
第五、其他王充と同じく骨相を信せり。又夢に關する説もあり。夢列彼れが兼愛、恬淡、無爲等の語を用ふるを以て見れば墨子、老子等の説をも參考せるを見るに足る。

第五 馬融

馬融は扶風の人、摯恂に學ぶ。永初四年校書郎中となれり。此の時鄧氏一族權を恣にす。當時廟堂一般の議論は武を廢して文を起さんとするに在り。馬融上書して其の非なるを陳す。遂に官を辭して故郷に歸へり。鄧后の爲めに禁錮せらる。安帝東巡せられしに際し、東巡の賦を奉り、又郎中となる。其の後屢仕へ屢退く。平素塾を開きて諸生を教ゆ。常に一千人に滿ちたりしと云ふ。馬融は博學多聞、諸書の註釋、賦、記、其の他著はす所頗る多し。延喜九年八十八歳にして没す。忠經は其の作として傳へらる。今吾人は之れに付て馬融の説を述んとす。

忠に關する説

第一、忠經は孝經に擬して作れるもの。彼れの見解によれば忠は君に仕る道にて又其心を一にするとなり。即ち忠とは君の爲めに其の心を一にするとなり。故に彼れは宰相の忠もあり、百官の忠もあり、兆人の忠もあり、各忠たる所以の形式を殊にせるものとせり。且つ彼れは天子の忠もありとせり。天子の忠は即ち先人に對して國家の爲めを計るとなり。故に彼れは忠を以て天下を安する所以の根本なりとなせり。
第二、彼れが斯く忠を重んぜし故其の孝との關係を研究するとは極めて必要なり。今之れを三段に分ちて説明せんとす。

一、彼れは忠と孝とは其の根本に於いては尤も一致する處あるものとせり。忠經の序文に曰はく孔子孝經を作りて其の中に君に仕ふるを言へり、君に仕ふるは即ち忠なり、故に忠と孝とは相待つものなりと。其の待つと言へるは即ち忠と孝とが其の根本に於ては相ひ

一致せるを意味せるに外ならず。

二、彼れは忠ならば其の結果孝となるべきことを認めたり。其の言に曰はく、

故君子行其孝。必[○]先[○]以[○]忠。竭[○]其[○]忠。則[○]福[○]祿[○]至[○]矣。故[○]得[○]盡[○]愛[○]敬[○]之[○]心。以[○]養[○]其[○]親[○]。施[○]及[○]於[○]人。此[○]之[○]謂[○]保[○]孝[○]行[○]。

三、彼れは忠なるものは必ず孝悌ならざるべからざるものなりとせり。其の言に曰はく。此のゆゑに君の法度を受け、孝悌を其の家に行ひ、稼穡に服勤し、以て王の賦を供するは是れ兆人の忠なりと。其の意のある處を推せば忠なるものは必ず其の家に於いては孝悌ならざるべからざるを云ふなり。

彼れは又た忠の最も必要なるを説きて曰はく、

夫忠而能仁。則國德彰。忠而能知。則國政舉。忠而能勇。則國難清。故雖有其能。必由忠而成也。仁而不忠。則私其恩。知而不忠。則文其詐。勇而不忠。則易其亂。是雖有其能。以不忠而敗也。

第六 鄭玄

馬融の門人に鄭玄あり。訓詁家として馬融の右に出づ。業成りて將に歸らむとす。融門人に謂て曰はく。鄭生今去る。我が道東すと。彼れ漢代に一般なる五行説を採用して經書を解釋せり。其の性に關する説に以爲らく。性は生れつきたる儘なり。即ち生之質也と。

結論

斯くして後漢の思想は氣なる文字を一種特別の意義に解釋し之れを以て萬物の本源とせり。性は一般に之れを論じて其の説雜駁なり。故に後漢哲學の成分を云へば氣と性となり。其の他に老莊織維説。神仙の流行あり。

先秦哲學は社會經營を中心として動起せるものにて其の勢頗る隆盛なりき。漢に入りて俄然其の勢は疲勞せり。前漢後漢皆な然り。然るに。此

の○際○に○當○り○佛○教○な○る○一○派○の○新○思○想○が○印○度○よ○り○注○入○せ○ら○れ○た○り○其○の○狀○
恰○か○も○希○臘○哲○學○衰○頽○の○徵○を○表○は○せ○る○時○耶○蘇○教○が○其○の○勢○を○張○ら○ん○と○せ○
し○に○似○た○り○今○吾○人○は○此○の○新○思○想○に○付○い○て○論○ず○る○處○な○か○る○べ○か○ら○ず○

第四編 厭世的思潮

第一章 社會的諸種の勢力

第一節 佛教の入來

列子の中に西方に聖人ありとあり。解するもの之れを以て釋迦となす。
莊子に身毒の國なる文字あり。解するもの之れを印度となす。斯の故に
先秦時代に於いても印度に關する智識が何分か存在せしとは疑なし。
前漢の劉向書を天録閣に校せし時、往々佛經あるを見たりと云ふ。哀帝
の時博士景憲等月支國に至り、浮屠經を受けたり。後漢の明帝夢に感じ
人をして印度に行きて經典を齎らさしむ。茲に於いて迦葉摩騰竺法蘭
の二人來り、四十二章經を譯せり。是れ支那に於ける佛教思想の濫觴な
り。今吾人は此の經文が如何なる影響を支那に與ふべきか。其の影響に
付いて陳述せん。

一、離 慾

離慾とは絶對的に欲を撲滅するなり。四十二章經に據れば世尊已に欲を離れたり。其の第一章に曰はく愛欲斷するものは四肢斷じて又之れを用ゐざるが如くなり。第二章は人は妻子舍宅に繋がるゝと牢獄よりも甚し。此れ等に對する愛欲を斷絶すべしとなせり。第十六章に云ふ愛欲の垢つきて道觀るべきなり。此れ等の說によりて愛欲を全く撲滅すべしとする。明かなり。尤も一言注意すべきは四十二章經は初心のものをして佛教に向はしめんとする入口なれば特に愛欲の斷絶すべき必要を説けるなると是れなり。支那に於いては欲を節するとはあるも欲を斷絶すべしとの説はなきなり。老子派の言ふ所に依れば道は虚靜無なり。斯の故に行爲は此の道に則るべしとなすのみにて未だ欲と性とを區別するとなし。老子派なる淮南子は性は虚靜無なるものにして欲は之れを蔽ふ雲の如きものとせり。然れども彼れ尙ほ欲を攝すべしと言へるも欲を離れよとは言はざりしなり。

二、心の觀念

此の經の主意によれば人心は透明なると鏡の如きものなり。愛欲は此の光を曇らすものなり。然るに畢竟するに一元論に歸するものなり。即ち欲は心の垢の特別なる状態となすなり。淮南子が其の性を以て玲瑯透徹なるものとし。欲を雲に喩へたるは能く此の經の意と類するも淮南子は判然たる二元論なり。

三、無 我

佛教によれば人間の體は水、地、火、風なる四元素。佛教にて四大と云ふに依りて造らるゝものなり。第二十章に曰はく其れ等四大を分拆しても我なるものは那邊にあるか。之れを把認する能はず。斯の故に無我なるものなりと。

四、無差別的觀察

第四十一章に、我は佛自ら曰ふ王侯の位を見ると隙を過ぐる塵の如く、金玉の寶を見ると瓦礫の如く、質樸なる衣を見ると弊帛の如く云々

あり。是れ無差別的觀察を教へたるものなり。支那に於いては儒教派は勿論、老子派に於いても斯く迄甚しき觀察をなしたるものあらず。

五、文字

其の他佛書の文字に於いて注意すべきものあり。即ち見性、無爲爲、無念、無所得、無明、因縁、清淨等是れなり。

六、教儀

此の外としては所謂供養起れり。第十一章に百の悪人に飯を與ふるは一善人に與ふるに如かず。千の善人に與ふるは一の五戒を持せるものに如かず云々、一の無念、無住、無修、無證のものに與ふるに如かず。供養は飯を供へて以て自家の幸福を祈るなり。支那にて祖先を祭るは忘れぬためなり。亦出家と云へるとあり、妻子を捨て落髮して佛教に入るとなり。

以上の諸項目が皆此の四十二章經に包含せらる。當時に於いては此の經文を讀み得たるもの甚だ少なかりしならむも、其の後漸次に其の影

響のありたるとは疑ふ可からざるなり。

桓帝の時、無量清淨平等經、般若三昧經、阿閼佛經等二十一部、六十三卷の譯成り、其の後安息國の僧、安清、雒陽に至り、經を譯すること三十九部、此の中始めて大乘經ありと云ふ。安清豫章に到り、寺を建つ、大安寺と號す。江、淮始めて寺あり。桓帝佛像を鑄造し、親く之を祭れり。靈帝の時、道行般若の譯成る、又般舟三昧經、古維摩經等の譯成る。稽古略に曰く、自水平至建安、緇素十二人、二百九十三部、三百九十五卷と。獻帝の時、下邳の相笮融佛詞を起し、人に課して經を誦せしむ、會する者五千人。又譯師輩出し、佛教漸く盛んなり。漢末に及び譯經總じて三百餘部あり。此の如き佛教の進勢や漢代の終ると共に終る者にあらず。滔々として陵に裏り、天に滔らんと欲す。此の佛教は本來厭世的なるが故に此くの如き勢を以て蔓延したる以上、支那人心をして厭世的ならしめたるとは疑ふ可からざるなり。少くとも非社會ならしめたるとは疑ふ可からざるなり。

第二節 道教派の勃興

佛教思想が此く社會に於ける一大原動力となりつゝあると同時に他の一方には前漢の始めより流行し來れる黄老の道は社會に於ける一大原動力となれり。鉅鹿の張角なる者あり。篤く黄老を奉じ、符水を呪して以て病を療し、弟子を四方に遣はし、人民を誘ふ。十餘年の間に加はる者數十万人の多きに至れり。三十六部あり。一部大なる者は一萬餘人、小なる者も六七千人あり。各々渠帥を立つ。靈帝の時一時俱に起る。皆黄巾を著け、至る處人家を燔き、富財を劫掠す。旬月の間にして諸州之れに應ずる者響の如し。此く宗教的の雄大なる原動力が社會の内に勢力を占めたることは最も注意すべき現象なりとす。

第三節 宦官及び黨人の勢力

然るに漢の朝廷には初めより宦官なる小人あり。朝政を紊亂する惡分

子となり居れり。然るに宦官は天子に親しきが故に常に天子に用ひらる。即ち朱穆宦官を罷めんと請ひし時、桓帝大に怒れりと云ふ。漢は光武帝の時より名節を獎勵し、氣節の士尤も多し。氣節を尙ぶの風は社會の弊竇を見るに従つて激發せらるゝ者なり。今漢は宦官の朝廷を蠱毒するの勢漸く浸潤せるあり。慷慨氣節の士は豈に起らざるを得んや。即ち所謂黨人なる者生せり。黨人は絶へず宦官と衝突せり。黨人は宦官を卻けんとするれども宦官は却て黨人を捕へて獄に投せり。黨人は天下興望のある所故に黨人の獄に投せらるゝや、天下の人心朝廷を離れざらんと欲するも得べけんや。當時黨人が如何に國民の興望を負ひしかは左の事實に由りて之れを知る。黨人李膺等廢錮せられたる時、名聲愈々高し。范滂南に歸りし時、士大夫之れを迎ふる者車數千輛ありしと云ふ。海内の士互に相ひ標榜し、之れが稱號を爲る。三君、八俊、八顧、八及、八厨あり。皆人間の師範たるに足るを謂ふなり。黨人も亦漢に於いて一大勢力たるなり。故に黄巾の賊起るに及び、朝廷天下の之れに應せんことを恐れ、人

心を收むるがために黨人の禁錮を解けり。

第四節 漢末の諸勢力の相互影響

此くて漢の社會に於て有力なる原動力は左の如し。

- (一) 佛教の勢力
- (二) 黄巾の宗教的勢力
- (三) 黨人の道德的勢力
- (四) 朝廷の俗的勢力
- (五) 宦官の朝廷に於ける勢力
- (六) 豪傑の俗的勢力

勢力とは何んぞや。人心の結合する所なり。社會の人心は此等の勢力に凝結して活動せるなり。朝廷は日本に於けるが如き立派なる權威あるにあらず。人民は漢室を戴くの義務なし。剩へ教育は普及せず。人民は漢室を尊ぶ所以を知らざるなり。故に人に抜き出るの士あらば、人民は之

れに響應し、一大原動力となり得ると明かなり。況んや、宦官の勢力が朝廷に侵入するに於てをや。前述せる諸種の勢力は獨立して存立するに至れり。彼れ等の間には之れを統一するの因子あるとなきなり。

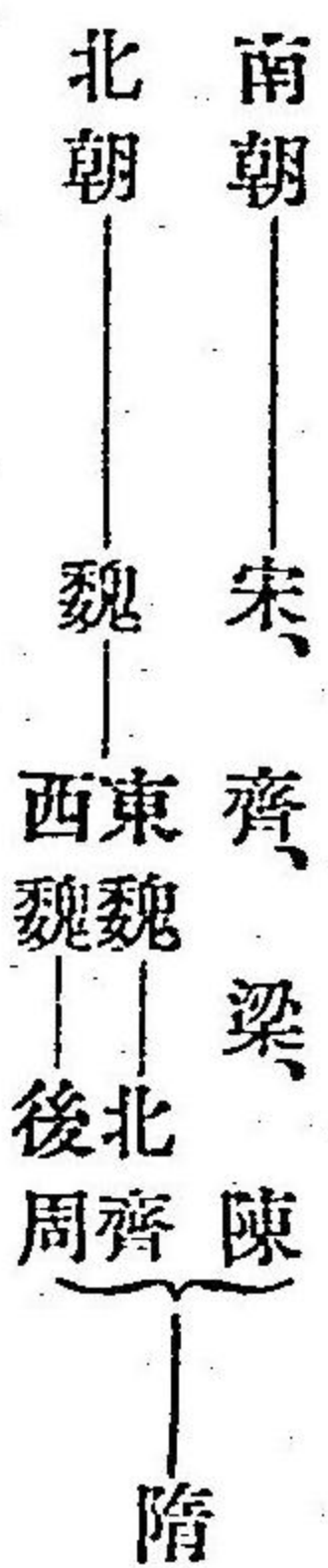
黄巾の宗教的勢力は朝廷の俗的勢力に反する者故に爲めに撃碎せられたり。宦官の勢力は一方に於いては黨人の勢力を鎮滅せしめ、一方に於いては朝廷の勢力をして腐敗せしめたり。而して宦官の勢力は豪傑のために消滅せられたり。是に於て漢末は(一)厭世的となり、個人的となれり。(二)英雄豪傑の衰微せる朝廷の上に立ちて權力の消長を争ふの狀態となり。袁紹、董卓、曹操、袁術の如き是れなり。(三)終に豪傑の割據となれり。孫權は江南に據り、劉備は蜀に據り、而して曹操は天子を挟むで中原に令す。漢土分れて三となる。其の後司馬氏のために一統せられたりと雖も厭世思想の反動として清談流行し、佛教も流行し、朝廷の風俗大に亂れ、天下は平かなる能はず。況んや、曹操の惡例たる、漢に逼まりて位を禪らしめたり。是れを以て當時の君主皆之れに倣ひ、更らに甚しきを加へ、帝王も又大徳

あるにあらず。故に下の視ると軽く、爲めに三國六朝の王其の終りを全
ふする者鮮し。

第五節 夷狄の勢力

之れに加ふるに夷狄の侵入せる、其の甚き前古未だあらざる所なり。漢
魏以來羌胡鮮卑の降る者塞内の諸郡に居り、一群をなし居りしが、晉室
の亂るゝに及び各々勃興して中原に侵入せり。其の中に付いて劉淵な
る者あり。最も強し鮮卑の慕容廆も亦鮮卑の大單于と稱し、遼東より徒
りて徒河に居る。鮮卑の拓跋氏も亦た大なり。巴西の氏李特も亦た衆二
萬を以て廣漢に據り、其の後遂に成都に入り、成都の王と稱す。西晉は漢
のために滅せられ、東晉は江南に建てり、而して夷狄の江北に國せる者
十六國あり。匈奴、鮮卑、羯、氐、羌の五種に屬す。是れ等の中に付て拓跋氏の
勢方さに熾んに、諸國を滅して之れを併呑し、國を魏と號す。此に於て漢
土二大國に分る。一を南朝となし、一を北朝となす。

此れ異人種の感情の相互に満ちたる時なり。然れども夷狄が支那の本
土に入りて一大帝國を建てたるは之れを始めとなす。茲に至り、夷狄も
亦た支那化せしとは疑ひなし。南北朝の順序を擧ぐれば左の如し。



第六節 社會の統一

魏の献文帝は黄老浮屠の學を好み、其の子孝文帝、恭儉學を好み、禮を制
し、樂を定め、又國俗の固陋なるを惡み、胡服、胡語を禁じ、都を洛陽に移し、
姓を元氏と稱し、諸弟のために中國名族の婦女を娶らしむ。是れ一例な
りと雖も夷狄が中國に同化せんとする傾向は常に免る可からざるな
り。然れども人種の觀念は容易に去る可からず。南北は一統し難し。

茲を以て(一)人種の觀念、(二)禪讓の餘弊、(三)風俗の腐敗に伴ふ王公の奢靡
より社會は一なる能はず。其の後隋の高祖文皇帝、漢人を以て北朝の禪

を受け、節儉を事とするに及び天下は南北一統せられたり。然れども二世煬帝奢靡を極むるに及び、天下の人民其の賦に絶へず。英雄は此の社會心意を代表して興り、諸方に割據せり。

第二章 厭世的思潮に伴ふ思想

第一節 養性論

第一。漢末に在りては佛教極めて盛んにして其の翻譯せられたる經書の數凡そ三百餘部あり。斯くの如き勢なる故に有名なる牟融其の人の如き其の中に併吞せられぬ。牟融は漢の大尉なり。天下亂れて己れを顯はす時にあらざるを察し、老子佛教を深く研究し、思ふに老子は其の身を修めて萬物其の心を干さず、天下も其の樂を換ゆること能はず、天子も之れを移すこと能はず、眞に所謂眞人と云ふべきなり。佛教は其道廣大にして最も吾人の精神を満足せしむるものなりと。是に於いて尤も力を佛教に注げり。然れども彼れは本來の儒者なりしかば又儒教

をも忘るゝこと能はず。著はす所、理惑論あり。此の書は必ずしも系統を成せるものにあらず。佛老儒の三教を合せて其の長所を述べたるなり。然れども其の思想は未だ圓熟せず。主として佛教を辯護せるものと見るべし。或る人佛の長所、出家、薙髮、人相、死生、更生等を譏るに之れを辯護したるものなり。之れを辯護するため、儒教及び老子の二書も亦た佛教と引き説あることを引用せり。其の書の中神仙を排斥せる者あり。曰はく神仙は穀物を食はずと云ふも此れ本儒教、老教に於いて共に見ざる所なるのみならず、神仙を學ばんとして僻穀したるため死せし者已に三人に及び、其の説の暴なる之れより甚だしきはなしと。當時神仙の道は一般に流行せるが當時の賢人たる牟融の如き已に之れを排斥せり。又佛教に更生の説あり、之れを辯護するの條に曰はく、儒教に於いても人間の死するや、屋に上りて他生を呼ぶにあらずや。是れ魂を不死とするなり。魂は譬へば草木の實の如きものにして更らに一個の草木となるものなり。牟融の社會に於ける位置は佛教の潮勢が如何に盛なり

しかを示めず存す。彼れは佛教の潮勢の中に巻き込まれ、其の勢を助けしものなり。

第二、佛教が斯く洪水の勢を以て漫延するに至りし其の勢を助けしものは實に時勢なり。佛教は實に厭世的思潮を喚起せし一原動力なり。然るに一方面より見る時は當時の社會現象に影響せられたるなり。今や天下は頗る亂れて一般に厭世的の傾向を生じ來り。其上、此れより先き漢家は外戚の親絶へず權を擅にし、其の患絶ゆるとなかりき。之れに加ふるに宦官の朝廷に在りて横暴を逞ふするあるがために賢人君子は皆な地方の長官となりて去りにき。於是漢の宗室亂れ、而して英雄豪傑諸方に起り、終に天下大亂の世となれり。之れがために厭世の觀念頗る強められたり。周秦の亂を経たる漢の天下は稍々厭世に傾きしが漢末の亂を経て人心更らに厭世に傾けり。

第三、斯くの如き厭世の盛んなる結果として個人は社會に望みなく、一身を善くせん方に傾けり。此の故に漢末より三國六朝に亘り、殆んど

個人主義が行はれたるなり。西洋哲學史に於いても同一なる例を發見すべし。クローザン曰はく「ローマ」衰へて人心は已に存在の望を絶ち、個人主義に傾けりと。

Est l'âme, abandonnée par tous les grands intérêts pratiques de l'existence, tombée à la merci des caprices d'un oisif égoïsme (Victor Cousin. Hg. P. L. P. 174p)

此の故に日本に於いても鎌倉以來天下大亂の中には必ず個人を善くする所以の禪宗行はれたり。今支那に於いて如何にして個人は社會の苦痛を免るべきか。從來の支那に存在せる思潮を探究するに三綱を發見するを得。

一、老莊、二、神仙、三、佛教

一、老莊は虛無恬淡を以て主義となし、以て社會の苦痛を免れしむるものなり。厭世的なる漢代には頗る流行せしものなり。

二、神仙は通常其の身を養ふを以て本務とせり。此説を唱へたるは淮南子に初まれり。淮南子は人間の性は虛靜なるものなるが故に性を

養ひて以て虚靜的に生活せざるべからずとなせり。其の末流に至りては人間は精神の或る状態に於いては神と交通し得るものと考へ終に所謂神祕説となれり。

三、佛教は未來の幸福を希求するものなるが故に皆な此れに由りて以て現世の苦痛を免んとせり。此の故に漢末より三國六朝に亘り是れ等三種の潮流中尤も勢力あるものなり。大抵の學者は皆此の一個二個以上を調和せり。然るに支那に在りては儒教の勢力非常に盛んなるものにして是れ又一の潮流となりて混入せることは固より當然なり。隨て三教調和あり、二教調和あり。

第四、此の潮流の中にある學者は如何なる思想を持せしかは豫想するに難からず。已に述べたる牟融其の人の如きも此の潮流内の人にて其の外にも又二三あり。即ち左の如し。

天隱子

一、凡そ人は自然の靈氣を受けて生るゝ者なり。彼れは靈氣を以て人間の本性 *Essence* となし、之れを發揮して世俗の爲めに亂されず、邪惡の爲めに誘せられず、超然として世俗を抜んでたる如き人を稱して神仙となすとなせり。

二、彼れは靈氣を以て本性となし、其の行爲が靈氣と同じく我に超然たらんとするなり。其の思想は分拆的にあらずして総合的なり。即ち靈氣の中に内包的に行爲の原因が含まれ居ると云ふにあらずして靈氣の屬性に類似せる行爲をなさんとするなり。斯くの如く神仙に達するも突如として出來得るにあらず。必ず漸次に進むべきものなり。彼れは之れに達する手段を分ち之れを漸門となせり。漸門に五あり。第一を齋戒となし。第二を安處となし。第三を存想となし。第四を坐忘となし。第五を神解となす。斯の中第一を修め得ば第二に至り、第二を修めて第三に至り、第三より順次斯くの如くして神解に至り以て神仙となるなり。

三、齋戒とは單に沐浴して汚を去るのみならず、食物を節して饑飽を

適度にし皮膚を摩擦して冷氣を去るなり。従て久しく坐し久しく立ち久しく勞役するは齊しく之れを戒しむ。然れども彼れは食物を絶て云ふにあらず。人間は五常の氣を受け、五行の物を食す、故に先天的に食物を廢することは能くすべからざるなり。只だ彼れは形堅ければ則ち氣全く、肉體健固なれば靈妙の氣充全する者なりとなせり。

四、安處とは室の明と暗とを適度にし其の中に座臥することを云ふなり。思ふに屋根低ければ陰氣盛んにして魂を傷け、屋根高ければ陽氣盛んにして魂を傷く。故に病生ず。人間は明暗を適度にし、南に向て坐し、首を東にして臥す可きなり。彼れが斯く明暗に付いて云ふ所以の者は内は以て心を安んじ、外は以て目を安んじ、心目皆安ければ則ち身安しと云ふを以て明かなり。明暗已に然り。況んや事多く慮多く情慾多きが如きは人間の精神并らびに肉體を破る所以として之れを排斥せり。要するに彼れは靜居讀書して以て心身を擾亂せしめざらんとするなり。

五、存想とは彼れの解釋に依れば目を閉づれば自己の目を見、心を受むれば自己の心を見、我が神を存し、我が身を想ふにありと。心を客觀的に外部に馳せず、主觀的に内部に修めて靜かならしめんとするなり。靜かにすることを稱して存想と云ひ、又復命と云ふ。是れ修行の成行せし處なり。

六、坐忘とは是くの如くして更らに一步を進め、道を行ひて其の行ひを知らず。物を見ても其の見るを知らず。斯くの如き状態は一切を遺忘し而かも其の行は倫理に適はんとするものなり。彼れは此の状態を以て神が宿れる状態となせり。即ち天然の靈氣に達したる所となせり。此に至れば神變と不可思議とを有し得る境界となせり。然れども吾人は彼れが新しき眞理を發見し、此の眞理に合體したるものに非らざるを注意せざるべからず。彼れが本性の靈氣に歸ると云ふは主觀的に又個人的に精神修養の結果一躍して絶體の域に入り込みたるものと妄想したるに外ならざるなり。彼れの思想の程度は實に左の問答によりて伺ひ得るなり。